宗教哲學目次

緒論……一—二三
宗教思想の發達……一
宗教研究法……五
神秘教……八
宗教哲學本編
スピノザ……二四—六八
ライプニッツ……六八—一一九
ウオルフ附ベールライマルュス……一一九—一三八
ヘルベルト……一三八—一四二
ホッブス……一四三—一四八
ロック……一四八—一五二
シャフツベリラ……一五二—一五七
ジョン、トーランド……一五七—一六一

マーチュー、チンダー……一六一—一六四
ダビッド、ヒューム……一六四—一七四
レッシング……一七四—一八六
カント……一八六—二三二
ハーマン……二三二—二三七
ハルデル……二三七—二五五
ヤコビ……二五五—二六六
ゴエテ……二六六—二七三
シラー……二七三—二七七
ノバリス……二七七—二八三
フィヒテ……二八三—三一八
シュライエルマッヘル……三一八—三三六
シェリング……三三六—三七六

宗教哲學目次終

宗教哲學

文學博士　井上圓了　講述
哲學館編輯員　筆記

緒論

(宗教思想の發達)

是より余が理論的宗教學を講述せんとするに方り、先づ宗教哲學の起原を陳ぶべし、抑宗教を以て一の哲學として研究するに至りしは最新のことにして、今を去る凡そ二百年前に始まれり、然れども宗教と哲學とは元來密着の關係を有する者にして互に分離すべからずと雖も、其思想發達の順序には自ら先後あり、今宗教を以て一の組織ある學問とせずして、單に宗教と云ふ思想上より言ふ時は、哲學思想より先きに發達し、是より哲學思想生じ來れるものなりと云ふべし、凡そ何れの國にありても皆神代史なるものあり、是れ最も古き歴史上の思想を以て其國の宗教を組み立つるものなり、例せば印度國中最も古き開闢說なる「バラモン」教が同國の宗教となれる如き、「ペルシヤ」の拜火教が同國中最古の開闢說にて、

同じく其國の宗教となれる如き是なり、希臘國にありても太古の神代史を以て宗教とせり、彼のソクラテス氏が自害を命せられしは、實に氏が哲學思想を以て之を改良せんと試みしによる、此に由て之を觀るに宗教思想の發達せしは、最も古きとにして、是れより哲學思想の發生するに至りし者なり、之を要するに宗教と哲學とは、其「思想發生の期限」には前後の差ありと雖も、其發生の原因に至りては更に異なるとなし、今其所以を尋ぬるに、人間の此世に在りて智識の未だ開けざる時に方りてや、風雨雷電の變、晝夜の交替、寒暑の來往、其他百般の天災地變、一として奇異なる思ひを爲さゝるなし、此不思議の念即ち宗教及哲學思想の胚胎する處なり、而して人の最大有力者を立て此等不測の出來事を以て其仕事に歸するに至り、始めて宗教を形成せし者なり、然り而して人智一ひ開け、其有力者は果して如何なる者歟、神なるものは眞に實在するものなる歟を疑ふに至り、此を研究して益、有神の說に安んずる能はず、遂に宇宙萬物及其變化の原因を既知界中に定むるに至れり、是れ即希臘のターレス氏が始めて水を以て之が原因としたる所以なり、爾後哲學者相繼で起り、皆宇宙以內に其原因を求め、或は空氣、或は火、或は地風等、各考定する所によりて其說を異にするに至れり、是に由て之を觀れば、宗教思想と云ひ、哲學思想と云ひ、共に同原因より起りたるを知り、又其先後の次第をも知るべきなり、然らば其哲學思想なるものは先づターレス氏を以て鼻祖となすべし、氏以前にありても幾分か其思想のありしことはホーマーの詩を視ても知ることを得と雖も、是亦宗教思想より發生せしものなり、ターレス氏以後、宗教と哲學とは反對の勢を以て進歩し、哲學は恰も宗教の敵手となりたる有樣なりき、今其兩者の關係を以て一首の歌を作るに譬へんか、宗教の方にありては恰も古人の詠し置きし上の句を取りて、之れに續ひて下の句を附會せんとする如く、哲學の方にては上の句其者迄を更作して、新たに今日に適する一首の名歌を作り出さんとするが如し、語を換へて之を言へば、宗教は保守なり、哲學は改進なり、

ターレス氏以後哲學者續々輩出して哲學思想を振起し、其天神に與ふる解釋の如きは大に一般人民の信する所と異なりしを以て、自然の勢世間の宗教と互に抗排せざるを得ざるに至れり、是を以てソクラテス氏は一身を犧牲にするに至りしも、其後哲學者前後相繼で起り、哲學思想一層發達して遂に宗教思想を壓伏するに至

れり、

然るに形勢一變羅馬に入るに及び、宗教の勢焰漸く加はり、遂に哲學を凌駕するに至れり、今其理由を探ぐるに、當時羅馬は哲學思想甚淺くして、實際の事は大に發達したるも、希臘の如き理論上の學問は復た見るべくもあらず、故を以て從來發達し來りし哲學思想は全く地に落ちたるなり、此時に際し耶蘇生れて羅馬及希臘の宗教を併せ大に改良を加へ、其徒弟の盡力により更に一層の勢力を增せり、其初め羅馬は耶蘇教を嚴禁せしを以て久しく勢力を得ざりしも、內部を顧みれば之を信奉するもの日一日より增加するに至れり、

國民の氣風既に耶蘇教に歸向するの時に方りコンスタンチン帝位に即き、專ら國民の葬心を牽かんと欲し、先きの禁令を解きたり、是に於て耶蘇教大に盛にして其勢世界を支配するに至れり、

然るに中世の末葉に及び、煩瑣學派なるもの起りて、古來の宗教を妄信せず、種々の解釋を試み、此に理屈を加へ、稍學術的に論究するに至りしが、近世の始め此學益〻發達せり、是即ち宗教を學問的に研究せし初めなりとす、

(宗教研究法)　宗教を研究するの法二派に分る、其一は宗教を宗教とし、他の學問と全く異なるものとして、研究すべしと云ひ、他の一は宗教も他の學問と同一の道理によりて研究すべしと云ふ者是れなり、尙之を詳述せんに、前者は元來宗教なるものは理學哲學等と其性質異なるものなれば、哲理中如何なるとあるも此に依て說明すると能はず、全く神の感通に賴りて吾人の正に其眞理を悟入するものなりと主張す、此法近世の初年に起りたるものにして神智教(秘密教)の如き是れなり、其人心の上に神の感通を待ちて萬事を知ると云ふより名づくるものにして、原語のTheosophical Mysticism(セオソフィカル ミスチシズム)是れなり、故に此を以て學術上の研究と言ふべからず、又宗教哲學と稱するを得ず、何となれば吾人の有する學術思想に依て研究するものに非らざるを以てなり、先づ直覺的宗教心とも名づくべき想像的の考を以て講究するものなれば、後者にありては全く之と異なり、方有自然の道理によりて眞理を探究するものにして論理的討究なり、此法の始めをなしたるものをスピノザ氏となす、スピノザ氏以前哲學的に神の何たるを說きし人なきにあらずと雖も、此等の人皆神の性質如何を說き盡すと能はざりしを以て、宗教哲學首唱の名はスピノザ

氏に歸せざるを得ざるなり、抑スピノザ氏等の論ずる神は想像上の神にあらず、易の大極の如く、佛の眞如の如き理想の意義にして、此神と物心の關係如何を說くにあり、此點より觀れば、宗教哲學の研究は恰も純正哲學に異なるとなきが如しと雖も、純正哲學は其範圍頗る廣くして物心神の三躰を通じて說明し、宗教哲學は重に神の如何に關して說明するものなるを以て其範圍頗る狹し、換言すれば宗教哲學は純正哲學の一部に過ぎざるなり、

凡そ神に就きての說、古來其變遷甚しく、太古にありては多神教說にして、遠くは日月星辰より、近くは禽獸草木に至るまで皆之を神とせり、後世に至り其多神教說に滿足せず、此等多神を包括して一大神となし、且之れを遠きに求めて宇宙以外に置き、此に歸するに世界の創造萬物の主宰を以てせり、然れども此一神と萬物との關係を說明するに至りて亦滿足するを得ず、遂に一變して古說に復し、此世界は神なり、萬事萬物皆神ならざるなしとするに至れり、此を皆神教（パンテイズム）と稱す、然れども其神說の起點なる多神と、終點なる皆神とは其說自ら異なり、前者にありては日月山川草木禽獸等其現實物を以て神となしたるを以て、遂に進んで一神說となりしものなれども、後者は萬物の眞本躰を意味するものなれば、此神は純然たる絕對、若くは理想、若くは眞如、若くは不可知的の名稱を附して可なるものなり、

上述の如く太古野蠻の時既に多神教あり、一轉して一神教となり、再轉して皆神教となれり、其多神と皆神との似て非なる斯の如しと雖ども、而も一神との如き甚しき差異あるにあらず、此に由て之を觀るに神に就ての思想は或は進むが如く、或は退くが如く、其進むを退くと云ふか、退くを進むと云ふか何れなるかを疑ふに至る、然れど其進むが如く退くが如きは、直行せずして循環するを以てなり、故に余は進歩すと云ふことを解して循環の度數を重ぬるものなりとす、此事たる獨り宗教上に止まらず、喩へば政治の上に於ても支那の昔、八元八愷を四方に徵して治を弼けしめしとあり、是恰も今日代議士を諸國に招集すると同じく、只國家の狀態古今單複の差あるのみ、之を要するに宗教哲學の研究は古今同一と云ふべからざるも、稍古に似たる處あり、唯其異なるは古代は空想に本きて起り、今日は推理によりて知るの別あるのみと謂ふべし、

以上宗教を研究するの二法、即ち第一は宗教を宗教として研究する法と、第二は宗

教を哲學として研究する法とあり、第一は第二より先きに起りし神智教にして、第二はスピノザ氏より始まりしとを說けり、以下神智教に就きて少しく述ぶる所あらんとす、神智教は神知秘密を義とするを以て左に之を神秘教と名くべし、

（神秘教）　今日に於ても或る宗教家は此神秘教の研究の方法を取る者あり、其法吾人の心中に別に宗教心を設けて神と感通し、以て宗教の眞理を觀ずるものにして、即ち神の啓示を以て宗教を立つるものなり、此神秘教中有名なる一人をマイステル、エッカールト氏とす、氏は獨乙の人にして第十四世紀の初年に宗教學者となりて世に現はれたり、今其說に依るに、天帝は此世界を離れて別に遠く存在するものにあらず、常に此世界と關係を保ち、此世界の內部と相通じて存するものなり、又吾人の精神なるものは全く神の一部分なり、故に此精神上にて神躰を觀察し、又神と交感するを得と、是れ氏の說の大要なり、氏又耶蘇教の三位一躰說を唱ふ、其考ふる所を觀るに、三位一躰は獨り神と耶蘇との上にあるのみならず、一切の人間と神との間にも精靈の感通あるものなり、天に在る處の神、地に居る處の人、同じく神にして、其天に在るものは親なり、地に居るものは子なりとし、以て三位一躰說を廣く世

間一般の人間に及ぼし、天帝の子は獨り耶蘇のみに限るに非らず、全人類悉く天帝の子なりと說けり、氏は又神は造物者なりと云ふは、神に造られたる人間のある故なり、造られたるものある故に造りたるものあるなり、即ち造物あればこそ能造の神あるなれ、吾人が神に依りて此處に存在し、神に依りて此處に獨立せり、若し神なくんば吾人此處にあらざると一般にして、若し吾人なかりせば神ありと云ふを得ず、此二者相對立して其一なければ、同時に他の一もなしと云へり、此れ恰も哲學に所謂相對あればこそ此處に絕對あれとの說に符合せりと云ふべし、即ち相對は絕對に依りてあり、絕對は相對に依りてあるものなれば、二者互に其一を缺くべからずと云ふもの是れなり、神と人間とは即ち此相對絕對の關係と同一にして、神を絕對とし、人間を相對とすれば、此神と人間とは相待ちて存し、神の內に人間を含むと、同時に人間の內にも神を含みて、二者同一の關係を有するものとなる故に、氏が此世界を造りたるものも、又造られたるものも、皆其躰神に他ならず、然るを神外に人間あり、人間外に神ありと思ふは誤れりとなしたるは、全く哲理に背ける者にあらずと謂ふべし、氏は又此神人歸一說より善惡論を推演せり、凡そ惡なるものは吾人

人類を以て神の外に存するものと思ふより生ずる所以にして、善なるものは吾人人類を以て其躰即神なりと考ふるより生ずる所以なり、吾人の心は全く神の分子にして、直ちに神に歸するを以て、神は心に顯はれ、其心は即ち善となれども、若し神と吾人の心とは遠く分離したるものとすれば、其心は已に神に背戻するものにして諸惡の隱るゝものとなると云へり、氏の此說は哲學上頗る興味あるものにして、稍、佛敎所說に近きものなり、今一歩を退き、世の通俗に稱する所の神とは如何なるものかと云ふは、其所謂神は吾人の外に遠く離れて外界に存在するものにして、其冥助を受くるは、恰も人間が此社會の或る他人より恩惠を受くるが如し、即ち一國主、或は富有なる人、或は高位高官の人は、世人頻りに此を尊敬し、或は其の金力に賴り、或は其權力を借り救助せらるゝと同じく、神は此等高等人物よりも尙數層上位に在ますものなれば、此神を崇敬すれば助けを受くるものと考へ、以て禮拜謹仕す、是即ち神に對する通俗の說にして、エッカールト氏の說を去る遠しと謂ふべし、吾人を離れて神なく、神を離れて吾人なし、此世界は神より成るものなれば、神は吾人の全部分なり、吾人は神の一部分なり、神が一切万物を包含すると共に、吾人一切

万物を網羅包有するものなりと云ふは、即ちエッカールト氏の說にして、佛敎に所謂眞如は万物を含み、万物眞如を含むと云ふに同じ、吾人の心は神の一部分にして、若し吾人が此世界は神のみと考ふる時は善なり、之に反して神の外に存するものと考ふる時は惡なり、純然の善とは吾人が全く神に化せしを云ふ、而して神化すとは神力の助けによりて此世界の念慮を脫去する事にして、吾人が之をなすには吾人の有する智情意をして一途に纏め、其心を安靜にし、心中思念する所は唯一の神德のみとなすにあり、換言すれば心中唯神を念ずるものにして、万物及自己に愛着するの念を除去するにあり、此の如くする時は吾人始めて神に歸し、神の性質に變化し、又神を見るとを得るなりと說けるは、全く普通の耶蘇敎說に反し、佛敎所說の一心に阿彌陀佛に歸向すべしと云ふに近しと謂ふべきなり、

今氏の說を見るに、吾人々類は心を神に一任すべしと云ふ、然らば則ち吾人は自己の心を抹殺し、自己の身躰を死物となし、唯神命是れ從ふと云ふとかと云ふに、決して然らず、吾人々類は迚角外物に迷ひ、自己に執着し、萬物に愛戀するものなれども、是れ惡念なるが故に斯の如き不善の思想は一切之を除却し、唯眞正に神を念ずる

時は自然吾人の心に自由を得るものなり、吾人の心に自由を得ずして唯神にのみ支配せらるゝと云ふに非ざるなり、要するに外物に惡念するとを斷滅して、一心神を信ずる時は、心中に自由を得るものにして、決して初めより器機的に神の支配を受くと言ふには非ざるなり、尙換言すれば吾人の心は神なる故に、心を專らにして神なる一念を置く時は、茲に神の動作我心の上に發現して自由を得と云ふにあり、而るに若しも吾人々類にして前に反し神を信ずるとなく、外物に心を奪はるゝ時は長く罪人となりて、復た神に歸するとを得ざるものとせり、以上述ぶる所によりて、エッカールト氏所說の大要を知るべし、其說當時の宗敎家と異にして、宗敎哲學の名稱を附するも可なり、然れども氏は未だ宗敎を以て哲學と同一視して研究せしにあらず、宗敎を以て理學哲學と異なるものとし、一種特別に研究せしを以て、之を神秘敎と名づくるなり、

此エッカールト氏の說は日耳曼に於て一般の學者の容るゝ所となり、後ルーテル氏が宗敎を改革せしもの主として此說に基きたるものなり、其より獨乙の宗敎家此說を採りて曰く、吾人が神を思想上に浮ぶるとを得るは、即ち吾人の心が神に達するを得るにより、或は神が吾々の思想に達するによる、果して吾々の心が神を想像するを得とせば、則ち吾々の心は神の一部分なり、然らば則ち一切の人類其躰即ち神躰にして、吾人々類の究竟目的は神の本躰に向つて進むにあり、故に此世界は不生不滅なる神の世界にして、所謂天國なりと、之を佛說に對照するに、我身を離れて佛なく、此土を離れて極樂なしと云ふに等し、又曰く、吾人は神を離れて別に存すと云ふ如き一の私見を抱き易きものなり、此私見は所謂我にして神にあらずと、今試に人類の心を二種に分ち、其一を我心即ち神と考ふる者とし、他の一を我心神に非ずと考ふるものとするに、若し其考後者にあれば、地獄或は惡魔の世界にして、前者にあれば、極樂世界なり、即ち神に背くものは全く我なる私見にして、凡ての罪惡は此私見より生ずるものなり、若し之を除き去れば、是即ち天國なり、極樂なり、然るに吾人は私見を却くると頗る難くして、常に罪惡多しとす、若し一心を神に托し、一心に神を信ずる時は、神自から心中に顯はれ、罪惡消滅して善良に化するものなるを以て、吾人は常に神と通じ、之と同躰ならん事を勉めざるべからずとせり、獨乙の神學者中に一心二眼の說あり、曰く、凡そ人には左右兩眼あり、右眼は不生不滅の神躰

を見、左眼は神所造の事々物々を見るなり、此二眼同時に働く事能はずして右を働かす時は左眼働く能はず、左を働かす時は右眼働くと能はずと、以上の諸說皆神祕、教家の一般に唱ふる所にして其軌を一にせり、而して此論は後にルーテル氏の宗教改革を呼び起す原因となりし事は、後段說く所に由りて知るべし、

畢竟エッカールト氏の宗教主義は客觀上即ち外界に宗教を立てずして、主觀上、即ち內界に宗教を立つるものなり、故に若し其の說に從ふ時は主觀的のみに偏し、從來の客觀上に成り立ちたる宗教は到底仆るゝ外なし、何となれば神を外界に存するものとし、吾人を離れて遠く獨立するものなりとするを以て、祈禱禮拜をなすには靈像靈壇其他種々の儀式を要するものなりと雖も、神を內界に求め、之を主觀上に存立するものとすれば、偶像儀式以て禮拜するの要なきのみならず、耶蘇を神子として奉信するを要せず、是に於て彼の有名なる宗教改革者ルーテル氏は其神學上の說エッカールト氏に基きて立論せしと雖も、若し全く同氏の如く主觀的にのみ傾く時は宗教を成立すると能はざるを以て、之に從來行はれし客觀的の說を加へて二者相調和せしめ、大に宗教を改良せり、今其取捨折衷せし所を見るに、當時行はれたりし舊教にありては麵包と葡萄酒とを神前に供し、麵包を取りて神の肉とし、葡萄酒を以て其血となし、食して以て眞に神の精靈を受くと信ぜり、ルーテル氏は之を改良して其解釋を變更せしと雖も、猶其儀式を存したり、エッカールト氏の說にありては耶蘇を神の子として之を崇むるを要せずと雖も、ルーテル氏は之を神の子として古說に從ひ、以て三位一躰說を唱へし如き、其客觀の一部分を存して主觀上の說と相合し、宗教と哲學とをして多小調和したるものと謂ふべし、然りと雖も他の宗教者にありては皆哲學上の討究を去りて、只獨斷的に奔れり、新教を唱ふる者も要するに皆從來の神說を存し、唯儀式的改良に止まれり、されば新教者中哲學思想ありて其論見るに足るべきもの、獨りルーテル氏を除きて他にあるとなし、當時の宗教家皆かゝる有樣なるにも拘はらず、又一方に於てはエッカールト氏の說を主張して秘密主義を取るものありて、哲學的思想大に進步せり、其極端論者中有名なるものを擧ぐれば、カスパール、シュエンクフェルド氏セバスチアン、フランク氏ファレンチーブ、ウァイグル氏ヤコブ、ボイメ氏等なり、ヤコブ、ボイメ氏は千五百七十五年に生れ千六百二十四年に沒す、其說後に至りてスピノザ、ライプニッツ、ショッペンハウエル、

ロ、ツチエ等獨乙哲學者諸氏の基礎を成せり、

今氏の宗教論を見るに神は如何なるものかと云ふに、神其物は一定の性質なく、善と云ひ惡と云ふべきものに非ず、一定の場所なく、此處に在り、彼處に在りと云ふべきものに非ず、一定の智力感情等を有せず、物欲もなければ愛惜もなし、其躰寂然として不動、唯一の意志なり、意力なり、絶對的意志なり、而して其絶對的意志の内に全世界万物となるべきものを包含し、又無始の躰にして、其躰中無始の昔より萬物萬有の理を備へたるものなり、此の如く寂然不動、無始無終、不生不滅、絶對的意志の躰が自らの力を以て自ら開き、此萬有世界發現せしものにして、意志其物に於ては善惡の性質を有せざりしも、自ら其躰を開發せしより、茲に善の元素生じ、次で惡も出でたり、其善惡を生じたる躰、是を父とし、生出せられたるもの、是を子とし、父子の間に精靈傳はりて三位一躰と成れり、此三段の作用に依り、生命及活動を起し、茲に又愛と智との二作用起れりと云ふ、ポイメ氏の説を要するに、太初の一躰自ら開いて善を生じ、善より愛と智とを出し、これより萬物萬境を生ずと云ふ、恰も易の太極陰陽を生じ、陰陽万物を生ずと云ふに同じく、又佛教起信の一心二門の開發の次第に

均し、

夫れ然り、然らば何の故に一の躰より二作用を起せしや、又善のみにて可なるべきに何故惡を生ぜしか、又精神のみにて可なるべきに何故肉躰の如き者を生ぜしや、神果して不善不惡にして無形のものならば、善惡及有形の物を生ずる理由なきに非ずや、精神と物質とは反對のものなり、而して若し精神が肉躰に執着する時は惡を起すに至るとせば、何の必要ありてかゝる肉躰を生ぜしや、

右等の問につきて、ポイメ氏の考へにては、神はもと善惡なきものなるも、躰の開發するに當りては、善惡并存を現示せざるべからず、而して其開發の目的とするものは善及精神にありと雖も、精神をして精神たらしめんには、精神に反對するものなかるべからず、故に有形的萬物出でたり、例へば精神を起さんとする時は同時に愛せらるべきものを要するが如し、故に畢竟物質あり、外界あるは、精神善なり、愛なりを成り立たしめんが爲めなり、是れ猶上下左右前後等兩々相對する如く、自然の勢止むべからざるに出でたるものなり、

以上の説、之を要するに、神は無始無終の唯一の意志にして、其内に万有を含有し、而

して何か一の作用起ると同時に其脉二分し、それより漸次分れて遂に此世界を成せりと云ふにあり、加之ボイメ氏は神が此世界を作りしにあらず、又神の外に之を作りしものあるに非す、神が開けて此現象となりたるものなれば、此世界即ち神なりと説くを見れば、所謂太極開發説、幷に眞如開發説に近しと謂ふべし、此説後世の哲學者ライプニッツ、セーリング、ショッペンハヴエル、ロッチェ諸氏の哲學の基礎となりしは疑なし、然り而して此開發説たるや未だボイメ氏の説明足らざる所あるのみならず、東西洋共に古今の哲學者幷に宗教者の其解釋に困しむ處なり、即ち此の如く開發によりて善惡の別あり、吾人は惡に退はれ爲めに善を修せざるべからざるに至り、遂に惡を去てゝ善を取り、再び其元始に返りて又寂然不動の意志に復すと云ふと雖も、其開發するに當りて、何故に善を目的とするや、又何の爲に斯く開發するや、一度開發したるものが何故に歸源せざるべからざるや、疑問尙こゝに止まらず、彼の善を爲さんが爲めに惡ありと云はゞ、惡を爲さん爲めに善ありと云ふも可なるべきに、何故善のみを主とするや、又進んで惡に歸するものとするを許さずして、善にのみ進むものとすれば、何の必要ありて惡を置きしや、此等の難問はボイメ氏の説明未だ充分ならざる所にして、又東洋にありても支那の性理論中善惡の起源を論定し、佛教の起信論中無明の起源を論定するに當りて、學者同樣に其解釋に苦しむ所たり、

當時伊太利にありて宗教上哲學上共に有名なるはブルノー氏なり、此人の論當時の宗教家に容れられず、死罪の宣告を受け、火刑に處せられたり、ボイメ氏は神學と哲學とを混同して區別をなさざりしがブルノー氏は二者各別に説けり、ボイメ氏は神秘教の原因に基きて宗教哲學を説き、ブルノー氏は全く神秘教より獨立して宗教哲學を論じたり、ブルノー氏の考にては哲學は人智の範圍内に於て知得するを得べき世界万有の道理を研究し、宗教は理外に立ち人智を以て探原すべからざる不可知物の眞理を天啓神示等の事に由りて知るものなりとせり、氏は斯の如き論者なりしも、當時の宗教的獨斷論者に非らざるを以て世に擯斥せらるゝに至りしも亦是非なし、氏が神と万物との關係を説くを見るに、万有皆神教に傾けるものゝ如し、氏の神に就きての解釋は(宗教哲學として哲理上説く處のもの)神は極めて單純なる絶脉唯一の脉にして、中には一切の智力、一切の情欲、一切の勢力、其

の他所有性質を完備し、而も其區別を見ず、諸般の道理、諸般の動作の最上位にありて吾人の思想智力の及ばざる處に位する絶躰唯一の躰なりと定む、而して此世界と如何なる關係を有するかを說くに至りては、プラトー氏の理想論を基として立論せり、即ち絶對の理想と此世界とは直接に關係するものにあらずとして、世界的精靈なる媒介物を其間に立てたり、又プラトー氏の如く理想に三種類を分ちて、一は天神的理想(其躰神)、二は世界的理想(世界的精靈)、三は個人的理想(個人精神)とす、此天神的理想は寂然不動靜止して智情意の作用を顯さず、世界的理想の媒介により て個人的理想の上に關係を生ずるものなり、故に萬有事々物々の變化するも世界の發達するも、皆此世界的理想の作用なりとす、而して其三個の理想其躰一にして各異なるにあらずとなす、所謂三位一躰說なり、其理想論プラトー氏の哲學に基く以上は此三位一躰說もプラトー氏に始まるものゝ如し、然るに遠く古代に於て印度の婆羅門敎は此說を立てたり、即ち曰ふ、ブラムは最上絶對中性の神なり、此ブラムはブラマなる男性の神となり、始めて世界を作ると、而して此世界とブラマ及ブラムは其躰一なり、即三位一躰なり、此を以て之を觀ればプラトー氏は印度の說を

傳へ、ブルノー氏復た之を承けしにあらざるかの疑なき能はず、ブルノー氏又世界的精靈を說きて曰く、此の精神は世界の中より事々物々生出し及び變化せしむる勢力を有し、此世界を形成する規模を包藏せり、故に其既に開發するや事々物々の變化あると共に、人獸草木山河等判然として亂れざるなりと、此說アリストートルの形質論に似たり、其論に曰く、物を造くるものは質なり、物發達して其形をなす者は形なり、此形質結合して萬化を現ずと、ブルノー氏の世界的精神も要するに此形質結合說に近し、此他ブルノー氏が天神的精靈を論ずるは、佛敎中唯識に於て眞如凝然として諸法を作らずと云ふものゝ如く、其世界的精神を說くは、第八阿賴耶識の如く、之によりて世界の現出せるは阿賴耶識より万法を開示する如く、彼是其說の近似するを見る、

尙又ブルノー氏の說に據る時は、此世界は神の反射とも謂ふべきものなり、只其働の上より見る時は所働と能働との別ありて、先きに述ぶる如く三躰各、其名を異にすと雖も、其本躰に至つては別に差別あるとなし、所謂三位一躰なり、故に裡面より論ずる時は氏の說は萬有神敎なりと云ふべし、

善惡に就きて氏は如何なる考を有せし歟と云ふに、世界の事々物々は皆善且つ美なり、然るに惡なるものゝあるは此世界の全躰と一部分とを差別するを以てなり、即ち此世界より一部分を限界して獨立する者とすれば是れ即ち惡なり、例へば彼は自己の爲なり、是は自己の利益なりと思惟するが如きは、即ち全躰の世界の外に別に獨立したる自己ありと想定するものなるを以て惡なりとす、若し之に反して自己は世界全躰の一部分なり、之に據りて現立するものなりと信ずるは善なり、是を以て利己心の惡にして、愛利心の善なるを知るべし、然らば其惡なるもの何の必要ありて存在するやと云ふに、凡そ善惡の此世界に併存するは止むを得ざるの事にして、若し此世界善のみとなるに至らば、世界進歩の終極にして、即ち世界其目的を達したるものと謂ふべし、然れども今や世界は進歩の途中にあるものにして、其進歩するは惡ありて之が刺戟となるを以てなり、然らば惡は此世界の發達進歩に必要ありと謂ふべし、故に若し此世界の目的を達せんとせば、自利我欲の如き感情の制裁を脱し、更に其上に向つて進まざるべからず、而して下等の感情を去りて高尚の理想に向ひて進むには、教育の力に頼らざるべからず、且つ其目的は單に五官

の感覺上より起る下等の情欲を去つるに止らず、精神上天地萬物の美を求めて絶對的最上の善に向ふは固より吾人の目的なり、而して此精神上の善を養成するには教育の力のみにては、到底及ぶ所に非るを以て神力に依頼せざるべからず、吾人の感情を制裁する所の意力即ち勇力は吾人の力にあらずして天啓に依り神力に頼りて得らるゝものなり、故に吾人は一に智識を進むる教育と、一に意力を働かしむる神力と、此二者結合せざれば其目的を達し難しとす、是れを氏の善惡の解釋となす、

以上ブルノー氏の説之を要するに萬有皆神教にして、作用上三種の躰を立てたれども、其實は一なるのみ、其一本躰の内に含藏する力を以てし、之れより開發したるものの此れを世界とす、而して此理を道德上に恰當せしめ、此世界万物の全躰即ち神なれば其神より離るゝ時は惡となり、神と伴ふ時は善となるとせり、畢竟ボイメ氏の秘密説を今一段進歩せしめしものにしてブルノー氏は神秘教の主義を離れて普通の智識道理上より宗教を説きたるなり、然れども氏が神は萬物に普徧するものにして萬物盡く善なりと云ひ、又惡は萬有の一部分に向つて迷執するによると

云ひし如きは、尙ほ獨斷的に想定し去りて、未だ哲學上に一組織を構成したりと云ふべからず、故に一種の宗教哲學として一家を開きたるは、後のスピノザ氏を待たざるべからざるなり、

宗教哲學本編

スピノザ氏の前に當りてデカルト氏物心二元論を唱へしと雖も、其關係に至りては充分の解釋に至りては、未だ哲學上の說明を與へざりしが、スピノザ氏は進んで之を試みたり、是れ學者が大抵スピノザ氏を以て宗教哲學の祖とする所以なり、

スピノザ氏宗教哲學

スピノザ氏小傳　スピノザ氏は和蘭に生れ、アムステルダム府に住す、其父祖猶太人種に屬するを以て、氏も猶太教の神學を講究せしが、其見解の異なる所あるが爲め、遂に破門せらるゝに至り、轉じて耶蘇教に入り、復た神學を研究し、大にデカルト氏及ブルノー氏の說を受せり、氏は一方にありては哲學者にして、又一方にありては神學者なり、而して時の政治幷に宗教を改良せん事を希望し、政教論を著せり、然れども其持論、當世に容れられずして其志を得ず、晩年遂に肺病に罹りて遂に死しき、

近世の宗教哲學は三大段に分れたり、即ち左の如し

第一段批判的宗教哲學

第二段、直覺的宗教哲學

第三段、理想的宗教哲學

批判的宗教哲學　批判的宗教哲學はスピノザ氏に始まりカント氏に終る、スピノザ氏の當時世間政治幷に宗教の壓制を受けたり、スピノザ氏思想の自由を唱導し大に之を改良せんとせり、氏は政治の改良、宗教の擴張は思想の自由に關するを以て、自由思想によりて其道理を論究せざるべからずとせり、故に千六百七十年に於て政教論なる一書を著はし世に公にせり、氏の考にては宗教と哲學とは其範圍の異なるものにして、宗教は哲學の附屬物にあらず、哲學は宗教の附屬物にあらず、哲學の目的は眞理にあり、眞理は道德上萬有事物及其事物と事物との關係、神及其神と万有事物の關係を說くにあり、宗教幷に神學上の目的は信順にあり、實際上神

を遵奉し、道德善行仁心を養成するにあり、換言すれば宗教幷に神學は經典の事、基督の事、摩西の事、其他天啓に關する事を信念するを目的とし、哲學は此等諸般の事、皆理論上に推究し、論理上に討尋するを目的とす、故に宗教と哲學とは其考定する所往々反對する所あるなり、然れども道德上の目的に至りては兩者同一の點に歸着するものにして、宗教上よりするも哲學上よりするも異なる事なしと論じたり、如斯なるを以て神學上に於ては經典中に神が世界を創造せり、或は神が万有を作りたり等の事あるも、單に此事を信ぜざるべからず、之を信ずる時は即ち神を信仰遵奉したるものにして、天惠を受くるを得るなり、若し之を疑ひ、疑うて研究すれば是れ神學にあらずして哲學なり、斯く宗教と哲學とは其區域を異にするを以て、哲學上如何なる事を研究するも、宗教上に少しも障害を與へざるなり、即ち神は何處にありや、天地万有は果して神の働きなりや、若し神の働きとせば其神は如何なるものなりや、或は未來に於ける賞罰は果して神が宰どるものなりや等は、皆哲學上の問題にして智力上の作用に屬するものなりとし、以て宗教と哲學と其範圍を分ち、且つ兩者の研究互に障害を及ぼさゞるものなりとせり、氏曰く、經典は無學無智

を罰せずして不信不順を罰すと、又曰く、人の順不順は其說の眞僞によりて判定すべからずと、又曰く、確實なる議論を抱く人必ずしも確實なる信者にあらずと、其言皆宗教と哲學と異なりと云ふの意を含まざるなし、畢竟氏の此の如き說をなせしは世間に於て哲學を以て宗教を講究せんとするも之を非難し攻擊するものあるに由り、豫め之を防がんとし、哲學上の議論は宗教上に關せず、宗教上の信仰は哲學上に之を批難すべからずと論じ、以て世の批評を拒ぎしものならんか、

スピノザ氏は上陳の如く、宗教の實際にありては神に信順して說の可否を正すに及ばず、理論にありては眞理に適するや否やを正すものなれば、實際と理論とは一致せず、又神を信ずると信ぜざるとは實際上に關する故に理論に長ずると否とによりて判すべきにあらず、故に哲學上宗教を論究する時に於ては信と不信とを問はず、自由に研究して可なり、若し實際に當るに於ては道理の有無に拘はらず之を遵奉すべし、古へのモセスが神より受けしと云ふ十戒の如き、理論上到底之を信ずる事能はず、然れども實際上之を信ずるに於ては只其命に從順すべきのみ、何となればモセスアブラハムの如き豫言者出でゝ神命を受けしと云ふも、是其人の道理

力智力によりて然るにあらずして、只其人の直覺作用により感情によりて然るものなればなり、又其豫言者なるものは智識の多少に由りて豫言者として尊ぶにあらず、畢竟豫言者と吾人との區別は道德上の性質と幷に感情とに由りて爲すのみ、決して智力上に區別ありとすべからず、豫言者の如きは想像力に富むも道理力に富まず、學者哲學者は道理力に長ずれど想像力信仰力に乏し、而して此豫言者は想像上神を現出し、之を人情風俗の上に持ち來りて有形上に畫出せるものなり、故に學者として之れを考ふる時は到底信を置く事能はざるなり、換言すれば豫言者は宗教上の感情に強きも智力に乏し、故に自己の智力を以て實際に當てはむる時は學者の眼より見て信ずる能はざるもの多く、甚しきに至りては抱腹絶倒せしむる事もあり、是れ學者と宗教者との異なる所なり、若し哲學者として出でたる時は片言寸事の豫言者を信ずべき必用なし、何となれば苟くも哲學者なる者は豫言者より先きに智力の進歩を加へたるものなれば、然れども其品行嚴正に道德端肅等の實際に至りては、哲學者の理論家も豫言者の實行家も共に一致せざるべからずとす、此の如く理論と實際の各別を說き、只道德品行上の實際に於てのみ、學者も

豫言者も一致せざるべからずと說きたるは、即ちスピノザ氏が宗教上の考なり、此れより尙スピノザ氏が宗教に附ての解釋を述べんに、先づ人が宗教を信じ、之が支配を受けて道德品行を正さん爲めには、神律に服從せざるべからずと云へり、氏の言ふ所の此神律とは如何なるものなるか、之を理論上に論究せば如何なるものなりやと云ふに、氏の著述に係る處の政教論とも云ふべき書の第四篇に於て此事を說けり、其考定する所に據れば、神律は最上の善即ち神の眞智眞愛を其單一の目的とする者なりと云ふ、而して其律は一國一民に限るにあらずして、人間一般に適用するものなり、氏又曰く、最上の善は最上の智識中に成立すべきを以て、吾人の智も善も此神の善と智とに屬するものなりと、氏が此考は善と智識とは離れたるものにあらずして、善は智識に依りて成り立つものとしたるが如し、氏は此の如く神律を解釋して人民一般の說と大に其解釋を異にせり、一般の解釋にありては古來の傳說聖經等に據りて之を眞とし以て神を信ぜしも、氏は智識によりて神の德を知るものとし、而して智識は吾人の思想作用に依りて成り立つものなれば神の德幷に神の性質は天啓に依らず智識上道理上にて研究せざるべからずとなせるは

氏が哲學上宗教を論究する旨趣なり、從來一般に神を以て自然外の理即ち理外の理としたりしが、スピノザ氏は之を道理以内の者とし、人間が此自然の上に於て智識を得、其智識を以て神の性質を研究するを得るものとせしは、是れ氏の宗教哲學を獨立せしめたる所以なり、又神は智と意と相別れたるものにあらず、合一して作用をなすものなれとも、神と此世界の關係上より相別れたる如く現はれたるものなり、神律は即ち此智も意も共に一躰となれる神の本躰の恒久不變の眞理の外に別に存するものにあらざれは、世界の事物幷に人間の間に現存するものなり、故に世界万有人間及神は決して相離れたるものに非ざるなり、今神の躰より現はれたる神の規律は、世界と人間との間に普及すと云ふ以上は、是れ神の規律は天地萬有の規律なりと謂ふべし、是に至りて神律の解釋は自然即ち天地萬有の理と一致するものにして、世間一般に解釋する所の神律と異なる所以なり、

今夫れ一般の通俗説に神を理外と立てたるは、神は此世界の外にありと認識するによれり、然るにスピノザ氏は神も世界も同一なり、天地萬有の間の必然或は肝要と稱するものは、即ち神の規律なり、若し神にして自然律に反するあれば、是れ全く

神の性質に反したるものなり、又若し神が萬有の間に現はるゝものならば、是れ自然の道理と同じくして、決して理外のものに非ず、然るに世人が神は自然の規律を左右するを得ると思ふは、全く自然の規律の何物たるを知らざるに坐するのみと云へり、上述の如き解釋を施し、自然の規律と神律とを一致せしめしは、是從來の宗教家の説を一變せしめし所にして、又スピノザ氏の功績顯著なる所なり、

夫れ神は萬有事物の外部の原因にあらず、内部の原因なり、其作用は隨意の取捨に出でずして、自然の間に必然の理によりて顯はるゝものなり、蓋し事物に原因結果の必然の關係存在するは其規則が神の規律に基きて成り立てるを以てなり、是れ即ちスピノザ氏宗教哲學の原理にして、從來の神秘教或は耶蘇教等一般の解釋と異なる所なり、一般の説にありては神は事物の外部にありて外部より働きを與ふるものとし、スピノザ氏は原因結果の規則に從うて事物の變化するは、事物の内部より其勢力の發するものとせり、此事は倚後に至りて詳述する所あるべし、

以上説く所はスピノザ氏が宗教哲學を説くに至れる順序即ち宗教哲學は曾て一個の哲學として、解釋するものなかりしに、スピノザ氏其途を開きし順序を説明せ

しものなり、今又茲に宗教哲學上スピノザ氏の前後に於ける思想を比較するの必要あるを以て、先づ氏の哲學上の所說とデカート氏所說との差異點を指示し、次にブルノー幷にエッカールト氏所說との差異點を擧示すべし、

抑もデカート氏が神を立てたるは物心二元論を唱へしに因るものにして、物心兩存し、而も相反對したる性質を備へたりとせしに、其性質の反對したるものが如何して結合し、如何して相關係するか、是を說くに如何せば可ならんかと言ふに至りて、其相結合し互に契合して作用を爲すは神の力に因るとし、遂に神を借りて物心相關の理由を附したり、而して此神は一種格段の性質を具ふる神にして、物心二者の外に成立し、以て二者の上に働くことを說きたり、然るに未だ其神と物心との關係とに就き解釋の明瞭ならざるより、其弟子ギューラン及マレブランシー諸氏之を說き明かさんとせり、ギューラン氏の考ふる所を見るに、凡そ吾人が外物を視るは神が物心を結合するによる、吾人が思考するに方りて其思考する所の對當の物件の顯はるゝは神の作用により、始めより神が物心二者の契合を計りたりしを以て、二者相關係し互に契合するなりと言ひ、其師說をして一層强く一層詳かにならしめたり、而してマレブランシー氏は尙此れに滿足せず、神は其働きを物心の上に與ふるは勿論世界盡く神の內にありて現見し、吾人亦神の內にありて動作し思考するなりと云へり、是に至りてデカート氏の說は其極端に達せり、此れに反對せしものは即ちスピノザ氏なり、氏の考は神が物心二者の外にありて一の成立を有するものなることを疑ひ、論究の結果此世界の本躰即ち神なり、物心の本質即ち神なりと云ふに至る、是をスピノザ氏の本質一躰論と稱す、是に於てデカート氏の神とスピノザ氏の神とは大に異なれり、スピノザ氏の神は物心の內にあり、デカート氏の神は物心の外にあり、一は外より內に働きを與ふるもの、一は內より外に發動するものとす、而して其物心の本躰は絕對無限唯一の躰なりとするもの即ち所謂本質なり、然らば物心二者は本質に對して如何なる關係を有するかと云ふに、これ本質に屬したる附屬性なり、換言すれば神は絕對無限なり、而して物と心との二種の屬性を以て吾人の考に現はるゝものなりと云ふ、果して然らば何故無限の神が二種の屬性のみなりや、若し僅か二種の屬性のみとすれば神は無限に非ずして有限のものなるに非ずやと云ふに對し、曰く、物と心とは屬性中の二種のみ、物心の外無量無

限の屬性ありと雖も、其吾人の智識思想の中に顯はるゝものは物心二者のみ、故に吾人は唯此二を知りて他を知らざるなりと、此の如く物心二屬性の吾人の思想上に顯はれたるを說けり、而して其物心二者の性質は如何と云ふに至りては全く相異なるものとして區別せり、而も全く獨立したるにあらずして神に附屬し、附屬しながら二者其性質を異にせりと云ひ、以て其區別を立てたり、然るに何故其反對したる物心二者が能く契合するや、已に反對したるものならば契合する筈なきに非ずやと云ふに至りて、茲に神を立てたるは即ちデカート氏なり、相反する二者互に成立するを得るものにして、譬へば木葉の形と色と互に異性質にてありながら一木葉上に成り立つと同じく、物心二者相異なりと雖も、本質一躰上二者互に契合兩立するものとするはスピノザ氏なり、而してスピノザ氏は此二屬性中種々無量の物を含むとし、之を解して「モード」と云へり、之を譯すれば佛敎中の万法の義なり、此万法と本質との關係は恰も波の海水に於けるが如く、水なる本質が種々の波なる万法となり現はれて、物心二者の上に万有萬境の形象を示すものなりとす、此說明によりて見る時は、デカート氏の二元論なるに反して、スピノザ氏は一元論なりと

す、之を要するにスピノザ氏は其哲學を組織する規模幷に論究法はデカート氏に取れり、其故は神心物の三段を立て其關係を說きたるも、又數學上の考へより思想の上に定めたる原理を事々物々の上に適合せしめんとしたる所謂演繹論法も二つながらデカート氏と同一なればなり、然れども其哲學の規模を充たす所の實躰材料は却てデカート氏に據らずして、ブルノー氏に據れり、加之猶太敎の宗敎哲學及び神秘敎說をも幾分か取る所ある者の如し、即ちブルノー氏は萬有神敎を說き、スピノザ氏亦然り、然れども又互に異說あり、ブルノー氏はプラトー氏を繼承して、神と世界との關係に三種の理想を立て、結極其三種の躰即ち一なりとし、此一躰の上より觀れば万有差別なくして一理平等なりとす、然るにスピノザ氏は万有神敎を立てながら物心二者平等に非ずとし、飽くまで其區別を保ちて神の屬性なりとせり、之れ其二氏異なる一點なり、次に尙其兩氏の異なる要點はブルノー氏は一方に於てはプラトー氏を取りしが、一方に於てはアリストートル氏の形質論を取れり、此論曩きに既に略述せし如く、物には形と質とありて、質の變化するは豫め定りたる形ありて之を充たさんが爲なりと云ふにあり、ブルノー氏此論を取りて世界

の上に考へ、世界の万物には一定の目的ありて之に向つて進行するものなりとせり、之を目的論と云ふ、例へば大工が家を建つるに豫め其構造法を圖に製して一定の規模を立て、此れに則りて工を起すが如く、此世界は神が目的を定め圖取りをなせしものにして、万物の變化は其神の豫期せし形を取るものなりと云ふ、近世の始めに於ける彼のコペニカスガリレオガッセンヂーニュートン等の諸氏亦多少斯の如き考を抱けり、然るにスピノザ氏は全く之を反對し、世界は決して最初より一定の目的あるにあらず、物心には物心其者の規則ありて之に從うて進み、万物亦因果の規律あり、之に從うて變化を生ずるものなりと云ふ、此因果論は今日學術上の根底となれるものにして、之を近世哲學上に說きしは實にスピノザ氏なりとす、其目的論を打破し因果論を立てたるは千古の卓見と謂ふべし、

スピノザ氏論じて曰く、世界は神の圖取りに依て其形を取ると云ふ所の目的論は即ち宗教上に謬誤を傳ふる原因となれり、世人之を信ずるに由りて因果の關係を知らず、因果の關係を知らざるに由りて、唯神に依憑し神に阿諛して幸福を得んとするの考を生ずるに至る、加之天災地變其他の不幸を以て人間の惡なるに因るとなし、只管神に追從し神の寵愛を得れば、茲に神の良導を受けて、かゝる災害を免るゝものなりとの妄信に陷るなり、甚だしきに至りては人間が若し神の喜悅を買はざるに於ては、神は人間の到底避くべからざる害毒を被らしむる事ありと思惟するものあり、然るに若し因果の理法を知らば、斯の如き迷夢を醒し、目的論より來る所の妄信は直ちに消散するを得べしと、此れスピノザ氏が當時の宗教及び學說の上に卓立せし所以なり、

因云にふ、今日我國に行はるゝ迷信的占筮、觀理開運術の如きは全く此因果必然の理法を知らざるに由りて行はるゝなり、若し此理法を知らば一般の妄信を破り、妄信に依て徒消する幾多の金錢を以て有益の資に充つるを得べし、其一般人智の未だ此處に至らざるこそ是非なけれ、

上來段を重ねてスピノザ氏が宗教哲學を說くに至りし順序、並びに他說との比較を陳述せり、是れより氏が宗教哲學の本論に入らんとす、

スピノザ氏の宗教哲學本論

スピノザ氏先づ神の義解を下して曰く、神は絕對無限の躰なり、其絕對無限の躰は

萬有事物の眞性實躰なり、之を本質（サブスタンス）と稱す、故に神は即ち本質なり、其躰又無限の屬性を有す、而して其絶對無限の神躰は現に實在するなり、今之を證せんに、神躰は絶對無限にして、亦絶對無限の力を備へたり、然るに若し現實に存在する能はずとせば、之れ無限の力を備ふと云ふを得ざるなり、何となれば、茲に有限のもの、例へば人身家屋の、如きものあらんに、其物實に現存するに非ずや、有限物すら斯くの如し、況んや無限物にして現存せざるの理あらんや、若し絶對無限の物實在せずと云はゞ、相對有限の物亦現存せざるは勿論なり、若し此世界に現存するもの一もなしとせんか、尚可なり、若し現存するものありとせんか、必ず先づ無限物を數へざるべからず、されば世界一切の事物一も現存せざるか、或は無限のもの現存するか、何れか其一に居らざるべからず、然るに世界のもの皆現に存在せり、豈無限物の現存するなからんや、此現存は必然にして打破す可らざる理なりと、又曰く、神は無限の力を備ふるものなるを以て、其現存するには現存する所以の力を有せざるべからず、即ち神は無限絶對の力を以て現存する所謂無限絶對の躰なりと、また曰く、物にして現存すると能はざれば完全と云ふを得ず、完全なれば必ず現存すべし、今神は完全なり、故に必ず現存せざるを得ずと、此論法の推理は確實なるも、其前に臆定せる論案は確實ならざるは論を待たずして知るべき也、スピノザ氏は數學上の考よりデカート氏に同じく演繹論法を用ゐたり、數學的論法は實に確實なる者なれども、其運用の如何によりて不完全となる、即ち此論法は吾が思想中に臆定せる一眞理を基礎とし、之を外界の事物に當て箝め、以て此の如しと斷定する也、例せば一部分は全躰より少なしとは數學上の原理原則にして、我輩決して其道理を疑ふと能はず、實に思想上明瞭なる眞理なれば之を原則として諸規則の眞僞を判定するとを得るも、一切の事柄皆此の如く思想上に明瞭なるを以て、現存上確實なりと斷言するを得ず、若し此の如く想定するとき、は是れ獨斷的に傾くものなり、何となれば其思想中に定めたるものは眞理と斷じて何故に其眞理なるやを疑はざればなり、蓋しデカート氏が己の思想に明瞭なる者は實際にも亦確實なりと獨斷的に思考せし論理法を承けて、スピノザ氏も神は無限のものと始めに斷定し、故に神は現存すと云ふ、而して何故に神は無限のものなるかを疑はず、亦更に其證明を與へざるなり、故に其考今日より見れば決して論理上正しきものに非ざるなり、スピノザ氏又曰く、

絶對無限の躰は一つより多かるべからず、故に此世界に神躰を離れて別に物ありと云ふを得ず、一切万物悉く絶對の躰中にあり、若し此外にありとせば絶對の躰の外に別に一物ありとせざるを得ず、然るときは絶對にあらず、此理よりスピノザ氏は推演して神は外部にあらずして内部にありと云ふ、神は外にありて世界に働くとせば、神と世界とは二物なり、然れども神の外に世界なく、絶對の外に物なきを以て、内部にありて外部にあるものに非ずと論定せり、スピノザ氏又自由意志論を説破して曰く、神は自由意志を有し、右せんと欲して右し、左せんと欲して左し、其意志自由に發動して自由に動作すと信ずと雖も、神は決して斯の如きものにあらず、神の作用は因果の原則に依り必然の理法に從うて顯はるゝものなりと、以て從來の自由意志論を變じて必然論とせり、併しながら氏必ずしも神の自由を説かざるにあらず、世人の一般に自由と云ふは、神が勝手に規則を左右し理法を變易し、其欲する儘に外部より作用すると云ふものなれども、スピノザ氏の稱する自由は之に異なり、神は決して外より壓制を受けず、神外に万物なきを以て神が外部より壓制せらるゝ事なし、即ち神は自己の内部の力にて活動せり、自躰固有の性質規則に從ひ

運動し作用せり、故に神は自由なりと云ふなり、即ち神は如何なる動作、如何なる變化を万物の上に爲すも、皆自躰固有の因果の規則に依りて然るものにして、恰も三角形の内角の總和は二直角に等しと云ふ幾何學上の定義は、三角形固有の規則にして、其三角形が如何に變化するも苟くも三角形たる以上は此規則に依らざるときと一般なり、神は完全と云ふは何處までも因果の軌道を外づれず、無始より無終に唯だ一の必然の理法を以て其作用を一貫する故なり、然るに一般の人の考の如きは神は人間の如く左右前後是非善惡皆自己の意志に任せて發作するものとし、只神は人間より其意志の數層優等に位するのみと考へ、人間より推して神の性質作用に論究するは大なる誤りなり、若し斯くの如く人間に智あり意あり、神にも智あり意あり、人間も神も其性質異なるなしと云ふ、是れ恰も星宿にドッグと名くるものあるを以て獸類のドッグと其質異なるなしと想像するに同じきものなりと云ひ、大に世人の自由意志論を排斥せり、

凡そ智と云ひ意と云ふもの神の本質にあらず、本質自躰は智と意とを離れたるものにして、智と意とは神の屬性なり、又物質の動靜も神の屬性なり、本性より云へば

物質の動靜は物質上に於ての屬性なり、延長性の上に於ける神の屬性なり、智なり意なりは思想上の神の屬性なり、換言すれば、一は物質に屬し、一は心性に屬する屬性の顯現なり、若し智と意とは眞に神が備ふるものとせば、物質の動靜も神は備へざるを得ず、獨り意志のみ神の性質にして物質上の性質を神に備へずとするの理あらんや、然るに物質上の性質は神の本性にあらずとせば、智も意も神の本性に非ずと云ふべし、スピノザ氏は此の如く論じ來りて世人の或は神に延長的性質を具するを說かざるも、獨り思想的性質を有するを說き、此二者同一に神の本躰にあらずして其屬性なるを知らざるものをして其理を了解せしめんとせり、

氏の所論中にて最も卓見と稱すべき點は、古來より學者及び宗敎家等の盛に主張せし自由意志說を論駁して因果必然說を主張せしにあり、其說に曰く、內界も外界も畢竟其の本躰たる神の屬性なれば、均しく唯一の規律即ち因果必然の理法によりて支配せられざるを得ず、然るに外界のみ必然の理法に檢束せられて、內界獨り自由不羈なるものとするは不正なる理論たるや明にして、此二者は均く必然の理法によりて支配せらるゝものなり、此內界の方を名けて思想或は道理と云ひ、外界

の方を名けて物質或は運動と云ふ、而して此の二者を深く推究して其の本原に溯れば、均しく無限の本躰に達し、無限の道理、無限の運動となるものなり、而して其の無限の本躰に達するときは、即ち神自躰の作用を呈するものにして、此の神自躰の作用に二種の性質を有す、一を思想と云ひ、一を延長と云ふ、(此の區別は彼の度加多氏の二元論に依りしものなり)、此の二種の性質は神自躰に具有せる屬性にして均しく無限なり、故に其無限なるものを總括して、無限性の思想或は無限性の延長と稱す、神は此二種の屬性を有するを以て、無限の道理、無限の運動の二種の作用を呈し、此二種の作用は因果必然の理法によりて支配せらるゝものなれば、物質上の運動、或は靜止の作用のみ必然の理法に服從し、內界の意志獨り自由不羈の性質を有し、必然の理法に服從せずとするの理あらんや、此れに由りて之れを觀れば、意志と物質とは同等同權にして均しく必然理法の配下に屬するものなれば、意志獨り自由不羈の性質を有するものにあらざるや明なり、然るに古來の學者或は宗敎家が盛に自由意志說を主張して以て眞理なりと是認せるは、不道理の理論たるや論を俟たずして明なりと、此の如く氏は古來の學者或は宗敎家に反對して嶄然頭角を

顯はし、因果必然說を主張し、哲學界宗教界に一大波瀾を起したるは、實に氏の氏たる所以にして、後世氏を推して必然說の元祖と稱するも亦此點に存す、

而して氏は宇宙萬有を解するにも、前述の說を演繹、推論せるに外ならず、曰く、宇宙萬象は悉く必然の理法によりて支配せらるゝものなれば、其無限の始より此理法を經過して來り、又無窮の將來と雖も今日まで進み來れる方向によりて進み、決して他の方向を取りて進むと能はざるものなり、然るに古來の耶蘇教者流は神は全智全能なるを以て自恣專擅に其の轍を變じ其の方向を易ふると得るものなりと云へり、神は假令全智全能完全無缺のものなりとするも、決して自恣專擅に宇宙の方向を變ずると得るものにあらず、何となれば神は無始無終不變不易にして唯一の規律即ち必然の理法を具有するものなれば、其の意志即ち必然の理法に依りて所定せる宇宙万象も永久不變に唯一の方向を取り、必然の理法に據りて進まざるを得ず、然るに若し神の所定にして從來の必然は將來の不必然となるが如き變遷常なきものとせんか、神は完全無缺とすると能はず、然るに神は完全無缺不變不易なるものなるが故に、其の所定せる宇宙万象も永久不變に唯一の理法に支配

せらるゝものなることを知るべし、此論は彼の度加多氏の形式によりて組織し、其の材料は種々なる元素によりて成立せるものなり、

而して氏は本躰に關する屬性を論じて曰く、神は宇宙万有の本躰にして無限恒久のものなり、而して又思想性と延長性の屬性を具有す、然れとも屬性の數に至りては決して二者に限れるものにあらず、何となれば神の躰たるや無限性のものなれば、其の躰に屬する性情も亦無限の數を具有せざるを得ず、然れとも此無限の屬性中にて吾人々類の可知界に屬するものは單に思想性と延長性の二者に限り、餘は皆不可知界に屬するものなり、而して此の二屬性は其範圍廣大にして吾人の見聞覺知するとを得る森羅万象は一として此の範圍を脫すると能はずして、此の思想性の大範圍中には個々の觀念も成立し、延長性の大範圍中には個々の物質も成立するものなり、其の個々の延長性を總括して天神的の延長と云ひ、個々の思想性を總括して天神的の思想と云ふ、而して氏は又万有を總括して三種に區別せり、曰く本質(Substance)曰く屬性(Attribute)曰く万法(mode)(万法とは佛教にて眞如万法と云へる万法の意なり)是なり、

前來述べ來れるが如く氏は從來の宗教説に反對して其の上に改良を加へて、耶蘇教をして佛教の如き觀を呈したり、何となれば万有の本躰たる神を從來の宗教家の如く宇宙万象の外に向ひて求めず、宇宙内部に向ひて求めたるが如き、又宇宙の道理も神の專擅に依りて成立するものにあらず、唯一の規律即ち原因結果、必然の理法のみなりとするが如き點は佛教と異なるとなければなり、但だ佛教中には此等哲學家の論定せる原理を包含するも、其の論述する所は系統的の組織を有せず、又之れを學ぶものもひたすら舊株を是れ守り、進取の氣力なきを以て、遂に今日の學問世界に適合せしむると能はざるに至れり、豈遺憾ならずや、故に佛教を研究せし人は西洋の宗教哲學を兼修するは、實に目下の急務と謂ふへし、

且つ氏は物心同權論を主張するものなれば、此の物心二者は其間に關係なくして、延長性は思想性を支配するの權なく、思想性も延長性を支配するの權なし、故に延長性のものは延長部内にて關係し、思想性のものは思想部内にて關係するものなりと云へり、此理を應用して神の思想と神の事業とは同等同權にして併行對立し、主從の關係あるものにあらざれば、彼の耶蘇教者流の神の思想は主にして、其事業

は屬性なりと論ずるが如き理なく、單に思想部内或は事業部内にて主從の差別あるのみ、決して思想と事業と對立する上には主從の別あるとなしと説きて、古來の宗教學者が神の事業を以て其の思想の附屬物なりとするの説を打破せり、

氏は又本躰と屬性とを論ずるに、前にも辯述せるが如く、其屬性の可知界に屬するものを物心二者と區別し、二者は同等同權なるものなれば、兩者の間に輕重を附すべきものにあらず、換言せば二種の屬性をして本躰即ち神に對するときは等しく是れ屬性にして、全く同權なるものなりと説き、此理を推演して一個人の上に付きても此の兩屬性あるとを論せり、其説に曰く、身躰と心意とは全く同等同權なるものなり、何となれば身躰は神の屬性なる延長性の一部分にして、心意は其の思想性の一部分なれば、此の身躰と心意との間に輕重の差あるとなく、同等同權なるものなり、既に同等同權併行對立せるものなれば、身躰にして完全に發達するときは心意も亦相伴うて完全に發達するものにして、外界の經驗の進歩すると同時に内界の思想も進歩するものなりと、此の點より見るときは氏は内外順應論にして經驗論及び唯物主義を主張するものゝ如し然れとも氏は唯物論を主張せるものにあ

らざれば其說の唯物論に陷るを恐れ、此れを避けんが爲め說を立てゝ曰く、心意は外界の經驗の進步すると同時に進步するものなりと雖も、心意には物質の具有せざる一種の力を有せり、此の一種の力とは自覺の自覺、或は觀念の觀念とも名くべきものにして、心意固有の力なれば、外部の進步と隨伴するものにあらずと、以て其主張する形而上學を成立せり、然れとも氏の此論たるや、却て自家撞着を招きたる者と云はざるを得ず、何となれば心意に限り一種特有の力ありとするときは、外界物質との間に輕重の差を生じて、物心は同等同權なる屬性なりと云へる論に撞着すればなり、

次に氏の人智論は大に宗教上の智力及び倫理說に關係するを以て茲に略述せんに、氏は智力を區分して三種とせり、其の第一は感覺上の經驗より來るものにして、此の智力の中にも優劣の別あり、劣なるものは世間的の空想にして、不正無根の俗說妄想を云ひ、優なるものは種々なる事物より得たる概念の集合より成立せるものにして、假りに名けて之を類想と云ふ、第二は道理上より來るものにして、之れを名けて理性と云ふ、理性とは經驗より得たる種々の概念の上にありて人類共同の

智識なり、第三は智識中の最上に位するものにして、此智識は神に關する智識なり、此の智識は諸般の原理原則の從りて生ずる所の源泉にして、實に確然明白なる觀念を生ずるものなりと云ふ、氏は宗教に關する心性作用をも此分類に準じて說明を下せり、即ち左の如し、

第一は罪德等に關して世俗一般に抱ける妄信思想なり、（之れ智識論の第一に準ずるもの）第二は道理上より罪德等は如何なるものなりやを推考する心性作用なり、（之れ智識論の第二に準ずるもの）第三は宗教に關せる心性作用中の最上の位置を占むるものなり、（之れ智識論の第三に準ずるもの）而して此智識は神の力によりて得たる智識にして、此の智識によりて吾人は安心立命し、以て神と同一体に歸するとを得るものなり、斯く氏は智識と宗教思想とを應合して說明せしは、理論と實際とは隔然せるものにあらず、理論上の智識は即ち實際上の智識にして、哲學の如き最高の理論より得たる智識は實際上にても最高の智識なるとを示せるものなり、併し氏の此論を主張せる所以は智識と意志とを同一視せしより起りしものなり、詳言せば古來の學者多くは知力と意志とを區別し、智識は原因結果の理法を推究

する心性作用にして、意志は自己特有の自由作用を有するものなりとせるも、氏は意志なるものは全く智識上の斷定に過ぎずして、二者其原理同一なりと信ずるより起るものなり

氏は又倫理學とは如何なるものなりやを解釋するにも前説の論法に準じて、其説明を降せり、今其著倫理書に就きて之を見るに、其第三卷に愛情を分ちて三種とせり、曰く所作用的愛情、即ち外界の事物に由りて惹起せられし愛情にして、吾人の本情にあらざるもの、曰く能作用的愛情、即ち吾人の内部に存する必然の理法に則りて活動する精神作用、之を名けて願望と云ふ、曰く合神的愛情、即ち神に關する愛情にして、吾人は此情によりて神と同一躰に歸するものにして、語を借りていはゞ吾人をして成佛得道せしむる所の者是なりとす、

第一、所作用的愛情とは躰慾等の如き、外界と感覺との爲に精神を支配せらるゝより起る不道理的の愛情を云ふ、凡そ人類の目的とする點は、自己の生存にありて、此目的にも或は道理に適合する者あり、或は道理に適合せざる者あり、而して其道理に適合せざる目的とは躰慾の如き所作用的愛情にして、若し人此愛情の爲めに制

御せらるゝときは精神の自存を失し、又獨立自由即ち内界に存する因果必然の理法に隨ふの自由を失するに至らん、（氏の自由とは因果必然の理法に隨順するに際し、他より障碍を蒙むるとなきを云ふ）、又人は自己の生存を目的とするものなれば、躰慾の如き所作用的愛情を恣にするときは、人々相戰ひて强食弱肉の有樣を呈し、却りて自己生存の道を失するに至らん、故に吾人は倫理學に於て人は躰慾の奴隷となりしときに如何にして此羈絆を脱するとを得るか、又如何にして外界の制御を離れ、獨立自由の境に達するとを得るか等の問題を講究せざるべからず、

第二に能作用的愛情即ち願望とは所作用的愛情の上に位し、精神内に存する必然の理法によりて起る作用にして、外界の事物によりて惹起せらるゝものにあらず、吾人呼びて德となすものは精神固有の能作用をして其勢力を隆盛にし、外界の羈絆を離れ、躰慾の奴隷たることを脱するにあり、此德なるものゝ基礎とする點は自己の生存にあり、自己の生存を離れて吾人は成存すると能はざるものなり、而して躰慾と云ひ願望と云ひ、等しく自己の生存を目的とするものなれども、若し躰慾のみを逞しくするときは、吾人は爭鬪のみを事とし、却りて自己の生存を害するもの

なり、故に吾人は勉めて躰慾を制し、其生存を幇助する願望なるものを發達せしめざるべからず、凡て道理に合し自己の生存を幇助するものは善にして、之れを害するものは惡なり、而して道理上より自己の生存に關し、善を助け惡を避くるのみならず、情緒上にても生存を損傷するものを制せざるべからず、故に能作用的愛情は道理に適合せるものなれば、此力によりて所作用的愛情の如き不道理なるものを制せざるべからずと、

斯く氏は道德の目的を以て自己の生存にありとし、之を幇助するものを善とし、妨害するものを以て惡なりとする點より見るときは、氏は自利主義、若くは主我主義を主張する經驗派、或は自利派と其轍を同じくせるものゝ如し、然れども氏は全く彼の經驗派、自利派とは異なれるものなり、何となれば彼の經驗派若くは自利派の如きものは善惡の標準を感覺上の經驗より取り來るも、氏は感覺上のものは皆所作用に屬するものなれば道理に適合すると能はざるものにして、精神內に存する能作用即ち道理力を以て感覺上の躰欲を制抑せざるべからざるものなりと論じて、道理心を以て倫理道德の標準とせり、是れ氏は自身の保全を以て目的とするも

のなるも、經驗派等に屬せずして道理派に屬する所以なり、

氏の倫理說に於て一種特有の性質とすべき點は道理と愛情とを結合せるにあり、古來の學者多くは道理と愛情とは相反對せるものなれば、道理を以て愛情を制せざるべからずとせるも、氏は所作用的愛情の如きは外界の爲めに起りしものなれば道理に適合せるものなりとすると能はざるも、精神內に起る愛情即ち能作用的愛情は精神內に存する必然の理法に從りて生ずるものなれば、決して道理に適合せざるものなりとすると能はずと、是れ氏の倫理說の長所なり、而して一長あれば一短あり、一得あれば一失あるは、現象界に於て免るべからざる事情にして、氏の說も其長所のあると同時に其短所あるを見る、今茲に其短所を略述せん、

氏の倫理說に就きて短所とすべきは、單に理論上の道理のみを取りて實際上の道理を放擲せしにあり、換言せば精神上に存する道理のみを取りて、社會上に表現せる事實を顧みざるにあり、何となれば道理には理論上と實際上との二種ありて共に輕忽に附すべきものにあらず、然るに單に理論上の道理のみを求め、實際上の道理を排するに至るときは、自然に世間と關係を絕ち遯世脫俗の境に入り、空寂無爲

の位置に達せざるべからず、既に遯世脫俗の傾向を有し、退守の一方に偏倚せしものなれば、之を呼ひて完全なる倫理とすると能はざるや明なり、氏自らも亦厭世脫塵の主義を取り、世外に逍遙せんとを樂びたるものゝ如し、是れ恰も支那に於て老莊派が孔孟派の實際的一方に偏したるに反對し、理論的一方を主とし、遯世脫塵以て虛無自然の本躰に上達せんとを樂ひたると同一般なり、畢竟氏の倫理の理論一偏に傾きたるは全く其形而上哲學の主義より流れ來りしものなり、何となれば氏は形而上學に於て內界と外界の區別を立て、物質と云ひ心意と云ひ、均しく本躰の屬性にして二者併行對立し同等同權なるものなれば、內界は決して外界の爲めに制限せらるべきものにあらず、故に吾人は勉めて內界の獨立を保存し、外界の關係を遠離し、精神を安靜にせざるべからずと、此の如く外界の關係を絕ち、精神の安靜を主とするものは純全なる道德と云ふべからず、何となれば一個人の道德は成立するとを得るも、社會上の道德は決して成立すると能はざればなり、又他に一の原因ありて氏の所論に影響を及ぼしたるものあり、何ぞや、曰く氏の生活上の情態是れなり、氏は普通世俗の信ずる宗教を奉せずして一家獨立の說を立てたるを以て、

世間よりは異端を以て目視せられ、且つ氏は猶太人種に屬するを以て社會よりも擯斥せられ、心中おのづから鬱々たりしものありしなるべし、其感想や遂に發して氏の哲學及び倫理上に表現せし者なるや疑を容れず、而して此の退守主義は後厭世論者の巨魁たるシ■ペンハウハー氏の所論を誘起するの原因となりしも亦明かなり、

氏は又躰慾の奴隸たるの境遇を脫離し、精神の自由獨立を得るの手段は如何せば可ならんかを、其倫理書第五卷に論ぜり、其意に曰く、吾人にして道理的知識により て考察を降し、以て明瞭なる觀念を喚起するときは、假令外界に接するも躰慾の如きものゝ爲に制抑せらるゝとなく、躰慾は却りて明白なる觀念の爲に消滅すると、恰も霜露の朝陽に於けるが如し、凡て外界より來る觀念は善と稱すべきものにあらざるも、明瞭なる觀念の精神中に盛なるに從ひ、外界の觀念も一變して精神上の善に飯するものなり、此明瞭なる觀念は必然の理法によりて起り、道德上の情操も必然の理法によりて起るものなり、例せば憫憐の情の如きは力の弱きものを憐むものなれども、人の初めて生れしとき、其躰力弱小なるも之を憫む情起らざるは必

然の理法によりて然るなり、此の如き明瞭必然の道理的觀念を名けて能作用的愛情とは云ふなり、

然れども此道理的愛情を以て愛情中の最も完全なるものとすると能はず、何となれば尙ほ外界の帰納經驗に關係を有すればなり、故に此愛情の上に、第三、合神的愛情即ち寂靜無爲の愛情あり、此情は神の觀念に基き起るものにして、最高の位置を占有するものなり、而して此情は神が自身を愛する情の分賦して吾人に有するものなれば、神も吾人も更に異なるとなく、神の吾人を愛する情も、吾人が神を愛する情も合同一致し、神と吾人とは同躰無別の境に達するものと云ふべし、是れ神の吾人を愛する情は、吾人の精神上に有し、吾人の神を愛する情は、又神の心意中に有するを以て合同一致するとを得るものなり、此合同一致は即ち吾人の安心立命にして、神の救助を得たるものなりと云ふ、此の如く氏は神の愛によりて外界の慾念を脱し、神より得たる智と情とを確知するときは、万有の本躰即ち神と一躰に帰するとを得と說きたるを以て見れば、氏の所論は耶蘇教所談の天神救助を說かずして、却りて佛教所談の成佛得道を說きたるが如し、又氏を以て万有神教を主張するものなりと認定せるも、其說の佛教に近きを知るべし、

前述三種の愛情を概言すれば、第一、躰慾的愛情、第二、道理的愛情、第三、合神的愛情にして、此中第三は氏以前の神秘教派の論者が神は道理以外に存し、人智を以て測度するとを能はざるものなりと論ぜるに反對し、吾人は神の一部分なるとを道理上より批判的に證明せしものなり、此を以て氏の宗教學を名けて批判的宗教哲學とは云ふなり、

上來梶々講述し來りしものはスピノザ氏の宗教哲學を概論せるものなり、是より進みて氏の著書政教論と倫理學に於て宗教に關する見解の相反する所あるを以て、其點の一二を示し、且つ之を批評し、其局を結び、而して後、氏以后哲學者の宗教哲學に論及せん、

政教論に於ける宗教說と、倫理學に於ける宗教說とは、大に反對せる方向を取れり、第一に神を論ずるに就き、政教論にては神は秘密的のものにして、道理以外に存し、吾人の得て知るべきものにあらずと說き、倫理學にては神は因果必然の理法外に存するものにあらずして、宇宙万有の本躰即ち神なりと說きたり、第二に精神不滅

を論ずるにも、政教論にては吾人が其一生の間神を信ぜず、慾情惡心を起し、外界の爲に制せらるゝときは、其精神は肉躰と結合せるを以て、肉躰の死亡すると同時に、其精神も消滅に皈し、決して神の恩惠を蒙り、其精神をして永久不滅ならしむると能はず、故に若し精神の永久不滅を願はゞ、勉めて外界の慾念を遠離し、誠心誠意以て神德と合躰せざるべからず、然るときは假令肉躰は腐朽し去るも、精神は肉躰を離れて獨立せるを以て、永久不滅なるとを得るなりと說けり、然るに倫理學にては吾人の精神は本躰即ち神の精神の一部を分賦して占有するものなれば、神の精神にして消滅せざる限りは、吾人の神を信ずると否とに關せず、吾人の精神も永久不滅のものなり、然れば肉躰に關係せる精神作用即ち感覺記憶想像等の如きものは、肉躰の腐朽と共に消滅に皈せざるを得ず、故に一個人の上に於て肉躰に制せらるゝ部分と、獨立せる部分との二種の精神を分ち、其一は滅亡、其二は不滅なりと定むるなり、此論によりて氏は智者學者の多く死を怖れざるは其精神の中に不滅の部分多く存するにより、愚者の死を怖るゝは滅亡の部分多く存するによると云ふ、第三に宗教を信ずるとに就き、政教論にては神を信ずるには道理或は智力を以てす

べきものにあらずして、單に默信服從せざるべからずと云ひ、倫理學にては智力或は道理を離れて神の救助を得んとするも決して得べからざるものなりと云ふ、第四に肉躰上の情慾を制するに就き、政教論にては肉躰的愛情を制するには、一層强き情即ち神の情を假りて制抑せざるべからずと說きて、自己以外の神に向ひて救助を求め、倫理學にては不道理的の愛情を制するには道理的愛情を以てすべしと說きて、直接に自己の精神内に向ひて之れを求めたり、第五に政教論にては總て耶蘇教の歷史中に記載せる天神の示現及ひ奇行奇跡は全く信じて疑ふべきものにあらず、此信仰によりて神の恩惠を蒙むるとを得るものなりと說き、世人を善道に導き政治上の平穩無事を以て目的とせり、倫理學にては假令其歷史中に記載せる天啓奇跡と雖も道理に合せざるものは悉く排斥し、單に智力道理を以て神の救助を期せざるべからすと論し、世間を脫離して精神の本躰に皈し、寂靜無爲の境に達するを以て目的とせり、

一人一個の思想を以て同一の事を論ずるに、斯の如く兩番相反對せるは豈又不思議ならずや、是れ一は徹頭徹尾哲學上の道理によりて推論し、一は全く實際上を主

として立論せるによるものなり、然れども一歩を進めて考察するときは、相互一致の點なきにあらざるなり、第一に倫理學の目的は世人の迷ふ所の肉躰上の情慾を斷滅し、精神上の自由を發揮せんとするにあり、政教論にても肉躰上の情慾を去りて單に世人をして道德界中に導き入らしめんとするにあれば、兩者其旨を一にせりと云ふべし、第二に倫理學中にても情を制するには情を以てせざるべからず、即ち不道理的の情を制するには、道理的の情を以てせざるべからざるとを論じ、政教論にては下等の情を制するには上等の情を以てせざるべからざるとを論ぜり、此の情を以て情を制するの一點に至りても、亦兩者の一致する所なり、第三に政教論と云ひ倫理學と云ひ、共に精神の不滅を論するに至りては又同一なり、

而して此の兩者中共に精神の不滅を主張する所より見るときは、氏は普通の宗教社會の唱導する所說を保護せるものゝ如し、然れども氏の說は全く宗教社會の所說とは其性質を異にせり、普通宗教家の精神不滅を唱論する說に曰く、吾人の神に向ひ尊信を盡し愛敬を致すときは、神は其報酬として愛憐を垂れ、救助を與へ給ふ、によりて、吾人の精神をして恒久に存在せしむることを得るものなり、若し神を敬し

道を守るも、神は吾人をして精神不滅の境に達せしむることを能はざるものならば、吾は肉躰上の情慾を逞しくし、眼前の快樂を貪りて更に神を敬するものなく、悉く惡人となり去らんのみ、然るに人皆道を守り神を敬する所以のものは、全く神の救助を得て精神不滅の境に達することを得るによると、氏は此推論の不道理にして論理に合せざることを駁して曰く、若し吾人にして道を守り神を敬するも精神不滅の境に達することを能はざるものならば、人類は皆躰慾のみを逞しくして惡人となり去るものとせば、是れ恰も水中に生活する魚が、若し其精神不滅なることを能はざるときは、水中を去りて生を陸上に移さんと想するが如し、豈此の如き理あらんやと、

又世間普通の宗教を信ずるものゝ見解を見るに、吾人の宗教を信じ神に敬愛を盡すは、神の救助を蒙り、未來の幸福を得んが爲に、先づ其價を拂ふものなり、若し未來に其幸福を得るの結果なきときは、吾人は道を行ひ神を敬するよりは、寧ろ肉躰の快樂を貪り其慾を逞しくせんと、氏は之を駁して曰く、吾人の道を行ひ神を敬するより得る所の幸福は、必ずしも未來に存するに限るにあらず、道德即ち幸福にして、吾人の道德を行ふことを得るは即ち神の救助によるものなり、何となれば此道を踐

み其德を行ふときは、神の救助に遇ひ、安心立命の位地に達し、躰慾の爲に制せらるゝとなく、獨立自由の境遇に遊ぶことを得ればなり、而して此救助を得るの心性作用は吾人の知識の力なり、此知識力は躰慾の如き情慾に制せらるゝものにあらずして、精神の自由を得せしむるものなれば、其力の强弱によりて神の救助を受くるにも高低の差を生ずるなり、故に其救助は精神の不羈自由に外ならず、此等の論に依りても氏は普通の宗教家の所論を補助せるものにあらざるや明かなり、而して其論は倫理學に於て哲學上より論ぜしものにして、政教論中の宗教說にはあらず、前段に縷述せるが如く、政教論と倫理學に於て反對の說明を何故に同一の宗教上に降せしかの問題を解するに、氏の考にては吾人は道理的愛情を以て不道理的愛情を制するとを得るものなるも、世界に道理的愛情を有して其力によりて不道理的愛情を制するとを得るものは、其數曉天の星の如くにして、多數の人民は皆不道理的愛情の爲に精神を束縛せらるゝものなれば、倫理學中に說きたる道理的宗教のみによりて安心立命の目的を達するとは容易の行にはあらざるなり、若し世界中に此一途の外に安心立命すべき道なきときは、此世界に充滿せる愚者をして悉く肉躰的情慾の泥中に惑溺せしめ、成道得果の幸福を得せしむると能はざるべし、故に世間別に愚者をして安心立命せしむる易行道なかるべからず、此易行道とは即ち顯示教にして、此教義は吾人より高等の意力を有する神の規律に順ひ、以て肉躰的の情慾を制するものなり、是れ氏が政教論にては世俗の爲に易行道即ち顯示教を說き、倫理學にては理論上難行道即ち道理教を說きたる所以なり、而して氏の宗教上に此の如き區別を附したるは、恰も佛教にて聖道淨土の難易兩道に分ちたるが如く、世人一般を教導するに此二道なかるべからざるとを知りたるによる、故に初めに政教論を著はし、普通の顯示教を說明し、進みて倫理學上に於て哲學上より道理教を說明したるなり、他の語を以て之れを言へば、政教論にて說きたるものは情感的宗教論にして、倫理學上にて說きたるものは智力的宗教論なりと云ふべし、之を要するに、氏の說は假令不道理なる想像上より成立せる顯示教と雖も、人民教化の上より云ふときは道理教と同じく必須にして缺くべからざるものなり、何となれば氏の意によるに世上の無智なるものは到底明瞭なる觀察を以て、必然の理法を解すると能はざれば、想像上神の存在を知らしめ、其力によりて勸善懲惡す

るより外なし、而して想像上無智のものを教化するには、天神は吾人の得て知るべからざる外界に存在し、吾人の賞罰を主るものなりと神秘的に之れを說明して、宗教の目的に達せしめざるべからず、既に此の目的に達すれば、道理的宗教によりて達じたる目的と異なるとなしと考ふるなり、

而して政教論は實際上社會の安全平和を目的として其說を立てたるものなれば、此書中には專ら宗教の自由を主張せり、其意に思へらく、世上人心の異なれると恰も其面の如くなれば、人民一般をして安心立命せしめんには、各人の心に適せる宗教を擇澤せしめ、決して唯一の宗教を以て人心を束縛すべきものにあらずと論ぜり、然れとも倫理學上にては宇宙は唯一の理法を以て貫通せるものなれば、吾人は其唯一の理法を以て、宗教の外は皆之を排斥せざるべからず、何となれば世に純全確實の宗教は眞理に二途なき限りは二種あるべき理なければ、宗教は唯一に限るべきものなればなり、此の如く兩說相反對するも其目的に到達するときは、政教論に論ぜる顯示教も倫理學上に論ぜる道理教も毫も異なるとなし、唯其の目的に達する手段に別あるのみなり、

是に於て氏の宗教哲學上に一の困難なる問題の生ずるあり、何ぞや、曰く、若し氏の論ずる如く顯示教と云ひ道理教と云ひ、其の手段には差別の存するあるも、其終局の目的に至りては同一無別なりとするときは、氏は倫理學上にて吾人の想像力の如きは躰慾的愛情に屬し、躰慾を滿足せしめんが爲に種々なる空想を起すものなりとなすにあらずや、而して此不道理なる想像力より成立せる顯示教を以て、其結果は道理智力より成立せる宗教を信じて得る所のものと同一なりとすれは、如何なる理によりて然るやの疑問是れなり、此疑問は氏の宗教哲學にては解明すると能はざる大難問なり、此等の難問を解すると能はざるは、畢竟氏は吾人の精神作用の上に道理的愛情と不道理的愛情の二種を設け、此二者を結合すべき中間の媒介物を設けざるによるなり、其媒介物とは何ぞや、總念是なり、總念は感覺上より來る種々の經驗を以て內界の精神に同化せしむる性質を有するものなれば、此總念によりて想像的信仰を道理的信仰に同化せしむるものとなせば、前の一難問を解明するとを得べかりしならん、又氏は事物の進化發達を說かざるを以て其解明に苦むも、若し此の發達を說きしならば、顯示教によりて起る信仰も發達して道理的信

仰と同一に歸着するものなりとの解明を與ふることを得べかりしならん、而して氏の事物の發達を說かざるは其哲學上の形式によりて然るなり、其故は氏以前の哲學者就中、希臘の亞利斯底德氏の形質論、及び耶蘇教論者の天神前定論の如き、多くは此世界の現象變化を論じて或る一定の目的に向ひて進むものと云ひて、其所謂目的論を主張したりしも、氏は之を駁擊し、世界は唯一の理法即ち因果必然の規律によりて成立せるものなれば、其の變化は一として因果必然の理法によらざるはなし、決して或る一定の目的ありて之に向て發達するものにあらずと論ずるによる是に於てライプニッツ氏起り、氏に反對して發達論を主張し、此の顯示教と道理教の兩者を結合せんとを勉めたり、要するに氏の宗教哲學は或點は長所と稱すべく、或點は短所と稱すべし、其長所とすべき點は、第一、古來の學者多くは宗教を解釋するに、歷史上の事實或は經典中の、文句に拘泥し、道理上より研究せるものなきも、氏は歷史上或は經文の如何を問はず、之れを哲理に考へ、其の原理を說明し、宗教哲學の關門を開きたるにあり、彼のプリュノー氏ボイメ氏の如きも道理上之れが說明を降せしも、宗教を宗教として研究せるが故に尙ほ神秘教派の臭味を脫する

と能はず、第二、古來の學者宗教家は神を、宇宙の外に求めたるも、氏は宇宙の內に求め、物心萬有の本躰即ち神なりとせるにあり、プリュノー氏の如きは已に萬有の本躰を以て神なりとはなしたれども、スピノザ氏は其上に必要の理法を加へ、宇宙の規律即ち神の規律なりとなしたるものは、其哲學中の長所なり、之れに反して氏は宗教に想像的宗教と、道理的宗教との區別を附したるも、此の二者を結合すると能はず、又進みて何故に此二者の性質氷炭相容れざるかを說明せざりしは其短所と云はざるべからず、是れ氏の哲學の形式によりて然るものなり、氏の哲學は其の形式をデカルト氏に取り、物心二者は全反對の性を有するものなるとを信じ、更に此二者の上に本躰即ち神なるものを立て、物心二者は其層性にして併行對立し、同等同權なるものなりとなせり、之れと同時に又身心を區別して同權を有するものとなし、愛情上にも躰慾と願望との別を付し、想像の如きは慾の一種に屬し、智力は道理より生ずるものなりと認定し、宗教にも想像的宗教と道理的宗教の別を立つるに至れり、此の想像的宗教は政治上社會の平穩を期し、道理的宗教は自由寂靜の境に達するを目的とせり、一は顯示教にして、一は道理教なり、一は實際に屬し、一は理

論に屬せり、此二者は各一得一失ありて可不可を其間に付すると難し、而して氏は此反對せる宗教を接合するとを勉めず、又其何故に反對せるかを説明せざりしを以て、其宗教哲學は未だ完全無缺のものと稱すると能はざるなり、

然れども氏が此の如く宗教上に二種の性質を分ち、之を統合すべき理由を説示せざりしは、後の學者に宗教研究の好材料を與へたるものなり、故に其後の哲學者にして一家の宗教哲學を起さんとするには、必ず先づ此反對せる宗教中の一を取りて他を捨つるか、又此の兩者を結合するか、何れか其一に居らざるべからず、是れライプニッツ氏とカント氏の宗教哲學が全く反對の點に立ちて説明を試むるに至りし所以なり、即ちライプニッツ氏は實際上を主とし、韓國氏は道理上を主とするの異同あり、而して哲學中に外界の本躰を主として論ずるものを實躰論(Realism)と云ひ、內界の本躰を主として論ずるものを理想論(Idealism)と云ふ、ライプニッツ氏は實躰論を取り、我智識以外に外界の成立を説き、其所謂神は吾人の智識外に存し外界に存するものなりと獨斷せり、之に反して韓國氏は理想論を取り、外界の諸現象は皆我主觀上に成立せるものとなし、其實躰の如きは全く我智識外にあるを以て決し

て知るべからざるものなりと説き、其宗教を論ずるも內界を本據として立論せり、此の如く二氏の宗教哲學に內外其起點を異にして立論するに至りしはスピノザ氏の學其端緒を開きたるや疑なし、

スピノザ氏の宗教哲學は茲に其局を結び、是れよりライプニッツ氏の宗教哲學を講述すべし、

ライプニッツ氏宗教哲學

氏の哲學は形而上學(Metaphisic)と宗教哲學(Theology)とにして、此二學は皆スピノザ氏の形而上哲學及び宗教哲學に反對を取りたるものなり、然れども二氏の哲學はデカルト氏の學派に屬するを以て大躰より見るときは同一の學派と云はざるを得ず、其の同一の學派と云ふは、哲學史上獨斷派或は唯理派と稱するものにして、即ち內界の思想を以て根據とし、數學的原理に本づき、演繹的研究による學派なり、此學派を獨斷派と稱する所以は自己の思想上決して疑ふと能はざるものあるときは、外界の實際に徵するを待たずして、直に確然不拔の眞理なりと斷定するによる、其派の鼻祖はデカルト氏にして、氏の哲學は思想上疑はんとするも疑ふと能はざ

るものは眞理にして、神の實在の如きは如何に思想内に於て疑はんとするも決して其上に疑團を起すと能はざるものなれば、其の實在は眞理なりと云へる論法を以て組織せるものなり、此論法は數理上の原則なる三角の總和は二直角に均しと云へる論法の如く、思想上にて確定せるものは如何なる場合にても適合すべきものなりと獨斷し、單に理論のみに據りて哲理を考定せるものなり、

ライプニッツ氏と云ひ、スピノザ氏と云ひ、同じく此派の繼續者たるを以て假令各一家を成したるも、獨斷派中の一人たるとは免かれざるものなり、然れども其の哲學の部内に入りて之れを見るときは、二氏の哲學は大に反對する所あり、蓋しライプニッツ氏のスピノザ氏に反對せしは、其哲學の上に一歩を進め、一層完全なる哲學を組織せんと企てたるによるものなり、

スピノザ氏は哲學上に於て道理と不道理とを分ち、宗教上に於ても實際的と理論的とを區別せしも、遂に此の二者を結合すると能はず、又其結合すると能ざる所以及び其二者の關係如何を説明せざりしを以て、此缺點を補ひて一家の哲學を起したるものはライプニッツ氏とカント氏なり、ライプニッツ氏は實際上より説明を起し

万有實在論を主張するに至り、カント氏は理論上より説明を起し主觀的理想論を主張するに至れり、即ち其論内外の別あり、前者は外界上に万有の實在を論じ、後者は内界上に物心の現立を論ぜり、是れスピノザ氏が本質論を唱へ、内外兩界の並行對立する所以を論じて、其結果實際と理論との撞着を來しゝを見て、ライプニッツ氏は外界に論點を定め、カント氏は内界に論點を定め、各其途を分ちて此撞着を會通せんとを勉めたるなり、而して其所謂外界論は經驗學派、唯物學派等の唱ふるが如き感覺現象上の論を義とするにあらず、有形無形の物元子の本躰の外界上に實在するを云ふなり、

ライプニッツ氏の哲學とスピノザ氏の哲學と反對せる點を述べんに、スピノザ氏は物心万境の本躰は唯一の躰にして數個ある者に非ず、其唯一の躰を名づけて神と云ふ而して物心二者は唯一の躰即ち神の層性にして、万境は層性の所現即ちモードの狀態なりと論じて万有神教を唱へ、ライプニッツ氏は之に反して万有の本躰は唯一なる者にあらずして、事物の無數なるが如く、本躰も亦無量なりと論じ、唯一本躰論を駁して曰く、若し物心万境は唯一の本躰に於ける層性なりとするときは、決

して無量無數なる万境が歴然として現立する所以を知るべからず、万境の斯く現立せる所以は事物各自に其本躰を有するによる、此無量の本躰の表現せるものは即ち物心万境なりと、斯く二氏の反對を來せしは其の見解の衰裏せるに因るなり、

スピノザ氏は万有を概括し、其中に普遍なる道理の存するを見て、万有は唯一の本躰より生ぜる者なりとし、ライブニッツ氏は万有を分解し各自個々の本躰あるを見て、其本躰は無量無數なりと斷定せるものなり、換言せば前者は万有の裏面より觀察を下し、後者は万有の表面より觀察を下せるによる、

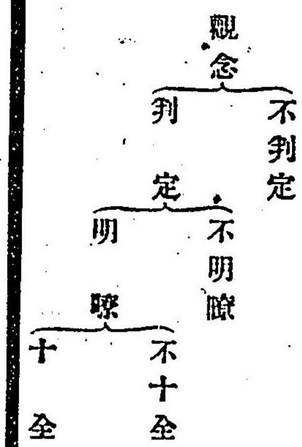
ライブニッツ氏は前論の如く、事物各自に本躰あるとを主張し、其躰は事物を組織せる元子(Monads)なりと論ずるを以て、氏の哲學を稱して元子論(Monadology)と云ふ、此元子は理學上にて元素と稱するものゝ如く、一切万有皆此元子より成立する者なり、然れども理學の元素は皆生活力を有せざる死物なるも、此元子は生活力を有するの別あり、氏は此元子の生活物たる所以を説して曰く、若し元子にして死物ならんか、如何して吾人の如き精神的生活物を成立せしむるや、世界に生活力を有するもの植物動物其數甚だ多し、人類の如き高等なる精神作用を有する者の如きは、決

して無機無覺の死物より成立すべからず、然るに元子其物は自ら活動する勢力を有する生活物なるが故に、自生自發して無機物より草木の如き生活物を現し、進みて動物となり、更に發達して人類の如き高等なる精神作用を有するに至るとを得べき者なり、

此の如く氏は元子を以て生活力を有するものなりと認定し、此の元子の發達によりて吾人の如き高等なる精神的生活物を現生するものなれば、其の各元子の中に思想觀念を有するものとなせり、其論に曰く、觀念に二種あり、即ち吾人の意識内に存するものと、外に存するものとなり、内に存するものを名けて有意識觀念(Concious idea)と云ひ、外に存する者を名けて無意識觀念(Unconcious idea)と云ふ、此二種共に元子中にあり、例へは人の熟睡せるとき、或は氣絶せるときには、全く觀念と稱すべきものの一なきが如くなるも、是れ單に有意識觀念を現せざるのみ、無意識觀念は依然として存するなり、若し無意識觀念も有せざるものとせば、如何にして有意識觀念を再生せしむることを得るか、而して此二種の觀念は判然たる階級區別を有するものにあらずして、同一元子の發達の前後に應じて其別を示すのみ、此無意識觀念のみ

を有するものは、未發達の元子にして、之れによりて組織せらるゝものは金石等の無機物なり、此元子進みて有意識觀念を有する其程度に從ひて、草木禽獸乃至人類の別を生ずるなり、故に如何なる元子も皆多少の觀念を有するものなれば、生活物たるや明なり、而して物心二者は此生活的元子より成立せるものなれば、我肉躰を組織する元子も、万有を組織する元子も皆同一に生活及精神を有する者ならざるべからすと、是れ氏の元子論の理學上の元素と異なる所以なり、

是に於て氏の元子論に向ひて一の疑問の生ずるあり、即ち若し元子を以て悉く生活を有し觀念を有するものとせは、如何にして目前の物質の如き無生活無意識のものを現見するかの問題なり、氏は此問題を説明するが爲めに觀念を分類して左圖の如くにせり、



一物を見て其全躰を知るを判定と云ひ、知ると能はざるを不判定と云ふ、又全躰を見て其部分を知るを明瞭と云ひ、知ると能はざるを不明瞭と云ふ、其部分を見て部分の部分を知るを十全と云ひ、知ると能はざるを不十全と云ふ、此判定明瞭等の觀念は其躰完全にして能作用なり、不判定不明瞭等の觀念は不完全にして所作用なり、人類の觀念の如きは最も明瞭完全にして、最も高尚なる能作用を有し、動物は人類より一段下等に位するを以て、其觀念も一段不完全にして、其能作用も一段微弱なり、草木に至りては一層甚し、無機物に至りては全く不完全にして、且つ全く所作用なり、物心を比較して之れを論せば、物は不完全なる觀念的元子によりて成立し、心は完全なる觀念的元子によりて成立するものなり、心中にても意識以内に存するものは完全にして、以外に存するものは不完全なり、凡て不完全なるものは他の爲に制せられ、自働自由の力を失ひ、全く所作用の狀態を現するなり、是を名けて物質性と云ふ、

此物質性は元子の實躰に固着せる性情にして、觀念の不明瞭なるものに外ならず、故に若し其自働自發の力によりて次第に發達すれば、純然たる觀念性能作用的の

狀態に達するものなり、此物質性の多量を有するものを名けて物質と云ふ、植物動物人類等も皆物質と同一の元子より成立するも、其各種の別あるは前にも言へるが如く、其發達の程度によりて然るなり、此の如く物心二者の極を同等同一の元子に歸し、發達上より差別を論じたるは、ライプニッツ氏の論のスピノザ氏に反對する所なり、

氏の說による時は万有の本躰とは吾人の感覺上に現するものを云ふにあらず、感覺上の事物を組織せる無數の元子を云ふなり、故に吾人は其本躰を見んとするも、感覺力の不完全なるが爲めに之を見ること能はず、又事物は無數の元子より成立せるものなるも、吾人之れを見て一物躰なりと認定するは、亦我感覺力の不完全なるによるものなり、例せば銀河の如きは、吾人の感覺によるときは一物躰の如く見ゆるも、實際望遠鏡によりて見るときは、無量無數の星點より成立するを知るべしと、故に氏の万有の實躰を論ずるは、唯一實躰論にあらずして無數實躰論と謂ふべし、

且つ氏が元子を以て生活力を有せるものなりと論定せるは、當時盛に學者間に行はれたる唯物主義及經驗主義に反對せしによる、蓋し氏の意若し唯物論者及經驗學派の如く、元素を以て無機の死物となし、精神作用の如きも無機元素の配合によるとせば、是れ死物より活物を生ずる理なり、死より活を生ずるは、無より有を生ずと云ふに異ならず、是豈論理の許す所ならんや、故に氏は元子を解して活物となせり、又デカルト氏及ひスピノザ氏は物心二者の並行對立を論じ、全く其性を異にせるものとなせしも、ライプニッツ氏は此二者は同性の元子より成立するものとなし、唯元子發達の度に應して物心の別あるなりと論じ、前二氏の會通すると能はざる物心の關係を明示したるは氏の卓見と謂ふべし、

氏は元子の發達を論ずるに當りて、三種の原則を立てゝ說明を下せり、第一を必定の道理と云ふ、必定の道理とは總て如何なる事物と雖も、決して必然の理由原因なくして現存生起すると能はず、其一變一化必ず然るべき必然の道理ありて存すと云ふもの是れなり、是れ數學的論法なり、第二を連續と云ふ、連續とは如何なる事物と雖も其變化をなすに、突然其性質を變じ、其關係を異にすること能はず、必ず其間に間斷なく連續したる一脉の關係順次によりて發達するを云ふ、是れ第一原理た

る必定の道理より派生せる原理なり、何となれば若し事物の變化するに其各段連續せざるものならば、其間に一貫の道理なかるべきも、苟も道理あらば必ず連續せざるべからず、第三を異同と云ふ、異同とは如何なる事物と雖も二個以上の事物は全く些少の差異なしとすること能はず、必ず幾分かの異同あるものなり、例へば二個以上のものにして其躰同一なりとするも、時間上或は空間上にては必ず差異あるべし、決して絶對的同一なるものあるべからず、此原理も第一原理あるによるものなり、

氏は此三種の原則によりて元子論を證明せり、凡そ事物の現存するには必定の道理によるものにして、其發達するには間斷なく連續するものなり、且つ其發達の程度異なるに從ひて種々の差別を生ずるものなり、而して元子各個は皆獨立したる觀念性の躰にして、實に各個一種の小世界なり、其中に自發自動の作用を有し、知識思想の原形を有し、漸く發達して生活作用、感覺作用、精神作用等を表現するものなり、故に其發達は理學上に説くが如き、引力、拒力、集散、分合の器械的作用によるものにあらず、換言すれば外部の關係によりて發達するにあらずして、内部の自發自動

作用によりて發達するなり、

斯く氏は各元子を以て獨立自由のものとなし、他元子の關係を有せざるものとなすときは、忽ち此に一の疑問ありて起る、即ち各元子の集合團結して一個の物件、或は一個人の精神を組織するは如何、此疑問は氏も説明に苦めり、而して强ひて其説明をなすに當りては、神を立てゝ各元子を契合する作用は其の媒介の力なりとし、即ち神の前定する所なりとなせり、此の如く神を立てゝ總万有を其配下に屬せしめたるはデカルト氏と同一なり、然れども其配下に屬する所以、即ち神と万有との關係を論するに至りては大に異なれり、デカルト氏は物心二者を契合するものは神にして、其契合は時々刻々神の媒介あるによると論定せるも、ライプニッツ氏は其契合は太古にありて神の前定する所なりと云ふ、此前定説は氏の形而上學及宗教哲學の根據にして、氏が神の存在を證明するも此前定説によるなり、

氏曰く、凡そ吾人の思想中に於て最も明瞭にして、且つ確實なるものは我身躰の存在に如くものなし、之れと同樣に明瞭にして、且つ確實なるものは神の存在なり、其存在は恰も數學上の原則に於て、一と一を合すれは二となり、直線は曲線より短し

と云ふが如く、決して疑ふべからざるものなり、故に神の實在を證するには世間一般に用ふる論據にて充分なるも、更に歩を進めて其不足を補ふときは、其實在は一層明瞭ならん、今之を證するに二方あり、一は先天的證據(理論上)にして、一は後天的證據(實際上)なり、

先天的證據とはデカルト氏の有神說の不充分なるを見て、更に其上に一歩を進めたるものなり、デカルト氏曰く、吾人の思想中に於て最も明瞭なるものは神の觀念に如くものなし、故に神の實在は決して疑ふべからずと、ライプニッツ氏此說を許して曰く、其說論理に背反するものにあらざるも、未だ充分なる論證を有するものにあらず、何となれば吾人の思想中には果して神の觀念を有するか否、又此觀念は吾人に具有せりとするも、其觀念は果して道理に合するものなるか否、又吾人人類中には其觀念に反對せる思想を有せざるものなるか否等の問題を研究せざるべからず、若し苟も神の觀念に反對するものあるときは、神の存在を確實なりとすると能はず、然るにデカルト氏は此點迄を論究せずして、直ちに有神の斷定を降したるものなれば、其論證も確實なる數理的證明法と云ふべからずと、

是に於て兩氏の論其方向を異にするに至れり、先づデカルト氏は神に關する觀念は、吾人の意識中に有する一種の智識なるが如く考ふれども、ライプニッツ氏は我智識全躰の性質より生ずるものゝ如く論せり、即ち前者は觀念一部分に就きて神の實在を證するも、後者は觀念の全躰に就きて論ずるとの別あり、若し吾人の觀念中に神に關する思想なしとせば、吾人の思想中に恒久必然の眞理ありて存するの理は如何に解すべきか、然るに吾人の思想中に必要の眞理を具有するは、神の思想より來るものにして、神の思想は必然の眞理より成立するものなり、故に知るべし、吾人の思想中に明瞭なる眞實なる且つ恒久なる觀念の存するを以て、神の實在の疑ふべからざるとを、

此恒久必然の眞理を解釋するにデカルト氏とライプニッツ氏とは其意見を異にせり、前者は以爲らく、吾人の思想中に存する恒久不變の眞理なるものは、神の意志によりて隨意に定めて吾人に賦與せしものなりと、然れども後者は之を駁して曰く、若し眞理にしてデカルト氏の論ずるが如く、神意の專斷によりて所定せられしものなりとせんか、然るときは眞理は偶然なるものにして、必然の理法と云ふべから

ず、何となれば眞理は神意によりて變ずるものとせば、現今吾人の思想中に存する眞理も、神意の如何によりて變更せらるゝことあるべし、或は現今の以て眞理なりとする所のものゝ、他日眞理にあらずとなることあるべし、此の如き眞理は決して必然不變と云ふべからず、故に眞理なるものは、如何に神は全智全能なればとて、決して變更すること能はざるものなるべし、加之、神の心意は此必然不變の眞理の總和にして、且つ其源泉なるべし、此の如く論し來りてライプニッツ氏は必然不變の眞理は、吾人思想の本性にして、其本源は神の開發的心意中に實在せるものとなし、以て世の客觀的實在を唱ふる有神論者の說を一層深く論定したるなり、

眞理を以て必然なるものなりと論定せるは、スピノザ氏とライプニッツ氏と更に異なる所なきも、スピノザ氏は万有の本躰即ち神なりと論じて、所謂万有神敎を主張せしも、ライプニッツ氏は万有の本躰は各個獨立して存するものなれども、是を創造前定せるものは神にして、神は万有の外に存在するものなりと云ひて、客觀上神の實在を論ぜり(以上述べたるは即ち先天的證據論なり)、

次に後天的證據とは、外界の事物を推究して神の實在せるとを證明せるを云ふ、吾

人は外界の事物を見るに種々なる變化をなして、其上に一定の法則なく、偶然に成立し、偶然に變化するものゝ如き觀を呈せり、然れども万般の現象は皆必定の道理によりて成立し變化するものなれば、變遷常なき事物と雖も、之を推究し觀察するときは、必ず必定の道理の存するとを發見すべし、此必定の道理を推究し去るときは、終に一の大本源たるものに歸す、此大本源たるものは無限絕對の躰にして即ち神なり、

凡そ吾人は一事物の成立するを見るときは、必ず之が原因たるものゝ存するを知る、此の原因の原因を推究するときは、其局終に最始の原因なるものあるを考へざるべからず、此最始の原因たるものは、必ず無始より成立し、絕對にして無限なるものならざるべからず、此無限絕對のものは即ち神なり、而して吾人は原因結果の理法によりて神の存在を知ることを得るも、此原因結果の理法は、有形上に成立するものか、或は無形上に成立するものか、又物質的のものか、觀念的のものかと云ふに、勿論無形にして觀念的のものなり、万有は皆吾人の智識によりて成立し、觀念によりて現はるゝものにして、若し智識觀念を除去するときは、万有は成立すること能は

ざるものなり、此智識と云ひ、觀念と云ふものは、之を探究するときは、智識觀念より成立せる無限絶對のものに歸するより視れば、神は無限の智識、無限の觀念より成立するものなるを知るべし、

又神の實在を證する一例を示さば、外界に存する事物は各個獨立して一致せるものにはあらざるも、斯く相互に契合調和するには、是が原因たるものなくばあるべからず、此の原因は必ず万物を調和する力を有するものなればこそ、万物は秩序整然として成立するなれ、此の契合調和の原因とは即ち神なり(以上後天的證據論なり)、

此の如く氏は先天的證據論に於ては、吾人の思想に考へ、觀念の本源に溯りて、天神の實在を證明し、後天的證據論に於ては、外界の事物を推究し、其成立する所以を探りて神の實在を論定せり、氏の宗教論は道德學に最も必要なるのみならず、形而上學にも亦必要なるものなり、而して天神の實在を客觀的に證明するは近年獨逸の哲學者ロッチエ氏の所論之に同じ、而して其論實にライプニッツ氏を繼述せるものなり、

神の實在に關しては先天的證明と後天的證明とによりて明白なりとするも、猶ほ其の神は如何にして成立せるか、又其性質は如何なるものかを辨明せざるべからず、此神の性質を論ずるに至りては、ライプニッツ氏はスピノザ氏と同一の點なきにはあらざるも、亦大に反對せる點を有せり、ライプニッツ氏は以爲らく、神は万有の本源にして無限の本躰なり、此無限の躰中には一切の勢力、一切の智識、一切の意志を具有せるものなり、此無限の勢力は万有を目的とし、此無限の智慧は眞理を目的とし、此無限の意志は善行を目的として、天地宇宙を組織するに至れり、故に神の性質中には吾人に固有せる一切の精神も、諸元子に固有せる一切の勢力も、悉く具有せざるはなく、其勢力能造即ち神の躰にありては無限なるも、所造の元子にありては有限なり、不完なり、而して其元子の有限不完なるは、其發達の程度低くして、其有する觀念の不明不完なるによるのみ、故に元子は何程不完有限なるも、其本源なる神は完全無限ならざるべからず、

凡そ神の躰たるや、完全の意志、無限の智識より成立して、過去現在未來を洞察し、天地万有を照見する力を有するものなれば、神は此世界を創造するとき、既に未來億

万世の最後の目的迄を定めたるものなるべし、故に神は此世界の最始の原因にして又最後の原因なり、最始の原因たる所以は、神は此の世界の創造者なるが故にして最後の原因たる所以は、神は此世界を創造するとき、既に一定の目的を立てゝ、此目的に達せしめんが爲に世界をして發達せしむるものなればなり、而して万有は神の所定に隨ひて漸々進化するものなれば、所造の万有は能造の神に向ひて進み、能造の神は所造の万有の中心にありて万有に遍在するものなり、故に神は世界万有の初因にして、又終因なりと云ふなり、此點は氏の道德學上及形而上學に關しては大切なる部分にして、氏の哲學の骨子とも稱すべきものなり、若し氏の哲學中より此說を削去するときは、其哲學は完く其性質を變ずるに至らん、又此點を以て氏の哲學とスピノザ氏と大に異なる所以を證するとを得べし、

氏は又世界の成立せし所以を論じて曰く、神の本躰たるや統一無雜にして、而も無量の性德を有するものなり、此德、内に充滿し、溢れて外部に發散し、無數の元子と成り、此元子の發達するに隨ひ、相互に契合し、以て宇宙の万象を組織するに至れり、而して此万象も又發達して漸々高等に進み、次第に神に近づくものなり、故に神は世

界の創造者たるも、世間の信認せるが如く、神意の專斷自恣によりて創造する大工的のものにはあらず、假令神は將來を豫定せるものなるも、皆其性德の發生せしものに外ならざるなりと、此點より見るときは氏の所論は彼のスピノザ氏の所論と一致せり、何となれば氏は神は世界の本躰にして、万物は神の屬性なりと論じ、氏は万象の羅列せるは神の性德發散して現示したるものなりと論ずるを以てなり、然れども後者は神は宇宙の外に存するものにあらずとし、前者は神は宇宙の外部に存在し、以て万有を總括するものなりと論ずる點に至りては、互に反對せり、此の如くライプニッツ氏のスピノザ氏に反對せるは、氏の意、耶蘇教の天神說を成立せんとするにあればなり、蓋し氏以前の學者即ちブリュノー氏スピノザ氏等は皆神を解釋するに哲學風を以てし、万有神教の主義を取りしも、氏は之に反對を試みたればなり、

前に述べたるが如く、神は無量の性德を有し、無限の智識を有するものなれば、世界を創造するにも、單に此一小世界を造りしのみにては、無限の性德を有するものとすると能はざるを以て、氏は之を辨じて曰く、神は無量の智識を有して、無數の世界

を創造するの能力を有するものなれども、神の創造せる世界の此世界に限る所以は、無數の世界中最も道理に適し、完全に近きものを撰みて此世界を造るに至りし故なり、而して其創造はスピノザ氏の論するが如く、万有必然の理に基きたるものにあらずして、天神固有の自由の能力に由れるものなりと云ふ、此自由の能力とは神の意志にして、其意志は智識によりて生じたるものなれば、智識によりて是非を審判し、未來永遠を前定して此世界を創造せるものなり、故に神は世界最始の原因にして又最後の原因なりとは云ふなり、

此く論するときは、神は其意志の自由に任し、自恣專斷に此世界の規律を變更し、昨日の眞理は今日の不眞理とするとを得るが如くなるも、如何に神意の自由に依りて創造せられたる世界なりと雖も、決して其意によりて恣に變更すると能はず、何故となれば、前にも述べたるが如く、神意の自由とは智識を離れて別に成立する意志にあらずして、智識に於て道理なりと許す限り、其意志を自由にするとを得るものなれば、決して智識の認めて眞理なりとするものに反背して、自由作用を現呈する道理なかるべし、故に今日世界に成立せる必然の規律は、皆神の智識にて道理なりと認定したる者なれば、神が其中間に立ち入りて之を變更せざるや明かなりと、

此論點はスピノザ氏の因果必然論に一致する所なり、

今更にライプニッツ氏の自由意志論を説明するに、若し神にして此世界を創造するときは、道理上眞理なりと認定したる世界の規律を中途にて變更するが如きとを爲すものとせんか、神は隨意に道理を變じて不道理となすものにして、神は一切の智識思想を有する完全無缺の躰なりと爲すと能はず、單に神をして完全無缺のものなりと爲すと能はざるのみならず、社會上の道德も之れと同時に成立すると能はず、又形而上學、形而下學の別なく、一切の學術も成立すると能はざるべし、果して然らば此世界は一定不變の眞理を有せざる暗黑世界となるべし、故に神の意志は氣儘勝手の自由意志にあらずして、智識道理に本きたる自由意志ならざるべからず、果して然らば神は其創造の時一たび定めたる宇宙の規律を變更せざると、論を俟たずして知るべし、此の如く智識と意思とを契合して自由意思を解釋せるは、氏の哲學の長所にして、世間普通の自由意志論者と其見を異にせる點なり、

之を要するにライプニッツ氏の所説は、スピノザ氏の所説に反對を試みたるものに

してスピノザ氏は因果必然の規律を以て万有の規律とし、神も此規律の外に立ちて其作用を呈すると能はずと論じ、ライプニッツ氏は万有の規律と神意とを區別し、神の意志は自由なるものにして、其自由作用によりて万有の規律を現出したるなりと論ぜり、此點より見るときは二氏の所説は互に反對せるや明なり、然れども其面より觀察するときは、同一の所論たるを見る、スピノザ氏は物心万有は皆神の屬性にして、其神躰の開發して現示したる者は即ち物心万有なりと云ひ、ライプニッツ氏は一切の万有は最始の原因即ち神躰中の諸德の發散して表現せるものなりと云ふなり、此の如く万有を以て唯一の本躰に帰する點に至りては二氏互に一致することを得べし、又スピノザ氏は万有の規律は原因結果の必然不易の規律なりと論じ、ライプニッツ氏は其規律を神の意志に帰せしも、神は中間にありて其規律を變更するとなしと論ぜしを以て、此世界は唯一の理法によりて成立すと云ふに至れり、是二氏の互に一致せざるを得ざる點なり、畢竟ライプニッツ氏の所説はスピノザ氏の所説の方向を轉じて立論せしものに外ならざるなり、

更に以上の異點の起りし所以を探るにスピノザ氏は神は宇宙の外に存するものにあらずして、宇宙の内部に存するものなり、神を宇宙の外に立つるが如きは通俗淺近の考にて、取るに足らざるなりと論ぜしも、ライプニッツ氏は之に反對し、通常耶蘇教に於て論ずるが如く、神を外界に立てゝ之を哲學上より解釋せり、是兩氏の説の其見解を異にせる所以なり、是れより疑問を掲げて神と世界との關係を開示せんとするに、先づライプニッツ氏は神を外界に立てたるも其外界に存する神は如何にして此世界と關係を有するやと云ふに、氏は之に答へて、神は最上の智、無限の力を有し、以て此世界を創造せりと云ふ、然らば神は無限の智力を以て、何故に此有限の世界を造りしやと問へば、氏は神は無限の能力を以て無限の世界を造るとを得るも、其無限の世界中實際上最も善且つ美にして、最も道理に適當せるものを撰びて、此世界を造り出すに至れりと云ふ、是れライプニッツ氏の世界創造説なり、果して氏の所説の如く、此世界は最も完全にして道理に適當せるものなりとせば、茲に一個の疑團あり、何ぞや、曰く、神は最も道理に適せる世界を造りなから、何故に世界中に災害、禍亂、罪惡等を滿たせるや、此疑問を通俗の宗教にて説明するときは、神は善を賞し惡を罰するの最上權を有するものなれば、其賞罰の爲めに此の如き禍害を

設けり、元來神は人類に賦與するに自由意志を以てし、自在に善を取り惡を捨つることを得せしめたり、故に人類は其天賦の良心に基きて善を取り惡を捨つるは其本分なれども、其本分を忘れ神意に背きて罪惡の所業を營むによりて、神は是を懲罰するに禍害等を以てすと云ふべし、此自由意志論は耶蘇敎にては最も大切なる點なり、何となれば意志にして自由に善惡を撰擇すること能はざるものとせば、我人は外界の境遇如何により、知らず識らずして、或は善を爲し、或は惡を爲すも、毫も我意志の關する所にあらざれば、神は是を罰するの理あるべからず、然るに神が之を罰するは、神は人類に自在に善をなし得べき意志を賦與せるに、其意志に反して惡をなしたるによりて之を責むるなり、故に耶蘇敎にては此自由意志論を主張せざるを得ず、

然れども上に述べたる通俗の自由意志論にては、未だ充分に説明せるものとすること能はず、又此説明は道理上より解釋せしものにあらず、且つライプニッツ氏の第一原理にも背反せり、其第一原理は必定の道理を云ふ、先きに述べたるが如し、凡そ事物の起るや必ず然るべき必然の道理によりて起るものなり、然るに通俗的の説

明は此必然の道理を説明せしものにあらず、ライプニッツ氏は此必然の道理を論究して、世界中の千差万別の事物の互に相契合調和するは、神の前定媒介あるによるとなす、果して然らば神は何の必要ありて、其調和中に罪惡の如きものを存し置きしや、必ず然るべき道理なかるべからず、今其説明を述ふるに先ちて、氏の自由意志論を述べざるを得ず、

氏の謂はゆる自由意志とは、單に意志は自由なりと云ふにあらずして、道理に基きて論じたるものなり、故に通俗の所説とは大に異なれり、通常世人の考にては意志は道理に基かずして、自由に判斷し勝手に取捨することを得るものなりとするも、氏は然らず、其の意によるに、神は其の自由の意志を以て世界を創造せしものなれども、充分道理の許す限りに於て此世界を創造せり、假令神の自由意志と雖ども、道理を離れて成立するものにあらず、故に吾人の自由意志も決して道理を離れて自由なるにあらず、例へは茲に甲乙の二事情ありとせんか、意志は二者の中道理の完全せる方向に向ひて傾動するものにして、通俗の考の如く勝手次第に方向を定むるものにあらず、若し甲乙二者の間に些少の差なく、互に相平均せるものありとせん

か、其時意志は何れの方向を取るものなりやと云ふに、此の如き場合は此世界中には決して存するものにあらず、若し存するとするも單に想像に止まりて、實際上得て求むべきものにあらずと云ふ、

故に自由意志とは外界の制裁を受くるとなく、唯道理にて判斷せし所の方向に其意志の發動を見るの謂なり、而して此意志は或は意識以内に起るとあり、或は意識以外に起るとあり、換言せば、自ら覺知して有意的に起るものと、覺知せずして無意的に起るものとあり、吾人が或る一事を斷行せんとするときには、千思万考して以て其事を決定するものなり、其千思万考の中にて諸事情の輕重を比較し、其の重き方に意志の作用は傾向するものにして、皆道理の結果より生ずるものなり、

吾人の一事を決定するときに起る所の意志は皆道理を離れて起るものゝ如く見ゆれども、其實有意無意に關せず、必ず道理に基きて起るものなり、然るに之を道理に依らずして起るものなりとするは、恰も羅針盤の針は自ら運轉するを以て、吾は自由の働きを有するものなりと思考して、磁氣の然らしむる所以を知らざるが如く、吾人が意志の作用を見て意志其者の自由なりとするは、其意志外に道理なるも

のありて然らしむるを知らざるなり、

之に對してスピノザ氏の說あり、其說はライプニッツ氏の所論には異なるも、大に類似せり、曰く、自由意志なるものは必然の理法に從ふの自由なり、如何なる意志と雖も、決して必然の理法を離れて作用を呈すると能はず、然るに世人或は自由意志なるものは必然の理法を離れて作用を呈するとを得るものなりとするは、恰も石を投ずるに石は其投ぜられたる方向に走り、石自らは吾に自由に活動するの能力ありと思惟するも、其實地球の重力と運動の法則とに支配せらるゝを知らざるが如しと、是れ世人の自由意志なるものは、必然の規律に檢束せられざるものなりと誤認せるを論駁したるものなり、此の如く兩氏の所說は相類似せりと雖も、同一のものにはあらず、其の異點を示さばスピノザ氏は總万有の間に存する必然の理法によりて作用を呈するものなりと云ふも、ライプニッツ氏は個々の元子互に獨立して他元子の關係を有するものにあらざれば、其作用を呈するは、其元子中に存する道理によるものなりと云ふ、以て兩氏の說の同一にあらざる所以を知るべし、

又ライプニッツ氏は世界の變化する所以を論じて曰く、此世界の變化して止まざる

所以のものは、各元子の自躰に有する自動自發の勢力によりて、自由に發達するより起るものにして、此元子の自由とは更に他の事情の爲に檢束せらるゝことなく、各元子内部に有する獨立の規則に從ひて變するの謂なり、而して各元子は單に他の事情の檢束を蒙らざるのみならず、之が創造者たる神の意志に於ても其規則を左右すること能はざるものなり、何となれば神は各元子を創造する中に既に必定の道理によりて其規則を前定せるものなればなりと、是れ氏の說を天神前定說と名くる所以にして、此點は彼のデカート氏の宇宙創造說と異なる所なり、デカート氏は神は時々刻々世界の事物を制裁し左右するものなりと說きしも、ライブニッツ氏は神は最上無限の知識を有するものなれば、此世界を創造するとき既に將來万々世の後をも洞察し、其間の變化を創造の時に豫定したるものなりと論ぜり、畢竟ライブニッツ氏の前定說を唱ふる所以のものは、神の解釋上より來りたるものなり、其故何ぞや、氏は神を解釋して最上の智、無限の力を有するものとすればなり、此最上の智、無限の力を以て此世界を創造せるものなれば、中途にして其規則を變更するが如きことはあるべからず、若し神にして中途に變更するが如きことありとせ

んか、神は始め世界を造るときに、万々世の後迄を洞察したるものにあらずして、極めて不充分の作用を爲したるものと云はざるべからず、果して然らば、決して全智全能の神と稱するを得ず、然るに神は全智全能にして、最上の智、無限の力を以て遠く將來を徹視し、其變化を前定し、以て此世界を創造せしものなれば、決して中途に其規則を變化左右するの理あるべからず、又實際此の如きことなきなりと云ふ、此前定說は耶蘇敎中にては最も解釋に困む所なり。

若し果して氏の前定說にして眞なりとせんか、此世界中に邪惡、暴戾、詐欺、殺害、盜賊等の不正不良の存するも、皆神の前定なりとせざるべからず、神は自ら此の如きものを創造の時に前定して、是に刑罰を加ふるとは何事ぞや、且つ其刑罰も創造の時に前定せるものならざるべからず、エーデンの花園に於ける談、ノアの洪水、基督の降生、及び猶太人が讒言を以て基督を十字架上に戮殺せしめたるが如きは皆神の前定に師せざるを得ず、全智全能の神にして何故に此の如き理に合せざる所業を前定せしや、或は神は戲に此世界を造りて此の如き所業を現せしものなるか、何れの點より考察するも、實に怪中の怪事にして、我人の疑團を氷解すること能はず、耶蘇

教者は此疑難を免れんとて自由意志を唱へ、神の始めて人類を造りし中に自由意志を賦與して、善惡孰れを爲すかを試みたりしが、其後人類は皆惡に流れしを見て神は或は勞働を以て罰し、或は洪水を以て罰せしなりと論ずるも、其說前定說と矛盾するものなり。且つ神に全智全能ありと云へる解釋に合せざるものなり、又通俗の宗教家は神の秘密不思議を妄信し、神意のある所測り知るべからずとなすも、是れ道理上の論にあらず、故に前定說より推すときは如何なる解釋を用ふるも神は此世界を造るに戲を以てせりとの批評を免るゝと能はざるべし、

是れより前の疑問に立ち歸り、此世界は神の最上の智、無限の力を以て創造せる完全無缺の世界なるに、其中に惡或は不幸の如きものゝ存するは如何なる所以なるかを說明せんとするに、ライプニッツ氏曰く、自由意志とは單に意志の專斷の謂にあらずして、道理に基きて自由なるの意なれば、神は元來自由意志を有するものなるも、決して道理を離れて成立するものにあらず、而して此道理に基きて創造せる世界中に、何故に不幸邪惡の如きものあるかと云ふに、若し世界にして不幸邪惡の如きものは絕えてなく、純善純良なる黃金世界なりとせんか、其世界は果して不幸なるか、蓋し吾人は健康を以て幸福なりとして是を欲望するも若し健康に反對する疾病の如き不幸なきときは、健康は幸福ならざるべし、凡そ世間の事苦ありて後に甘あり、醜ありて後に美あるにあらずや、若し此世界は果して無苦無惡の絕對善良の世界なるときは、我人は幸福と稱すべき觀念を生ぜざるべし、且つ又苦と云ひ樂と云ふも、人智の程度生活の高下によりて異なるものにして、決して一定の標準あるにあらず、貧者の以て快愉なりとするものは富者の苦痛とするとあり、智者の雅致あり興味ありと嘆稱するものは愚者は更に其味を感ぜざるとあり、若し右等の論を推て之を考ふるに、世の進步に不幸苦痛の必要なるとあり、人々の汲々として善道に向ひて進むは、苦痛其者の刺戟によらざるはなし、人皆苦難を厭ふを以て善道を求むるなり、之を要するに、此世界に苦惡の存する所以は善をして發達せしめん爲の要具なりと知るべし、蓋しアダムのエーデンの花園に於て惡を爲したるも此世界を進步せしむるの原因となりたるものなりと、畢竟ライプニッツ氏の主義は此不幸不善の世界にありて、飽くまで之を幸福圓滿の世界に進達せしめんとする進取樂天主義を有せり、之に反してスピノザ氏は、外界の欲念脫離をして精神の自

由を求め、自然に厭世退守主義に傾く風あり、蓋しライプニッツ氏は其性質爽快なる人にして、此世界は快樂の世界なりと思ひ、厭世主義を主張するものを評して曰く、隱退脫俗を好むものは政治上より見るも社會上より見るも、決して賢人なりとすると能はず、又宗教上より見るも、決して尊重すべき人にあらず、此の如き人は此世界の不幸なる點のみを見て、未だ此世界の快樂を見る識力を有せざるものなりと云ひて、スピノザ氏に對せり、

ライプニッツ氏は此世界に罪惡の存するは此世界をして善に進ましむるの要具なりとするも、尙ほ一の疑問あり、何ぞや、曰く、吾人日常經驗する所によれば、惡人却て善果を得、不正の人却て幸福を得、善人は却て罪禍にかゝるが如きとあるは何故なるや、神は全智全能なれば決して此の如きことを爲すの理なしと、氏は之に答へて曰く、現前の短き時間中に考ふるときは、善人は禍害は遇ひ惡人は幸福を僥倖するが如きとはなきにあらざるも、哲學或は宗教等によりて永遠無窮の時間の上に是を推究せば此疑問忽ち氷解するとを得べしと、然れども現在の狀況を以て未來を推測する時は、或は未來と雖も現在の如く善に禍し惡に福するが如きとは決して是

なしと斷定すると能はざるべし、何となれば未來は神の裁判によりて善惡公平の賞罰あるべしと云ふも神は未來のみを支配するにあらず、現世と雖も同樣に神の監督する世界なり、然るに現在に於て神の賞罰の不公平なるを見るときは未來も或は現在と同じく不公平の賞罰を與ふるとあるべしとの疑なき能はず、氏は是に答へて曰く、現世界に於て善に災し惡に幸するとなきにあらざるも、惡人の幸を得るものと善人の幸を得るものとを比較するときは、惡を爲して幸を得るものゝ數極めて少かるべし、故に人は善を爲すときは之に應ずる善果あるとを豫期して其心に安んずるとを得べし、且つ夫れ世界は何ぞ此一小世界に限らんや世界は無數なり、其無數の世界中には人類の如きものありて、す善必ず其賞を得ん、尺惡必ず其罰を得るとあるを想像するとを得べし、此想像は又我人の心を安んぜしむるものなり、故に善人は賞せられ惡人は罰せらるゝは、實に世界普通の道理にして、吾人は善をなすと同時に其心に不期の安逸を得、惡をなすと同時に其心に他人の知らざる不安を感ずるは亦賞罰の一部分と謂ふべし、

以上の言は誠に道理あることにして、余も常に此事について感じ居ることあり、此

世界には賞善罰惡の規律は行はれずとするも、吾人にして一善の行爲を爲すときは永く其心中に其の善たることを記臆して、如何に災害に遭遇するも其心に滿足する所あることを得るなり、此滿足は即ち無形上の幸福なり、若し之に反して惡を爲すものは、縱令僥倖にして幸福を得るにもせよ、其惡を爲したるの記臆は長く精神中に印象し、事に觸れ物に感する毎に其記臆動き來りて恐怖の念を脫することを能はざるべし、是れ即ち無形上の刑罰なり、然るに世人多くは有形上のみにて天道は善に福し、惡に禍するとの原則を判定するによりて、往々天道の不公平なることを嘆し天道は非か是かなどゝ疑ふものあれども、若し之れを無形上に徵するときは、一善一惡は必ず無形上の賞罰を有するものなり、古語に有陰德者必有陽報と云へることあるも是れ亦有形一方の語にして、完全せるものにめらず、故に余は其裏面より有陽德者必有陰報と云はんとす、昔は大史公伯夷叔齊周の粟を食ふを耻ぢ、竟に首陽に餓死せるを嘆して、天道無親常與善人、若伯夷叔齊可謂善人者非耶、余甚惑焉、儻所謂天道是耶非耶と云へるも、是れ夷齊の表面のみを觀察せるに過ぎず、若し夷齊の精神界裏に入りて觀察することは或は周に仕へて對侯の爵位を得たるより

も一層多量の幸福を感得せしならん、故に其幸福を觀察するにも單に有形上のみに止まらずして、無形上よりも觀察することは、一善一惡の應報は影の形に隨ふが如く必ず感得するものなり、古語に曰く、天網恢々疎不漏と、宜なる哉言や、

ライプニッツ氏の此世界に惡の存する所以を論じたるもの、要するに通俗上の所談にして、未だ哲學上よく論究せしものと謂ふべからず、故に尙ほ一問題を解するに苦むものあり、曰く、世界に罪惡の存するは如何なる原因によるか、假令上帝の創造なりとするも、上帝は何の目的ありて創造せるかと、此問題は耶蘇敎上にては實に解するには困難なる問題なり、此問題を解するには東洋及び古代の學者の所說の如く、吾人の精神は純善純眞にして一點の汚穢なきも、外界の事物か惡の原因なれば之に接して惡となるものなり、故に外界の物欲を脫却することは人心中の不眞成分は悉く消滅し去り、精神は淸々凉々の地に本然の美性を完うすることを得と論し世界に存する罪惡の原因を客觀上に歸するなり、此の如く解說するときは此問題は容易に解釋することを得るも、耶蘇敎の如く物心万有は悉く神の創造に歸することは實に說明の困難を感ずるなり、

氏は前に述べたる問題を解釋して曰く、此世界万有は最初神の力によりて創造せられしものなりと雖も、實際上の制限ありて全く神の意志を以て自在に左右すること能はず、故に如何に此世界中に悪の存するありと雖も、神力を以て自由に滅却すること能はず、今其悪なる者を分類するときは三種あり、第一、形而上の悪、第二、形躰上の悪、第三、道德上の悪、是なり、第一、形而上の悪とは神の創造せる万有に存する悪にして、其創造せる者は皆完全を得ずして不完全なる者なり、此不完全を指して形而上の悪と云ふ、此悪は己むことを得ざる悪にして、神の無限の意力を以てするも決じて免かるゝと能はず、凡そ事物は其心中に想像する時と實際に適用するときとは大に異なる者にして、想像上如何に完全なる者も、之を實際上に適用するときは不完全たるを免かれざる者なり、此世界の完全なる者は絶對的の完全に非ずして比較上の完全なるのみ、而して世界を創造するに當りては、無限の思想、無限の意力を以て創造せるものなれば、其神の想像上より云ふときは實に絶對的に完全なるべきものなれども、實際上事物の制限即ち相對の事情の爲に絶對無比の完全に達すると能はず、是れ止むを得ざるの事情にして、如何に神が意力を勞するも決

して免かるゝと能はざるものなり、神は最上無限の思想を以て此世界を創造せるものなれば、實際上に最上無比の完全なるとを得べきに、其實然らずして比較的の完全に過ぎざる所以は、例へば吾人の想像上にては完全なる圓形を画くとを得るも是を實際上に施すときは些少の不完全を免かれざるが如く、又二個の尺度を造るにも或る程度までは二者正く一致せるものを造るとを得るも、極めて些少の差に至れば二者合同せざる所なきと能はざるが如し、此絶對的の完全に達すると能はざるものを名けて形而上の悪と云ふ、第二、形躰上の悪とは、肉躰構造の不完全なると及病患痛苦の類にして、第三、道德上の悪とは、不善不德等のものなり、此等の悪なるものは如何にして起るか、曰く、必然によりて生ず、必然に二種あり、甲を絶對的必然と云ひ、乙を相對的必然と云ふ、而して形而上の悪の如きは神意を以て左右すると能はざるものなれば、即ち絶對的の必然によりて起るものなり、形躰上の悪及道德上の悪の如きは神は此の世界を完全の域に進ましむるの必要より設けたるものにして、形而上の悪の如く止むを得ざるに出でたるものにあらず、人類は此の世界に罪悪なるものゝ存するによりて、孜々として悪を避け善に進まんとを勉む

るものにして、若し惡なるものなきときは、人類は安んじて其位に住し、更に進歩するとなかるべし、故に第二第三の惡は相對的の惡にして絶對的の惡にあらずと、然れども氏は何故に神の思想上と實際上とは一致せざるかに至りては、充分なる說明を降さゞりき、

氏は更に形而上の惡は、神意を以て自由に制裁するとの能はざる所以を說明せしが爲めに、神の意志にも主意と腐意の二種あるとを說ぜり、此分類は耶蘇敎一班の通義なりと雖も、皆通信上の說明に過ぎず、然るに氏は是を哲學上にて說明せり、其主意に曰く、神の此世界を創造するには、絶對的の完全なるものを造らんとするの意志なり、此意志は單に理想上の意志に過ぎずして、是を實際上に適用せんとすることは、實際上固有の規律に制せられ、理想上に存する主意の如くすると能はず、是に於て神は止むとを得ず、理想上に存する主意と實際上固有の規律とを折衷し、實際上の許す限り完全なるものを造らんとせり、此折衷により生じたるものは即ち此世界なり、是れ恰も空中より落つる物か直線を畫くと能はずして、四方形中の對角線の如きものを畫くに至ると同樣なり、此主意を枉げて實際上に適合せしめたるものは即ち腐意なり、換言せば絶對的の意志を以て世界を創造せんとを企てたるも、實際上の規律に制せらるゝが故に、實際上の規則と、絶對的の意志とを折衷し、成るべき丈完全なるものを造らんとの相對的の意志を以て、世界を創造せるものなれば、形而上の惡は神と雖も如何とも爲すこと能はずと、此說は氏以前の學者の或は理論一方に偏するものと、實際一方に倚するものとを折衷せるものなり、此說によるときは、神が此世界を造出するに、絶對的に完全ならしむることは實際上の事情の爲めに妨げられしを以て、止むを得ず相對的の完全の世界を造出するに至りと云ふなり、

次に氏が世界發達について、其目的は幸福を得るにありと云ふ、幸福とは吾人の歡樂或は精神上の力にして、其力とは善と眞とに向ひて之を求めんとして進む力を云ふ、歡樂も此精神上の力の完全に備はるものにして、憂苦は此力の不完全なるものなり、而して此力を有するものは自由なり、自由なるときは完全なる歡樂を得るものなり、此精神上の力なるものは、道理を基礎とするものにして、此道理に基ける力によりて、万有の本源たる無限の眞理に達するとを得るものなり、故に人若し此

道理力を進歩せしむるときは幸福を得べく、且つ意志と智力とを進歩せしむると
を得るものなり、歡樂なるものも此道理と智力とに基けるものにして、吾人の精神
に附隨し、未來永久決して離るべきものにあらずと、故に此幸福說は他の學者の所
論とは大に異なれり、

是より進みて、ライプニッツ氏の自由意志說とスピノザ氏の自由意志說との異同は
那邊にあるかを辨ぜんに、ライプニッツ氏は意志の自由とは、吾人の精神に獨立不羈
の作用を有し、決して他の障碍を蒙ることなきの謂なり、然るに世間普通の說にて
は、意志の自由とは、其の意志の欲するに隨ひ、或は道理を變じて不道理となし、或は
正を曲げて邪となすことを得るの謂にして、神も其意志の自由により道理以外に立
ちて宇宙万有の規律も中途にて變更することを得べし、何となれば此規律も道理も
皆神の創造によりて成れるものなればなりと、ライプニッツ氏は之に反して神は最
初此世界万有を創造するには、最も完全なる道理に基きて造りしものにして而も
其道理なるものは、單に意志の上のみにて撰定せしものにあらず、智識上にても最も
完全なるものなりと認定したる道理なり、然るに神は自由の意志により、宇宙の規

律を變ずることを得るものとせば、最初撰定せし道理は不完全なるに由ることせざる
を得ず、若し其道理にして不完全ならんか、神の智識能力は最上無限のものにあら
ざるなり、故に神は如何に意志の自由を有するものとするも、宇宙万有の規律は千
万世の後に至るも決して變替あることなしと說き來りて、道理上より自由意志を論
じて、遂に前定說に結合せり、之に對してスピノザ氏の自由意志說も、世俗の唱ふる
自由意志說を排斥して是が說明を降せり、曰く、自由意志とは、吾人の精神の更に外
界の干涉を蒙ることなく其獨立の作用を完くし、因果必然の理法に隨順するの意志
なりと、斯くして自由と因果の理法とを結合せり、故に自由意志は道理を離れて自
由なることを能はずと云ふ點に至りては、二氏、共に致を一にせり、

而して又兩氏の所說に差異の存する點を示さんに、スピノザ氏は物心二元は等し
く本躰の屬性にして併行對立し、同等同權なることを主張し、心には心自身の規律あ
りて獨立することを得、然るに若し外界の爲に束縛せらるゝことあらば、心は其獨立を
失して其自由を保つこと能はず、故に心の獨立を保たんには、外界の事物を離れ世塵
を脫せざるべからずと云へり、此說の結果は遂に遁世脫俗の風に傾き、社會を離れ

て孤獨の生活を爲さんとするに至れり、之に反してライプニッツ氏は元子論を主張し、此世界万有は皆元子の調和によりて成立するものにして、此元子の發達するときは、吾　の觀念界の如き觀念を有するに至る(此元子は前にも述べたるが如く觀念性の元子なり)而して物質の未だ觀念性を表現せざるは、其發達の程度の高等ならざるによる故に此物質も元子の發達するときは、吾人の有する觀念意識の如きもの其中に開發し、鏡の万象を寫して漏すとなきが如きものに至らんと論ずるが故に、元子の相互に調和して成立すると同一理に本ずき、吾人は社會を離れて孤獨の生活を爲すとを得ず、必ず社會と共に進歩せざるべからずと云ふに至れり此く二氏の差異を來せし所以は、スピノザ氏は内界の觀察を主とし、吾人は外界の束縛を脱し精神界を觀察するときは、神と同一なる性質を有するものなれば、其本躰を知るときは神に合同することを得、故に外界の萬有に關係するに及はずと云ひて、萬有神教を主張せるも、ライプニッツ氏は神を外界に立て、我人も亦外界にありて社會と共に進むを以て目的とせり、故に吾人は相互に愛し相助け、以て社會を進歩せしみざるべからずと云へり、是れ厭世主義にあらずして愛世主義なり、樂天主義なり、故に其論は愛を以て精神となし、此の愛に由りて幸福を得、幸福に由りて完全を得、以て神に近づくとを論ぜり、

今二氏の說の異なる所を見るに、恰も佛教にて聖道門と淨土門の別あるが如し、スピノザ氏の万有の本躰即ち神にして、吾人の精神も神の一部分なれば、吾人は神と和せんと欲せば、宜しく外界の羈絆を脱して、内界の精神を觀察すべしと論ずるは佛教の聖道門にて万境の本躰は眞如即佛にして、吾人の精神も其本躰眞如なれば吾人が眞如を證し佛になるには、外界の諸緣を遠離して内界の心性を顯彰せざるべからずと說くが如く、其勢自然に遁世脱俗の風を帶ぶるに至るべし、又ライプニッツ氏の外界に神を立て愛に重きを置くは、淨土門にて佛を外界に置き、而かも其佛たる悲智二門の中、慈悲即ち愛を主とするに異ならず、之に至りて氏の說に各一得一失あるとを知ると同時に、此二說を合して初て完全なる宗教となるとを知るべし、

又二氏の說に於て一致する所は、神を信念するときは、吾人は幸福を得て完全の地位に進むとを得と云ふ點にあり、二氏ともに論じて曰く、抑も神を信念するとは即

ち神を愛するとにして、愛は最も多く吾人に幸福を與ふるものなり、愛には自愛他愛私愛公愛等ありて、同一ならざれとも、吾人は已を愛し得る力を有するものを愛するが如き愛は、愛中最も愉快に最も幸福なる愛なり、之に反して己れ人を愛しても人己れを愛すると能はざるが如き愛は、愉快も無く幸福も無きなり、然るに神は完全圓滿なる故、吾人の之を愛するとは最も愉快にして、又最も幸福なるものなり神は完全圓滿にして吾人を愛すると、恰も太陽の万物を照すが如く、吾人は其愛の光線によりて幸福を得、完全に進むと得るなり、然り而して其神と人と相愛すると云ふことは耶蘇教に限るとにして、他の宗教に説く所の愛は、神を恐るゝ情即ち恐怖心より生ずる所の愛にして、當教の神人相愛などとは全く天壌の差あるものなりと論ぜり、(因みに云ふ二氏の神人相愛を以て耶蘇教に限るとせしは、蓋し淺見の誇を免れざるべし、何となれば彼の野蠻社會に行るゝ所の宗教の如きは、其神を信愛するは主として恐怖心に基くと雖も、彼の佛教の如きに至りては神人相愛の宗教にして、其間一毫の恐怖的分子あるとなし、故に佛教に所謂る慈悲は神人相愛の慈悲にして、耶蘇教の愛に勝るとあるも劣るとなかるべし、然るに佛教に愛を以て

生死の因として、苦迷の本となすものは、是私愛小愛を排斥するの意に出でたるものにして、神人相愛の如き高尚なる愛を以て生死の因となし、苦迷の本となすにあらず、此の如く高尚なる愛は却て佛果に進み、涅槃に到るべき好資糧なり、耶蘇教にても私愛偏愛の如き劣等の愛に至りては、恐らく排斥して取らざる所なるべし、蓋し耶蘇教は愛に善悪ある中、善の方を説き佛教は悪の方を説きしものにして歸する所同一なり、(恰も孔孟學にて利を排し、功利學にて利を尊ぶも歸する所同一にして、孔孟學の功利を排する裡面には大利を有し、功利學の大利を尊ぶ裡面には小利を排する如し)

以上論ずる如く、二氏の説は神を信念するときは、吾人は幸福を得て完全の地に進むとを得と云へる一段は、互に一致すれとも、其間些少の異點なきにあらず、何となればスピノザは神が人中に於て自身を愛すと云ひ、ライプニッは人が自身中に神を愛すと云へり、是スピノザは万有神教を説きて吾人の本躰即ち神なりと論ぜし故、本と吾人が神を愛すと云ふとは、即ち神が神自身を愛するとなり、既に神が神自身を愛するとなるときは、吾人は吾人の資格を以て神を愛するにあらず、正に吾

人の資格を離れ神の一部分となりて之を愛するなり、故に神が人中に於て自身を愛すと云へり、然るにライプニッツは之れに反して、外界に神を立て、吾人と神とは遠く離れたるものと論ずる故、吾人は神にあらず、神は吾人にあらず、而かも吾人は不完全にして神は完全なるを以て、吾人は吾人の資格を以て神を愛し、神の助けを得て完全に達せざるべからす、故に人が自身中に神を愛すと云へり、之を要するに、二氏の異なる點は、一は万有神教を立てゝ吾人の本躰即ち神なりと說きて、神と吾人とを離合し、一は外界に神を立てゝ吾人と神とを客觀上の差別關係を立つるにあり、此の點亦大に佛教の所說に同しと云ふべし、何となれは彼の聖道門にては、吾人と佛とは本と離合一躰にして、吾人の外に佛なく、佛の外に吾人なし、故に吾人は佛を外界に求めず、內界に向ひて直指人心見性成佛と、直ちに吾人の精神を指して佛とする故、吾人が其本性を變じて佛となるにあらず、其實佛が佛となるとなれば、是れ恰もスピノザが人中に於て神が自身を愛すと云ふに同じかるべし、又彼の淨土門にて外界に彌陀を置き、吾人は之に向ひて一心に愛を求め、完全の地に到らざるべからずとする故、佛が佛を愛し、眞如が眞如を證するにあらずして、吾人は吾人の

資格を以て佛に歸順して其慈悲を受くるなり、是恰もライプニッツの人が自身中に神を愛すと云ふに同じからすや、

以上二氏の理論的宗教學上に於ける同異の點を述べたれば、以下少しくライプニッツの實際的宗教、例へば宗教上の儀式裝飾等の事につきて論ずべし、同一耶蘇教にても彼の「クエカー」宗の如きは、神を外界に求めずして內界の心頭に現見するを目的とし、神は吾人の心面を照す光躰なりと說くを以て、靜坐觀心を務め、外界の儀式裝飾に關するとは一切措きて顧みず、故に一定の寺院も無く、一定の僧侶も無く、又洗禮餐禮を用ゐると無く音樂唱歌を用ゐることなし、然るにライプニッツは之に反して、宗教上の儀式裝飾等は其の奢侈に涉らざる以上は、吾人の信向を導くに最も必要なる媒介にして、決して廢すべきものにあらずと論ぜり、スピノザモ亦宗教上の儀式裝飾等は、其躰眞理を含むものにあらずと雖も、吾人の信向を導くに要用なる媒介故、方便として用ゐるべきものにあらずと云へり、

斯くの如く二氏共に儀式裝飾等は、宗教上廢すべからざるものなりと論したれとも、スピノザは理論と實際とを一致するとあたはずして、實際の方にありては儀式

裝飾の必要缺くべからざるを論ずると同時に、理論の方にありては大に之を排斥して、吾人の本躰即ち神なれば、吾人が神を愛し神を信ずるには、直ちに吾人の本躰即ち精神の本躰を觀すれは可なり、何ぞ外界に向ひて儀式裝飾を用ゐるに及ばんやと論じたり、然るにライプニッハ之に反して、理論と實際とを結合して、儀式裝飾は啻に實際上に必要なるのみならず、理論上に於ても亦必要廢すべからざるものなり、何となれば、前に述るが如く、儀式裝飾は吾人の信向を導き、吾人を眞理に案内するものにあらずや、若し儀式裝飾にして一分の眞理をも含まざる中は、如何ぞ吾人は之に由りて信向を起し眞理に合するとを得んや、既に吾人は儀式裝飾に由りて眞理に合する以上は、儀式裝飾中に眞理を含むと云はさるを得ず、故に儀式裝飾は理論の方にありても、決して排斥すべきものにあらずと論じたり、之を要するにスピノザは智識を以て理論の方に屬し、信向を以て實際の方に屬して、智識と信向との二者、即ち哲學と神學との二者を結合すると能はざりき、然るにライプニッは智識は信向によりて成るものなることを論じて、智識と信向との一致、即ち哲學と神學との結合をなしたり、

右の如くライプニッの理論と實際とを結合して、智識は信向によりて生ずる者なりと論せしは實に卓見と云ふべし、見よ世の一般の學者は信は無智に伴ひ、智は不信に伴ふと論すれどもライプニッは之を否定して、智は信によりて成り、信は智によりて生ずと論ぜり、而して彼の無智に伴ふ信の如きは、迷信妄想にして眞正の信にあらず、眞正の信は必ず智より生ずるものなり、何となれば神は全智全能の實躰なれは理に達し智に反するものを愛するの道理、なし既に然らは、吾人が神を信ずるにも、亦道理と智識とを以て信ぜざるべからず、道理と智識とに伴はざる迷信妄想は、是れ全智全能の實躰たる眞神を信ずるの信にはあらず、万一迷信妄想にして眞神を信ずるとあるも、是れ唯だ偶然の出來事にして定規とするに足らずと論じ更に一歩進みて、氏は論じて曰く、世の一般の學者の如く、信は無智に伴ひ、智は不信に伴ふものなるときは、何を以て「バイブル」を「コーラン」より勝ると云ひ、耶蘇教を回教より勝ると云ふや、「バイブル」の「コーラン」よりも貴く、耶蘇教の回教よりも勝る所以のものは、是道理によりて判決し、智識に伴ふ信向の「バイブル」に存して「コーラン」に無く、耶蘇教に存して、回教になきに由るにあらずや、是を以て眞正の信向に智識

道理の伴ふことを知るべしと、善哉、氏の言若し世人の云ふが如く、智を有するものは信無く、信を有するものは智なきときは、宗教は世の開進と伴ふと能はざるべし、若し然るときは開明人には宗教なしと云ひ、智識を有する人には信向なしと云はざるべからず、嗚呼何ぞ思はざるの甚しき、抑も信向なるものは智識の進むに隨ひて其形を變するものにして、愚者の信ずる神と學者の信ずる神と同じからず、又野蠻人の信向と文明人の信向とは同じからず、故に學者文明人の信向は、彼の愚者野蠻人の如く利己心若しくは恐怖心より生ずる妄信想にあらずして、道理に由り智識に伴ふ所の眞正の信向なるものなり、

上來述ぶるが如くライプニッツは智識と信向とを結合して、宗教は道理によりて組成せられたる者にして、變して道理に反する者にあらずとの斷定を下すに至れり、然れども宗教には往々道理以上のと換言すれば幽外の理なるものありて、常人の智識と道理とに反し、常人をして疑惑を抱かしむるとあり、氏は此點に論及して理外の理と云ふとと、道理に反すと云ふとの區別をなせり、曰く、理外の理とは道理以上と云ふ意味にして、道理に反すと云ふとにあらず、道理に反するとは妄信妄想

にして決して眞理を含まざれども、理外の理は之と異なりて眞正の道理と眞正の智識とに合するものなり、且つ人智は有限有碍なるを以て、彼の無限無碍の神理を知ると能はず、之を知るには必ず天啓に由らざるべからず、然れば理外の理なるものは一方には人智の有限有碍なるとを證し、一方には神智の無限無碍なるとを證するものにして、理として存せざるべからざるものなりと、

此くの如く理外の理なるものを立てゝ道理に反するものにあらざるとを論ずるものは、是れ耶蘇教の奇跡怪談を説明せんか爲めなるべし、氏曰く、耶蘇教の奇跡怪談の如きは道理に反するものにあらず、正に是れ理外の理なるものにして、前述の如く人智の有限なると神の自由意志あるとに由りて起るものなり、然れども氏は世の宗教家の如く、奇跡怪談を以て神が時々、刻々其變に應じて隨意に發示したるものとなさず、何となれば神が此世界を作るや、一定の目的に由りて万事を前定したるものなれば、途中其目的を變じて隨意に奇跡怪談を示す筈なし若し神が途中隨意に其目的を變ずるならば、神は全智全能の完躰と云ふべからざるに至らんと論ぜり、斯くの如く一切万事悉く神の前定なりと云ふときは吾人が神を信ずるも

信ぜざるも、又善をなすも惡をなすも、悉く神の前定と云はざるべからず、然るときは人が神を信ぜざるも、又惡をなすも皆神の前定せるものなれば、之を賞罰する理由なしと云はざるべからず、故に其說は神の賞罰論を破却するに至るべし是ライプニッツが前定說を以て、强ひて耶蘇敎に適用せんとせし過失なり、以上述ぶる所、之を要するにライプニッツは因果論と目的論とを結合して、之を神の前定に歸し、更に高等の目的論と淺近の目的論とを結合して、耶蘇敎の所謂奇跡怪談なるものを以て、普通の道理を超絕したる理外の理となし、天啓を待ちて初て知るべきものとせり

ウォルフ (Christian Wolff)

クリスチヤン、ウォルフの哲學は、ライプニッツの哲學に據りたるものなれどもライプニッツの如く高尙の論議をなさず、成るべく通俗的に解釋して、彼の實際の利益如何を顧みざる高尙なるライプニッツの哲學をして、幾分か其價直を減殺するに至らしめたるの感なきあたはずと雖ども、是れ當時の社會の然らしめし所にして深く氏に咎むべきとあらざるべし、何となれば當時の社會は實利實益を以て專一となし、万事社會に如何なる利益あるやを尋ぬる有樣なれば、學術も宗敎も德道も悉く其影響を禁りて實際の利益を主とせしかば、氏も亦た多少此の影響を受けて、成るべく其議論を通俗實際に適する樣に至らしめたり、然りと雖も氏は哲學上に於て、其功勞尠からず、何となれば氏は哲學の範圍を擴張して、種々の學問を此中に網羅し、且つ學問の區域分類を明にしたりしかば後彼の有名なるカントが之に基きて完全なる新哲學を起すに至りたればなり、然らばライプニッツの哲學はウォルフに由りて系統的に組織せられ、カントの哲學は又ウォルフに基きて批判的に組織を起すに至れりと云ふも過言にあらざるべし、之を喩ふるにウォルフの哲學はライプニッツの哲學驛よりカントの哲學驛に至る中間の立場の如きものなれば、ライプニッツの哲學よりカントの哲學に移るには、是非とも此處にて一休せざるべからざるなり、氏の宗敎哲學を講ずるに先ちて其哲學の概略を講じ置くべし、氏は初め獨逸のハレー大學の敎授たりしが、其神學を講ずるや世の神學を講するものと稍々其見解を異にする所ありしかば、大に宗敎家の攻擊を受け、爲めに四十八時以內に普漏西を退去するにあらざれば、死刑に處すべしとの嚴命を受け、僅に身を以て逃るゝに至れり、後フレドリッキ第二世の即位するに當りて、氏は普國に召還せられて、伯林大

學の教授となりたり、

氏の哲學は基礎をライブニッツの哲學に取り、之れにアリストートルの哲學を加へて、一個の新組織をなせるものなり、而して氏は種々の學問を哲學中に網羅せしを以て、哲學に與ふるに、凡て學問上にて研究し得へき事柄は皆哲學なりとの定義を以てせり、故に氏の定義による時は哲學と理學との辨別を立つると能はざりき、而して氏は哲學を人心の作用に由りて分類し、智力に屬するものと意力に屬するものとの二とせり、即ち智力に屬するものは理論的哲學にして、意力に屬するものは實際的哲學なり、蓋し是れアリストートルの分類に由れるものか而して此理論的哲學と實際的哲學との外に論理學を置き、以て此兩學に入るの關門とせり、理論的哲學は所謂形而上學にして、氏は之を分て第一、物躰哲學、第二、宇宙哲學、第三、心理哲學、第四、神理哲學の四とし、實際的哲學を分て、第一道德學、第二、經濟學、第三政治學の三となせり、是れ其目的に由りて區別せしものにして、道德は一個人を目的とし、經濟は一家を目的とし、政治は一國を目的とすればなり、

理論的哲學の中の實躰哲學とは、万有の原理原則を研究するものにして、物質其物

を研究する所の物理學化學とは同じからず、其所謂原理原則とはアリストートルに基くものなり、蓋しアリストートルは數多の原理原則を立てたれども、氏は其根本となるべきもの一を取れり、即ち論理學上に所謂第二の原則にして、背反の原理と稱するもの是なり、氏は此原理を以て原理中の原理原則中の原則として、以て他の原理原則を推演せり、背反原理とは同一物にして同時に有たり無たるを得ずとのことなり、例へは赤色なるものは同時に黑色なるとあたはす、又同一の水にして同時に冷たり暖たるとを得ずと云ふが如き是なり、

第二の宇宙哲學に於ては此世界は種々の變化を有する事物が結合して組成する所の一團躰なりと解釋し、而して其各部分は互に相關係して存するを以て、其中より一部分たりとも除去すると能はざると、恰も一大機關が數多の小機關より成れるを以て、一小機關たりとも除去すべからざるが如し、啻に除去すべからざるのみならず、一部分たりとも一小機關たりとも增加するとあたはずと論せり、而して宇宙の原初のことに就きては氏は明言せざれとも、其微意を探れは宇宙は時間上に於て無始とするものゝ如し、若し之を無始と說くときは、神との關係を論するに困難

を來すが如きも、氏は之を辨明して世界の無始は時間中の無始なり、神と獨立して時間外に存するものなれは、其無始は時間外の無始なれとも、世界の無始と神の無始とは太に其意を異にずるものなりと論せり、

第三心理哲學に於ては、氏は心を分ちて明瞭なる心と、不明瞭なる心との二とせり、而して明瞭なる心とは、思想推理意志の如き人間の特有せる心なり、不明瞭なる心とは自知自覺の作用にして、外物の刺戟接觸を受けて感する所の心なり。此心は人間のみならず、他の動物にも有するものなり、而して彼の靈魂不滅と云ふとは、是明瞭なる心の上に於て云ふとにして、不明瞭なる心の上に於て云ふべきものにあらず、故に靈魂不滅と云ふことは、人間の外他の動物にはなきとなりと曰へり、且つ心が常に身躰と一致結合して、諸般の動作をなす所以のものは、他なし神の則定、即ち神が前より心身を結合せしに由ると論して、ライプニッツの前定說を取りたり、

第四神理哲學は於ては、氏はライプニッツの如く、神は全智全能なるを以て無量の世界を創造すべき力あり、然れとも神が此世界を創造するに當り、其無量の世界を創造すべき力を以て、無量の世界中より最も善良にして、且つ最も其意に適したるものを選て、此に此の世界を創造せしものなれは、此世界は即ち神意の撰擧によりて成れるものにして、其目的たる神に無量の德と、無量の働きを有するとを顯し、之と同時に此世界をして、漸次發達せしめ、其結局神と同樣なる無量の德と、無量の働きを有せしめしにありと論せり、若し然るときは此世界に惡の存すへき理なきに、何故此世界に惡ありやとの疑問に答へて、氏は此世界に惡の存するは神意の然らしむる所にあらすして、人智の有限なるより生したるものなり、而して神が此惡を存する所以は他なし、神は此惡を以て善に進ましむる爲の方便にして、別に除くべき必要なきとを知れはなりと曰へり、之を要するに氏の哲學の長所は神理哲學にあらずして、却りて實躰哲學の上にありと云ふへし、

上來氏の哲學概論を述べたれは、以下は其宗教哲學を述ぶべし、氏の宗教哲學はライプニッツに基きて通俗的に解釋せしものなれは其大要はライプニッツに異なるとなし、ライプニッツは上にも數々論ぜし如く、諸事万端悉く神の前定に歸せしを以て、因果論を排して目的論を取り面かも其目的論は客觀的普通性の目的論にして宇宙万物は各自一定の目的を有し、其目的に向て進むものなれは、其目的たる主觀の

上にあらずして客觀の上にあり、單獨的の目的にあらずして、諸事万物の上に普遍する目的なり、然るにウォルフの時代には、客觀的普遍性の目的を唱ふると能はずして主觀的利己主義より目的を唱へたり、其意に謂らく、神は人間を利益し、人間の快樂需要を滿足さする爲に、此世界幷に万物を造りしものなれば、世界万物は此目的に向て進み、悉く主觀的利己心の中樞に集る者なりと、ウォルフも亦此影響を受けて主觀的目的論を唱ふるに至りたり、故にライプニッツの論とウォルフの論とは稍其趣きを異にして、一は純粹高尚なる理論を說き、一は實利實益主義を交ゆるに至りたり、而してウォルフは終に宗教上の理論を解釋して、宇宙万有は宇宙万有の法則に隨て變するとなく、神の目的即ち神か宇宙万有を創造したるときに定めたる法則に從ふて變するものなりと論せり、

氏は又宗教哲學を分ちて自然神學天啓神學の二となせり、而して自然神學は經典に由らずして、普通一般の論理經驗を以て神の存在を證明するものにして、其證明たる天啓神學の基礎となり、經典の證據となるものなり、而して、又經典は神學の研究に大に力を與ふるものなり、何となれは經典中には格言若くは金言とも言ふへ

きもの多く存するを以て、吾人は論理經驗を以て新に眞理を發見して、格言金言を組成するを要せず、唯た格言金言の眞理たるとを證明すれは可なり、若し經典なきときは、吾人神學を研究するものは、論理經驗を以て一々新しき眞理を發見せさるへからすと論せり、蓋し是れ中世時代の煩瑣學派の說に近似するものか、

氏は又神の存在並に其性質の如何を說明する爲めに、先天的證明と後天的證明との二樣の方法を用ゐたり、後天的證明は宇宙万有の道理の上、換言すれは宇宙哲學の上より證明するものにして、先天的證明は事物の實躰、換言すれは實躰哲學の上より證明するものなり、

第一後天的證明に依れは、吾人は今此に現に存在せり、既に存在すれは其存在するの原因なかるべからず、其原因より原因と次第に遡れは、其大原因たり第一原因たるものは必定完全の道理にして他に由らす他の力を借らさる獨立自存のものならざるべからす、既に必定完全の道理にして獨立自存するものなるときは、其原因たるや無始無終恒久不變のものにして、決して多物の集りたる集合躰にあらす又差別の相を有する差別性にもあらすして、單純性平等性のものならざるべからず

然るに其結果とも稱すへき此世界は、多物の複合より成りて、單純性平等性のものにあらされは、決して神と稱すべからず、隨て吾人の精神も、此世界の一部にして、此世界と共に變化するものなれは、是れ亦神と稱すべからず、如此世界も精神も、其躰神と稱すべからすと雖も、其の世界幷に精神の存在する所以の原因を探るときは、其原因たるや必す神の中に存せさるへからす、果して然るときは此世界の原因にして此世界は神に由りて創造されたると明なり、而して神は無量の世界をも創造すべき力を有すれとも、神は其中より最も善良にして、且つ最も其意に適したるものを撰て、此世界を創造するに至れり、然るときは神は是非とも智と自由意志とを具へざる可らず、神にして智と自由意志とを具ふる時は神は即ち心なりと云ふも不可なかるべし、然れとも神の心は吾人の如き不完全なるものにあらずして、最も完全最も自由の心なれは、其智も亦完全にして、世界中最も完全なる先天的直覺の智識より成れる者なり、吾人の有する感覺想像想念の如き下等の智識は、神の完全智識中には毫も存せさるなり、而して其意志は智識上に屬するものにして智識を離れて別に存するものにあらす、故に智識上にて完全なりと認識するときは

神は自ら快樂を感し、其意志は之に向て發するものなり、既に其智無限恒久なるときは、其意志も亦無限恒久ならさるべからす、斯くの如く意志を以て智識の上に屬せしは、是ライプニッツの說に基きしものなるへし、

第二先天的證明は氏は之を實躰哲學上より證明せり、曰く世界万物は悉く實躰を有するものなり、而して其最上の實躰は即ち神にして、完全圓滿恒久不變のものなり、其躰偶然に存するものにあらすして必然に存するものなり、且つ此實躰と世界万有とは同一にあらず、世界万有は現象にして複合性差別性のものなれとも、此實躰は單純平等恒久不變の本躰なれは、複合性差別性にあらさると同時に、終始變更なきものなり、故に其實躰は世界万有の本源本躰にして即ち神なりと云ひて有神を證明せるもの、是れ氏の先天的證明なり、

氏は神と世界との關係に就ては、全くライプニッツの說を祖述しき、前述の如くライプニッツは神は無量の世界を作るへき力を有すれとも、其中最も善良にして且つ最も其意に適したるものを撰て此世界を作りたりと云へり、ウォルフは之を受けて一層通俗的に之を解釋して曰く、神が此世界を創造したるは、其目的神の完全なる德

と名譽とを顯示せんが爲なり、而して此世界は神の完全なる名譽と德とを顯示するに最も適當したるを以て、神が特に選て此世界を創造せしものなり、然るときは此世界に惡や不良のあるべき筈なきに、而かも之あるは如何んと云ふに、蓋し惡や不良は神が此世界の中に有する目的を遂くる爲に、必須缺くべからざるものとして存し置けり、然れども惡や不良を神が目的として作りたるにあらずして、唯之を方便として存するに過きず、故に吾人は此世界に於て惡や不良を除却することを要せず、却りて此方便を利用して善道に進まさるへからず、換言すれば惡や不良の刺戟衝觸に由りて、吾人は益々神の世界に進達せざるべからずと云へり、

以上述る所之を要するに氏は神と世界との關係を論して、神は無量の世界を作るべき力を有すれども、其中此世界は神の性德を顯示するに最も適するを以て、特に撰て此世界を作りしものなれは、此世界に惡のあるべき筈なきに、之れあれは是れ人をして善に向はしむる爲の方便にして、本來の目的にあらすと論する者の如し、前述の如く、此世界は神が持に撰て作りし完全なる世界なれは、此世界に惡のあるへき筈なきに、之れあるは如何と云ふに就てライプニッツ幷ウォルフの說によるに、

神意と實際とを區別して、神意に惡はなけれとも、實際世界を作りし上にては、其世界をして神の如き最善の地に進ましむる爲の方便として惡を置けりと曰へり、若し斯の如く論するときは神は其意志に於ては自由なれとも、實際上にては外物の制限を受けて自由なること能はざるへし、然らは神の自由は主觀のみに限る自由にして客觀には通せざるへし、是れ恰も吾人か其意志に於ては、空中に樓閣を築き、或は水底に栖息する等種々の想像を畫くを得れとも、實際に於ては外物の制限を受けて實行すること能はざると一般なり、此理を以て推すときは、神は万有の規則中にありて而かも其支配を受けざるべからざるものにして、万有の規則外に存在するものにあらざるべし、何となれは若し神にして、万有の規則外に存するものなりとせは、如何ぞ客觀上に制限を受けて其自由を束縛せらるゝの理あらんや、知るへし耶蘇教の神は吾人万物と共に宇宙万有の規則中に拘束せられてあることを、又此世界に惡あるは人をして善に向は令る爲なりと論すとれも、然れとも吾人は惡ある爲に必すしも善に向はず、惡あるが爲めに往々惡に向ふことあり、見よ彼のアダムエバの如き、毘竟蛇魔の爲めに陷りしにあらすや、若し神が最初より此世界

に善のみを作り置きしならば、此世界は常に天國にして、アダムエバも罪を犯して惡に陷るとなかるべし、又神が此世界を作るは其目的とする所神の名譽と德とを顯さん爲めなりと論すれとも、若し神にして眞實に完全ならは、別に此世界を作らすとも、完全は完全なるべきに、而かも之を顯はして世に知らしめんとするものゝ如く論するは、是れ吾人の人情を以て神意を想像せしものなり、何となれは吾人は己の完全を顯さんとするときは、必す社會に事業を起して世の名譽を買はんとするか如く神も亦其完全なる德を顯さん爲めに此世界を作りしものなるへしと想像せしに過ぎず、若し又神が其德を顯さん爲めに、此世界を作れりとするも、神は吾人の父にして、吾人は神の子なれは、神は其子の名譽を買はんと欲して世界創造に從事せりと云はさるへからず、愚も此に至りて甚しきにあらすや、

上にも述る如く、神學者は一般に惡を以て實在とする故、之が解釋に苦めとも、佛教の如きは惡を以て實在とせざる故、之を說明するに困難を覺ゆることなし、佛教は惡を以て唯吾人の見識の程度如何に由りて起る迷執とする故、吾人が之を見て惡ありと思へは惡あるも、決して客觀上に其實在を有するものにあらす、故に或る高

等の程度に進みたる見識を有する人には、一切惡の存在を認るとなかるへし、例へは下等動物の不潔とする所のものも、高等動物は之を不潔とせさるとあり、又同一人間中にても、凡庸の人が見て感を起さゝる一葉一枝一羽一蟲も、動物植物に熱心なる學者は、之を見て大なる興味を感するか如し、故に不潔と云ふとを惡と云ふとも、惡く吾人の主觀の上に其區別を見るのみ、若し吾人にして一朝活眼を開き、其見識を高むるときは、我身即ち佛となり、世界は變して眞如界となりて、亦一點の惡の存するを見さるへし、

神の創造及奇跡怪談の解釋に至ても、ウオルフ氏は亦ライプニッツの說を通俗的に譯述するに過きす、而かも神の不思議を說くが如きは、世の獨斷的宗教家と其意見を同一にして、神が此世を創造するや無より有を生したるは神力の不思議なるを知るへきなり、然れは万有の規律秩序も、此不思議力より成り、人間の生活精神も亦神が世界を創造する中に、之を有權成分中に含ませ置きたるものが後に至りて開發したるものなれは、是亦神の不思議力より成りたるものと云はざるべからす、斯の如く氏は神の不思議力を說て、以て奇跡怪談の存する所以を說明せり、然れと

も世界万有は古往今來不生不滅不增不減にして、一分子一元素たりとも生滅增減するとなければ到底神の不思議力と併行一致すると能はざるものなり、

氏は又天啓を論じて曰く、天啓とは普通の智識道理を以て知るべからざるものを、神の秘密不思議力に由りて知るの謂なり、夫れ神は自由力あるが故、如何なる天啓を爲さんと欲するも、外物の之を妨ぐる無く又万有の規則に拘制せらるゝとなし、然れとも神は道理を愛し、智識によりて働作するものなれは、其天啓とても決して万有の規則道理に反するものにあらず、然り而して万有の規則は、必すしも必然性のものにあらす又神力を以て變更すると能はざるものにあらす、故に万有の規則道理の外に、理外の理なるものあるなり、此理外の理は、所謂神の祕密力にて知る所の天啓にして、道理以上に屬するものなるも、決して道理に反するものにあらす、然れは理には理内の理と理外の理とありて、理外の理は道理以上必す存せさるべからざるものなりと說きて、奇跡怪談の荒唐にあらさるとを證明せり、

上來述る如く、ライプニッツもウォルフも、凡々普通の道理の外に理外の理なるものを立てゝ之に天啓を結合し以て道理と天啓との一致を唱へたり、既に斯の如く道理と天啓とを一致するものあれは、爰に之に反對する道理と天啓との背反說を唱ふる者の出るは、蓋し數の免れさる所なり、而して之を唱へしものは、ベール及びライマルュスの兩氏なり、今之を圖解すれは左の如し、

ライプニッツ
ウォルフ　道理天啓一致說

ベール
ライマルュス　道理天啓背反說

ベール幷ライマルュス共に道理と天啓との背反を說けとも、ベールは道理は天啓に屬したるものと曰ひて天啓を主とし、ライマルュスは天啓は道理に屬したるものと曰ひて道理を主とせり、而してライマルュスは宗教上に道理を主張して、宗教は必す道理に由りて組成したるものならざるべからす、果して然るときは耶蘇教にて天啓に由りて奇跡怪談ありとするも、是れ道理上決してあるべきものにあらずと論し、其局ウォルフが万有自然の規律の外に、天啓即理外の理ありとしたるを排斥して、如何なる道理も秘密も万有自然の規律の外に存すべき筈なければ、天啓も理外の理も悉く之を万有自然の規律に照して、其眞僞を判斷せざるべからざると同時に、彼の經典の如きも、万有自然の規律を以て解釋せさるへからすと論するに至れり、

此說一たび出てゝより獨逸の神學者は舊來の說を捨てゝ、道理上神學を研究するに至れり、是神學上の一大變動と云ふべし、

抑も宗教は、古代にありては神の秘密不思議に由りて成るものとし、吾人の智識經驗を以て知るべからざるものとすれば、吾人復た何をか言はん、然れとも宗教は悉く之を神の秘密不思議に歸して止むべからざるより、世には自然神教なるもの出てゝ宗教は神の啓示秘密に由りて生するものにあらず、人間智識の發達するに隨て生するものにして、所謂自然の發達なれは、之を研究するにも亦自然の規律に由りて其可否を定めざるべからずと論するに至れり、斯くの如く古代は宗教を以て神の秘密啓示に成るものにして怪むものなかりしが、中世時代に至りて彼の神祕教なるもの出てゝ宗教を解釋するに、幾分か道理を用ゐ、神の祕密は吾人の一種特別なる觀念に由りて知らるべきものにして外界普通の道理規則を以て知らるべきものにあらずと論せしかはスピノザは之に滿足せず、徹頭徹尾道理を以て宗教を解釋し、神を以て吾人精神の本躰なりと論して、內界に神を立てしかはライプニッツは之に反對して道理上神を外界に立て、奇跡怪談は勿論万事万物悉く神の前定

に歸したり、ウォルフは之を受けて世の獨斷的宗教家の如く神の不思議力に由りて天啓ありと論して、天啓を以て理外の理となせしかはライマルュスは之に反して、天啓も奇跡も共に万有自然の規律中に存するものにして天下何の處にか理外の理なるものあらんやと論するに至りたり、

夫れ然り然りと雖も宗教はライマルュスの如く一概に道理のみを以て說くべからず、何となれは道理は相對中にて知るとなれは、相對を超絕したる絕對を知ると能はざるなり、縱ひ之を知ることを得とするも、是唯絕對あるとを知るのみにして絕對の何たるかに至りては決して知るべからざるなり、然れは絕對の何たるを知らんには、是非とも天啓に由らざるべからず、天啓無くんば如何ぞ絕對の狀況を知ることを得ん、若し吾人にして絕對なしと云はゝ止まん、苟も絕對ありとせは之を知るには必す天啓に藉らさるべからざるや明なり、之を例へば吾人と他の下等動物とを比較するときは、吾人は他の下等動物より多くの感能幷高等の知見を有するを知るべし、此理を以て推すときは宇宙の廣き世界の多き、何處にか六感以上を有するものなしと云ふを得んや、然れとも其六感以上の感覺の何たるは、吾人の如き五感

を有するものゝ知るべからざる所なれとも、若し六感以上を有するものより其感覺の何たるを我人の啓示せば、吾人は多少之を知るとを得へき理なり、之に由て之を觀るに、吾人は絶對の何たるを知らされとも、其啓示に由りて始て之を知るとを得るなり若し吾人が絶對の何たるを啓示に由らずして、直接に我智力によりて知るとを得るときは、其絶對は絶對にあらずして相對なり、然れは絶對は吾人の智識經驗に超越したる不可知的の存在にして、天啓に由るにあらざれば到底知ると能はさるのなり、故に宗教はライプニッツ及びウォルフの論する如く、天啓と道理とを一致結合せしめさるべからさるなり、何となれは道理なきの天啓は妄誕たるを免れす、天啓なきの道理は淺近たるを免れざればなり、是を以て佛教の如き哲學的の宗教にても、其裡面には天啓なるものありて、吾人過去未來地獄極樂の有樣如何を知ると能はざれとも、釋迦の啓示に由りて之を知るにあらすや、是れ所謂釋迦の天啓なり、之を要するに宗教は天啓を離るべからざると、同時に又道理をも離るへからさるものなり、

以上カント以前に於ける獨國宗教哲學の概畧を論したれは、以下カント以前に於

ける英國宗教哲學の概畧を論すべし、抑も英國に於てはベーコン氏を初めとし、以下ホッブス、ロック、ヒューム等の諸氏、悉く經驗論を主張して、歸納的の研究を重じたりしかは、神學上の解釋にも亦經驗的歸納的の研究法を用ゐるに至りたり、故に英國宗教哲學の起りは、獨國宗教哲學の起りとは異なるなり、是れ恰も英國哲國と獨國哲學との異なる如く、一は思想を本とし、一は經驗を本とせり、然り而して獨國にてはウォルフ及びライマルュスの時代には、其說く所稍通俗に走りしが、英國にても此時代には亦高尙の趣を有せす、徒らに其研究を人知以內に止めたる傾きありき

ヘルベルト (Herbert)

ヘルベルトは英國有神者の始祖なり、氏は本と政治家にして、其の四方を遊歷するの際、多くの宗教家と交際して、其談論を聽き大に感する所ありしが、後眞理とは如何なるものかと云ふ疑問を起し、終に眞理の本源は本然性共同的念想なるとを發見せり、而して此念想は經驗より生するものにあらすして、經驗に先ちて存するものなる故、此念想は一切經驗の根本となり、而かも衆人一般に共同一致する所のものなり、嗚呼此念想や眞理の本源となり、道德宗教の基礎となるものなりと論せり、

而して氏は宗教は人間に必須缺くべからさるものにして、苟も人間たる以上は必す具有する所のものにして、人の人たる所以、動物に異なる所以は全く此にあり、斯の如き宗教は何人にも具有する所のものなれば、世に眞の無宗教なるもののあるとなし、表面には無宗教家の如く見ゆる人と雖、是唯た世間普通の宗教を信向せざるにあらすして、其裡面には必す一種の宗教を有するものなり、故に若し人にして眞に宗教を排斥するものあらは、是宗教を排斥するものにあらすして、本然性共同的の念想、即ち眞理の根本を排斥するものなり、斯の如きとは決して爲し得べからざるとなりと論せり、氏は又宗教の目的を論して曰く、宗教は人をして善と合し、人と人との間を平和せしむるにありと、然れとも世の宗教上の傳說は悉く此目的に合するものにあらず、故に其傳說中にて共同的宗教原理を發見せんには、古來世に存する所の多くの宗教を比較研究して何れの宗教にも共同一致する所の眞理を抽象概括し、此を以て共同的宗教原理と定めざるべからず、斯くの如くするときは何れの宗教にも共同する所の五個の原理あるとを發見するなり、其五個の原理とは第一神あると、第二人は神を崇拜する義務を有すると、第三神を崇拜する要點は德

と信向とより成ると、第四若し罪過を犯したるときは懺悔して善に歸るを以て、善の一部分とすると、第五此世界并に未來に於て賞罰あると是なり、意ふに是ぞ即ち何れの宗教にも存する所の共同的念想にして、宗教の骨髓となり、宗教の基礎となりて、缺くべからさる原理なりとせり、然れとも此五個の念想は何故眞理なりやの疑問に就ては、氏は之を說明せさりき、

氏は又宗教の起原を論して曰く、宗教は二個の天啓より成れるものなり、即ち一は內部の天啓にして、一は外部の天啓なり、內部の天啓とは神か吾人の心中に宗教心を賦與したるの謂にして、即ち神が吾人の心中に吾人が未來永遠の生活を求め幸福を忻ふ所の心を賦與したるなり、而して其心中に吾人が神の存在するとを暗に吹込みたる故吾人が未來永遠の生活を求め幸福を忻ふ心の中に、自然に神の存在するとを信するの心を生する也、外部の天啓とは世界創造の作用是なり、世界を見るに事々物々皆不思議にして、苟くも目を有するものは、之を見て直ちに神あるとを發見せるるなし、而して世界創造中不思議の最も著大なるものは天躰なり、天躰は神の永久無量の幸福の有權を寫し顯したるものにして、何人も其尊高なるを知

り其不思議なるを知るものなり、故に之を見るときは忽ち神を信するの心を生するなり、而して天躰中殊に太陽は神の盛德を顯したるものなる故、無智蒙昧の原人も尙ほ且つ之を崇拜したりき、夫れ然り斯の如く人々の天躰を崇拜するは、之を唯だ目前に現する所の一種不可思議の物躰なりとして崇拜するのみならず、其物躰は以て神の德を摸擬し神の德を表顯したるものとして崇拜するなり、換言すれは天躰を崇拜するは、其有形中に神の性德を寄寓する者なりとして崇拜するなり故に上古の宗敎と雖も、決して迷言妄想にあらすして、却りて純粹潔白なるものなゞ、其天躰を崇拜するにも共同的宗敎原理に基きて道德を目的とせしが、其後漸次に其風を失ひ、終に共同的宗敎原理を外にするに至れり、蓋し是れ宗敎の主働者たる僧侶が利慾に耽けり自已を利せん爲めに、種々の儀式方法を設け以て衆人の信向を買はんとせし結果なり然れとも當時詩人若くは哲學者は此の惡しき僧侶の籠絡手段に陷らすして、共同的原理を有する所の統粹潔白なる宗敎を信し居たりき、斯の如き弊風の行れしは、啻に耶蘇敎外の宗敎のみならず、耶蘇敎其れ自身も亦中世時代には此弊風に陷りしと雖も、然れ共耶蘇敎は他の宗敎に率先して早くも其

宿弊を改めて本源に還り、共同的宗敎原理に由りて道德を主とするに至りたり、是耶蘇敎の他敎に優る所以なり、（是は是れ舊敎の弊を矯むるに新敎を以てしたるの謀なるべし）然り而して斯の如く他敎に率先して其宿弊を改めし耶蘇敎も、年月を經るに隨ひ、漸次に共同的宗敎原理を昏まし、今日となりては稍迷言妄想の傾向を生ずるに至れりと論せり、

上來述る處の五個の原理なるものは、氏の一家言たるに過ぎず、何となれは氏は五個の原理を以て如何なる宗敎にも具有する所の共同的念想とすれとも、然れとも氏は當時世に知られたる僅少の宗敎を比較して歸納せし所のものなれは、未た之を以て世界にありと有らゆる宗敎に共通する所の原理と爲すべからざれはなり、之を要するに氏の說は經驗上より歸納的研究せしものなれは、其議論淺薄にして宗敎哲學としての價直少しと雖も、唯一たび此說の出てしより、英國神學者社會に大なる影響を及ぼし、後來宗敎を論するの學者は概ね之を基礎となし摸範となすに至れり、

ホッブス氏

前に述べたるが如くヘルバルトは英國經驗學者の一人にして、其宗教を論するや專ら歸納に據り、經驗上諸般の事實を集て、宗教心は何人にも具有し、且つ宗教は何れの社會にも存して、人類に必須缺くべからざる道德を目的とするものなりと論して、宗教と道德とを一致混同せり、斯の如く氏は經驗に據り事實に徴して宗教を論すれとも、敢て唯物論を唱へて、神の存在を虛無に歸し去るものにあらず、却りて之を以て神の存在の證明して有神論を唱へたりき、之を以て氏の說は從來の獨斷的宗教家の如く、「ペイツル」を以て唯一無二の天啓の經典なりと信して、理非眞僞の區別無く、獨斷的に神の存在を論するものと同からざるや知るべし、然るに氏の如く經驗論を唱へながら、唯物主義に據りて有神論を主張して、氏の宗教論に反對せしものはホッブスなりとす、

氏は近世の唯物論唯覺論の祖先なれば、其宗教を論するに於ても亦唯物主義に據りて有神論を唱へたり、請ふ少く之を述べん、抑も氏はベーコンの流義を汲み、經驗主義を心理政治道德宗教等の上に適用して、吾人の智職思想は悉く感覺より生ずるものにして感覺中に合離の兩作用ありて、或は集合し、或は分離して種々の思想

を生ずるものなりと論せり、啻に智識思想のみ感覺より生ずるにあらず、道德も宗教も亦共に感覺より生ずるものにして、而して其感覺たるや苦樂の二種に外ならず、苦は以て吾人の生活を妨け、樂は以て吾人の生活を助くるものなれは、吾人は常に苦を避けて樂に就かんとを求むるものなりと論して、道德上に自利主義を唱へ道德は苦痛を避けて快樂を求め、成るべく吾人の生活を安全にするとを計るを目的とするものにして、彼の人を愛し人を救ふか如きとも、其實自利心より生ずるものにして、人を愛し人を救ふは、他日己れの是に愛せられ、救はれんとを計るより生するものにして、吾人の天性は極めて惡なるものなれば、人々相集りて社會をして國家を立るときは、必す君主の專制を以て法律政令を作り、以て之を支配せざるへからす、若し君主の制裁なきときは、吾人は互に己の自利を求めんが爲に或は爭ひ或は戰ひ或は竊盜し、或は殺害して禽獸社會と撰ぶ所なきに至る故、是非とも法律政令の賞罰に由りて之を制裁せざるへからす、法律政令の賞罰ありて、始めて人は安全に幸福を求るとを得るに至るなりと論して、道德と政治とを混同して、道德の標準は君主の命令に從ふと否とにあるものにして、道德上に所謂善惡なるものは

本來其區別あるものにあらずして、唯た當時の社會の好惡する所に由りて生するものなりと論せり、

右の如く政治上に於ては賞罰あるが爲に、人々之を恐れて惡を捨てゝ善に赴くが如く、宗教上に於ても亦賞罰あるが爲に、人々惡を捨てゝ善に赴くなり、而して其賞罰たるや神が死後に於て之を爲すもの故、吾人は之を知ると能はすと雖も、吾人は其神を恐れ其賞罰を怖るゝが爲め、隨て惡を捨てゝ善に赴くに至るなり、然るに政治上の賞罰は可見的の賞罰なれとも、宗教上の賞罰は不可見的の賞罰なれは、其は唯た人をして善に赴かしめん爲の便宜上の方便たるに過きずと論すれとも、世界の創造者たる神を否定して空無に歸せしにあらずして、神の存在は暗々裡に許諾せしものゝ如し、然れとも神は遠く吾人の智識の外にありて知るべからざるものなれは、之を道理上證明すると能はす、又彼の「ばいぶる」の如きは天啓の經典なりと雖とも、亦之を目前に證據立るると能はず、而して死後に神の賞罰あるか如きとも、亦道理上研究すると能はすして、唯た默して信するの外なしと謂ひて、是等に關する議論は一切拋棄して取らざりき、

氏は更に論して曰く、人に宗教心あるは先天的に存するにあらずして、唯た恐怖と無智と依賴心との三事情よりして生するものあり、即ち人は無智にして事物の道理を知らざる故、死後の事を恐れ或は神の冥罰を蒙らん事を怖れ、終に他に依賴して救助せられんとを求むるに至る、是に於てや人々に宗教心なるもの生して、何れの社會にも宗教を形作るに至るなり、而して宗教は彼の政治道德と同く、其目的勸善懲惡にありて、即ち人をして惡を去りて善に就か令るものなる故、人々の安全幸福を求る爲には必要缺くからざるものなり、若し宗教なきときは到底社會の安寧を保ち民衆の幸福を求ると能はざるなり、其れ然り宗教も政治も其目的同一なる故、政治上より之を云へは、宗教は政治の一部分と云ふへく、又宗教上より之を云へは、政治は宗教の一部分と云ふべし、斯の如く宗教は政事の一部分にして、政治は亦宗教の一部分なるを以て、宗教も政治も共に主權者の命令に由りて定むべきものにして、主權者は即ち此二者を制定するの權力を有するものなり、故に主權者は命令を以て一國の宗教を定め、臣民をして悉く之を信せしめざるべからずと、且つ上にも論せしか如く、善と云ひ惡と云ふは、本來一定の性質あるにあらずして、唯其時

の社會の事情に由りて定るものなる故、宗教の善惡良否も亦本來一定したるものにあらずして、唯た其國の事情に適するとき適せざるとに由るものにして、即ち其國の事情に能く適するときは、之を以て良宗教と稱すべく、之に反して其國の事情に適せざるときは、不良宗教と稱すべし、故に若し主權者が其國の事情に最も能く適したる宗教を定るときは、臣民は必す之に信服せざるべからすと論して、國教の設定を主張せり、

斯の如く氏が鋭意熱心に王政の民政に優るを論し、國教組織の自由信教に勝るとを論したるもの、豈に故なくして可ならんや、蓋し氏はチヤールス二世に臣事したる人なるが、當時王政大に亂れて民權盛に行れ、人々自利私慾の爲めに相爭ひ、議論紛々歸着する所なかりしかば、氏は以爲らく是れ國民を統率するの君主無く、民心を統一するの國教なきに由るものなりとて、其王政の衰勢を挽回せんが爲めに、王政の民政に優りたるを說き、國教の自由教に勢りたるを論せしものならんか、之を要するに氏の宗教論は實際上より論したるものにして、學術上より之を分解し、或は之を總合して其原理規則を講究するものにあらざる故、之を稱して宗教哲學と

は云ふべからざるなり、然るに此弊を一洗して、學理上より宗教の本心、宗教の原理等を說明せしものはロック氏なりとす、

ロック

氏はホッブスに繼て經驗哲學を主張すれとも、其論する所ホッブスとは異りて、人心の上より宗教心の本然なるか經驗なるかを攻究して終に宗教心の本然にあらずして經驗より來るとを證明せり、曰く一たびデカート氏が人智の本然說を唱へて以來、人皆之に和して復た一人の之に疑問を起すものなかりしかは、氏は之に反對して人の心意は本來無思無念にして、恰も一點の墨痕なき白紙の如きものなれは、宗教心も神の存在に關する觀念も本來心意に有するものにあらすして、教育經驗の力に由り後天的に生したるものなり、何となれば彼本然說を主唱する人は、其證として何の地の人間にも本來同樣の性質、即ち神の存在に關する思想を有することを示すなれとも、是れ甚た不當の事にして、何れの地の人間にも本來神の思想を有するものにあらす、若し何れの地の人間にも本來神の思想を有するものならは、世に無神者のあるへき筈も無かるへきに、さは無くして世には往々無神論者もあり、且

つ或る種の如き之に向て神の存在等に關するとを聞かゞるときは、啻に之を知らざるのみならず、却りて之に就て寄異の觀念を惹起するとあり、若し又神に關する觀念は一般に有するとするも、甲人種の神の觀念と、乙人種の觀念とは大に異なりて、同樣の性質を有するものにあらず、是れ宗教心の生して後、教育經驗の力に由て生したるとの明確なる證左にあらすや、然らは宗教心なるものは吾人が教育經驗するの際、種々の性質、種々の思想中より最高最上のものを取り集めたるに過ぎず故に宗教心なるものは其實吾人の想像上より生したるものにして、本來確乎不拔の原理として存するものにあらすと、

若し斯の如く論するときは、神は眞實に存在するものにあらざるかと云ふに、氏は之に答へて曰く、世界の構造と吾人の組成との兩點より推究するときは、神は必ず存在せざるべからざるなり、何となれは世界と吾人とが存在する所以のものは、必ず之が創造者たる原因なかるべからず、既に原因あれは其原因の原因と次第に遡りて其初を推討するときは、其第一原因たる神の存在するとを知るなり、然り而して其第一原因たる神は最高最上のものならざるべからず、何となれは神は世界と

吾人を創造したるものなれは、世界と吾人とよりも遙に勝るものにあらされは、之を創造すると能はざればなり、且つ又神は最上の智識と、最高の思想とを有するものならざるべからざるなり、何となれは吾人すら既に幾分の智識と思想とを有するものなればなり、況んや之が創造者たり主宰者たる神に在ては、最上の智識と最上の思想とを有するは論を待たざるなり、若し神に智識思想なきときは、如何にして吾人の如き智識思想を有する者を創造せんや、無より有を生するは論理の許さゝる所なれは、神に智識思想なしとは云ふべからざるなり、

前述の如く氏は神の存在を否定するものにあらずと雖も、之に關する思想を以て先天的のものとなさずして、後天的經驗の結果なりとせり、是れ氏がホッブスよりも其論を一歩進めたる所なり、ホッブスは神の存在を空無に歸せしことあらざれとも、之を以て道理上研究すべからざるものとして、理外に抛棄して唯た實際便宜上の爲めに神を設るものゝ如く論すれとも、ロックは之を以て道理上研究すべきものとせり、又ホッブスは天啓を以て道理智識の外に置けとも、ロックは之を以て道理研究の中に置き、万有自然の道理を以て研究すべきものとせり、彼の獨斷的宗教家の如き

は天啓を以て神の秘密不思議となし、吾人の智識道理を以て知るべからざるものとなせとも、ロックは之に反對して天啓は万有自然の道理に反するものにあらずして、吾人の智識道理を以て研究し得べきものなり、若し智識道理を離れて之を知らんとするときは、啻に天啓の何物たるを知ると能はざるのみならず、併せて神の存在をも知ると能はざるなり、是れ恰も肉眼にて見るべからざる星を見るには望遠鏡を以てせよと云ひつゝ、之を見るに當りては却りて兩眼を閉ぢて望遠鏡に向へと云ふに異ならざるなり、神は吾人の肉眼にて見るべからざるもの故、之を見るには天啓の望遠鏡に由りて見さるべからざるなり、然るに之を研究するに智識道理を外にせよと云ふは、兩眼を閉ぢて望遠鏡に向へと云ふと奚そ、異ならんと論せり、以上述ふる所之を要するにホッブスもロックも共に經驗説を唱へたる人なりと雖も其宗教上に於ける實際の議論に至りては、二氏大に異なる所あり、ホッブスは政治と宗教とを混同して、共に君主の命令に從ふべき者とせられしもロックは之に反して若しホッブスの如く政治と宗教とを混同するときは、是れ恰も神と人とを混同し、天と地とを混同するが如く、誤謬の議論たるを免れずと云へり、又ホッブス王者の命令

歴制に由りて國教を一定するの必要を論したるも、ロックは之に反して宗教の自由を説きたり、曰く國民をして宗教自由を得せ令るは、却りて一國の平和を保つに便あり、何となれは若し君主が國民の信向上にまで立入りて、過多の關渉を加ふるときは、之が爲めに己の好む所の宗教を捨て、或は己の好まざる所の宗教を信ぜざるべからざるに至る故、決して一國の平和を保つと能はざればなり、故にロックは宗教なるものは政治上に於ても、一國の安寧秩序を妨害せざる以上は、成るべく自由にせざるべからずと云へり、氏の此自由宗教説に同意せしものはシャフツベリー なりとす、

シャフツベリー氏

氏は倫理上に於ては道德の本心なるものを説きて、ホッブスの自利説に反對せり、且つ氏は哲學上倫理學上並に宗教上其他の點に於ては、ロックと大に其説を異にすしとも、信向の自由を説く點は之に同意せり、即ち氏は人の信向の自由を妨るとは、恰も重荷を負ふたる牛馬が御者の命を受るが如く、歴抑の最も甚しきものなれば、必ず、之を自由にせざるべからすと論せり、

夫れ然り然りと雖もロックは道德心なるものは敎育經驗の力、換言すれは人造に由りて生するものなりと論すれとも、シャフツベリーは之に反して道德心なるものは敎育經驗の力を待たずして、自然に發する所の自然的本性とせり、曰く道德は恰も天地間の万物が和合して、爰に美を生するが如く、人間の心の和合に由りて生する所の美なり、人間の心の中には種々の性質あるも、其性質能く調整和合するときは自然に美を顯はして高德の人となるなり且つ人心には二個の反對性あり一は利己心にして一は社交心なり利己心は己れ一人の健全幸福を目的とするものにして社交心は公衆の健全幸福を目的とするものなり其利己心も社交心も各々調和適合して其中庸を得るときは自然に完美を顯すものなれとも然れ共一方に偏倚して過不及ある時は忽ち美德を失ふに至るへし第一利己心に就きて之を言はんに人は己れの衣食住を求めさるべからす、又健全無病無生活を求めさるへからさる故、利己心とさへ云へは一も二も無く悪く悪とは云ふべからず何となれば利己心とても能く其中庸を得て一身の健全幸福を謀るときは自然に其美を顯して所謂德と稱するとを得べければなり之に反して利己心其適度調合を失ふ時は吾

か心に不滿足不幸福を得て自然の美德を顯すと能はさるべし第二社交心に就きて之を言はんに社交心も能く其調和適合を得て其場合と其事情に適合する時は吾人の滿足幸福を得べしと雖も若し之れに反して其中庸を失ふ時は吾が心に不滿不快を生するなり故に道德上の賞罰は吾が心の上にありて若し一方に偏して心の調和を失ふときは不德となりて吾心に不滿不快を感し若し之に反して心の調和を得て完美を顯すときは吾心に快樂滿足を得るなり之を要するに道德は人心の調和に由りて生するものにして而かも其調和は敎育經驗の力を借らず自然に起るものなれは道德の本心は自然に生するものと云はざるべからず

又氏はホッブスの宗敎上未來の賞罰を立て以て治國平天下の好方便と爲せしものに反對して曰く賞罰は宗敎の眞面目にあらす賞罰を以て人を德に導かんとするは恰も兒童を導くに笞と砂糖とを以てして善事をなせは砂糖を與へ悪事をなせば笞を加ふるか如し斯の如き賞罰を以て人を德に導く宗敎は是れ野蠻社會の宗敎にして又之を信する人は文明有智の人にあらずして無智無學兒童の如き人なり斯の如き人は成るべく敎育して眞正の宗敎を信する樣に爲さゝるべからす

而して眞正の宗教は其骨髓愛の一點にありて愛を以て心の調和適合を謀らざるべからす、故に耶蘇教の如き完全なる宗教は人に教ゆるに愛を以てせりと論せり上にも既に述べしが如く氏はホッブスの國教主義に反對して宗教の信向は各自の自由に任かせ政府の敢て干渉すべきものにあらずと論したれとも然とも宗教の政治に關する部分にては必す政府の干渉保護を受けざるへからすとて僧侶の教育寺院の廢立等のことは政府の干渉保護すべきものとせり、

氏は又宗教と道德とを一致して分離すべからざるものとなし、宗教なきときは道德は立つへからす、道德を立つるには必す宗教に由らざるべからず、動もすると世には宗教は未來の幸福を說くものにして、現世の幸福を說かざるものゝ如く思ふ人あれとも、是れ大なる迷信にして、宗教なるものは未來の幸福を說かんよりも、寧ろ現世の愛を說き以て道德を幫助すべきものなり、又世には往々無神論を唱へ、此世界を以て不完全不快樂不幸福の境界と誤認して厭世脫俗に傾くものあり、是等は實に現世の道德を害するものにして、此世界幷に吾人の價値を知らざるものと云ふべし、然るに有神論者は此世界を以て神の創造とする故、此世界は實に完全快

樂幸福の境界となり、隨て此世界に於て現世の道德を構成することを得るなり、若し人此世界に於て道德を修めんとすれは、此世界の規則に己が一身を托すべし、此世界は自然に調和適合して一大美觀となるべき樣に神が創造したる故之に己が一身を托すれば、心は自然に調和適合して美を顯し以て有德の人となることを得べしと論せり、氏は又宗教上の奇跡怪談等は必すしも人の信向を導くものにあらすして、却りて人の信向を破るものなり、何となれは奇跡怪談は世界の規律を破り、世界の調和を亂すものなればなり、此世界に規律あり調和ありてこそ、初て之を統一する一大意志即ち神の存在することを知るべけれ、然るに之に反して此世界の規律調和に一致せざる奇跡怪談の如きものゝ存するときは、却りて神の存在を拒否し其極現世の道德をも打ち破るに至るべし、野蠻人の信向を導くには奇跡怪談を用ふるの必要あれども、文明人の信向を導くには宜に益なきのみならず、却りて害あるものなり、畢竟奇跡怪談を以て人を導くは恐怖を以て人を導くものに異ならざれば吾人の決して信向すべきものにあらずと論せり、

氏は又此世界に惡の存するとの理由を說明せんが爲めに、ブリュノーの說にライプ

ニッツの説を加へたり、曰く吾人一部分の有限の心を以て見るときは惡あれとも、世界全躰の無限の上より見るときは惡あるとなし、何となれは此世界は既に正と善との二者より成立するを以て其全躰の上より見れは極て完全優美にして、決して惡のあるべき筈なし、然るに吾人は世界全躰の眞相を洞見するの明無くして、徒らに區々たる有限の心を以て、彼我の區別を立て、是非の差別を附する故、惡なきに惡を生し、不幸なきに不幸を見るに至る、故に吾人は宜く世界全躰の上に眼を注き、世界の規律に一身を托して道德を修め、神の救助を受けて以て眞正の快樂幸禍を享有すべしと論せり、實に卓見と云ふへし、

ジョン、トーランド (John Toland)

ジョン、トーランドは道德的宗教を主張したる人にして、彼の耶蘇經典中にある事柄は一として道理に反すること無く、又道理を以て吾人の知ると能はさるものにあらすして、世人の以て不思議と稱する奇跡怪談の如きものも、其實不思議にあらすして普通の道理を以て説明することを得べしとせり、是れ前にロックか道理と天啓とを區別せしめ以て、氏は更に一歩進て天啓は道理に反するものにあらずして

道理に一致したるものなり、吾人が神の存在を信し宇宙の眞理を知るは、天啓に由れとも、吾人が已に之を認て以て天啓とする以上は、是れ即ち道理に由りて認め、道理に由りて信するものにて、決して道理に反するものにあらず、何となれは信すると云ふことは道理を以て心に了解するとなる故、若し道理を離れたる天啓あるときは、吾人は之を信すると能はざれはなり、世人は神の性德神の創造力等は吾思想に畫くと能はざる故、之を不思議若くは奇跡と稱すれとも、如何なる奇路にても不思議にても、吾人の思想にて了解すると能はさるものにあらす、既に吾人の思想に領解するとを得る以上は、之を理外の理として神の秘密に附し去るべきものにあらず、故に經典中にある奇跡怪談の如きは、其外觀は道理に反したるものゝ如くなれとも、其裡面には道理を含蓄するを以て、人智の進歩と共に其道理世に現れ、昨日まて不思議とせしとも、今日は既に道理を以て説明するとを得るに至れは、今日尚ほ不思議とするとも、他日必す道理を以て解釋するとを得るの時あるべし、且つ基督の教を立るや、其初極て單純なるものにして、道理を離れたるものにあらざれとも、其後猶太教其他の異端邪説の之に加り、しより、終に奇跡怪談を其中に見るに

至れりと、前にも述べしが如く、信するとは道理を以て心に了解すると云ふとは道理を以て心に了解すると故、決して道理に反したるとにあらずとするときは、彼の愚者の信向の如きは、一見すれは道理に離れたる忘信迷想の如くなれ共、然れとも愚者は愚者相應の道理を以て之を了解する故、其信亦道理に反したる者に非ずと云ふべし、

此の如く道理と信向とを結合して、愚者は愚者の相應の道理を以て信し、智者は智者相應の道理を以て信すると云ふときは、道理を分て愚者の道理と智者の道理との二にせざるべからず、然るに道理なるものは確乎不拔一定不變のものにして、之を二分して、一は愚者の道理、一は智者の道理とすべきものにあらず、若し之を分て二とするとを得るならは、論理の規則數學の原理をも亦分て一は愚者の原理、一は智者の規則とせざるべからす、然れとも論理の規則數學の原理の如きものは、何人も一樣不變のものにして、人と時とに由りて異るものにあらす、例へは二と二とを合すれは四となると云ふ如き眞理は愚者も智者も同一にして決して異なるものにあらざるか如し、以て氏の所論の不可なるを知るべし、余思ふに一脉道理を以て信向に一致せしむると云ふ道理、一定不變の道理ならざるべからず、知識の程度に

隨ひ其人相應の道理を以て信向と一致せしむべからず、若し其人相應の道理と信向とを一致するときは其信は尙ほ迷信忘想たるを免れず、見よ世の愚者が地震を以て鯰の所爲に歸し、月中の斑點を以て兎の餅搗とするにあらずや、是亦其人相應の道理を以て信すると故、其信は道理に一致せりと云ふて可なるか、豈に斯くの如き理あらんや、

前陳の如く氏の說は信向を以て道理に結合せし故、理外の理なるものは世に存せずやと云ふに然らず、凡そ理外の理なるものは無上完全の神力に由りて顯出したるものにして、吾人の智識を以て知り得る道理よりは、一層完全至極のものなり、然れとも其完全至極の道理は、万有自然の道理に反するものにあらす、又吾人の智識を以て信すると能はざるものにあらず、何となれは理外の理なるものは万有自然の道理の先導となり、之をして其理を一層强固なら令るものなればなり、之を神學上にて道理的理外說と云ふ、以上述る所之を要するに氏は道理敎を立て、ロックの天啓道理の區別に基き更に歩を進めて天啓と道理、換言すれは信向と道理との結合を謀りたるなり。

マーチユーチンダー (Matthew Thndal)

マーチユーチンダーの宗教論は、トーランドの宗教論よりも一層勢力ありて世に用ゐられたり、氏曰く凡そ眞誠の宗教なるものは諸般の宗教に共同して有するものにして、人間の性質に基因して成立ちたるものなり、而して其教たるや道義德行を躰として成立ちたるものにして、其道義德行上の作用は事物自然の規律に隨て發顯するものなり、且つ事物自然の規律は即ち神の意志なる故、自然の規律に隨て發顯する所の道義上の行爲は、取りも直さず神の意志に隨順する作用にして宗教の骨髓之に過ぎず、又神は最上至極の完全躰にして、其意志の目的たるや吾人の本性に幸福を賦與し吾人をして之に達せ令るにある故、吾人か之れに從て幸福を求るは吾人の免るべからざる必然の規律なり、此規律の外、神は吾人に何物も賦與せざる故、吾人の本性は幸福を求るの外なし、而して此の本性は人類に共通して普通なるもの故若し此の本性に反して他の事を敎るものあらは、是れ眞誠の宗教にあらずして、迷信妄想たるを免れず、去れば宗教上に天賦の本性に反したる行爲あるは畢竟之に從事する僧侶が己の私利を計る爲めに實際不必要なる數多の儀式風習

を設け、以て人の信向を買はんとせしに因るものにして、神の意志を曲げたるものと云ふべし、

氏は又論して、曰はく、基督出世以前にありては宗教は吾人天賦の本性に基きて德義を本とする眞誠の宗教と迷信妄想に掩れたる不正の宗教と混同してありしが基督の世に出るに當り氏は其區別を立てゝ迷信的宗教を捨て、眞誠の宗教を取り、別に一新機軸を出せり、故に基督教は先の所謂玉石混合の宗教に對すれは新宗教なれども其實基督教は從來曾て世に存せし所の宗教に種々の弊害の加りしものを除去して其本源に復したるものなれば、之に對しては新宗教にあらずして極て舊き宗教と云ふべし、斯の如く基督は宗教を改良して其弊害を除きし、かども、年月の移るに隨ひ、復び僧侶の私利を計る爲めに種々の弊害を生し迷信に陷りたり、(中世羅馬法王の權力盛隆なりし時の如きを云ふならん)

右に述へし氏の說は、他の宗教改革家の喜て雷同する所なり、宗教改革家は當に曰く、凡そ宗教なるものは其始に當りてや、至極純粹なるものにして、一點の弊害もなけれとも、中古に至り徒らに儀式風習の多く加るに及び、終に宗教の眞相を失ふに

至れり、偶像を寺院に置くが如き事も、其初代に行はれしとにあらず、見よ釋迦耶蘇等が、其教を弘るや、專ら人の德義心に訴へて、之を信せしめし故、偶像を置くの必要なかりしかとも、世の澆季と凡々人々の道心輕薄になりしかは最早古代の如く純粹の信向を維持すること能はずして、或は寺を建て或は偶像を置て其信向を導くに至れり、故に之れを改革せんには須く中古に生せる所の諸種の弊害を除き、其本源たる純粹の有様に立ち歸らさるべからずと、彼の耶蘇教の一派たるクエカー宗の如きは、全く之れを實行して洗禮婚姻等の儀式をは悉く除去せり、之を要するに宗教改革家の說は新に一宗を開くにあらずして、復古に過ぎず、斯の如く中世に起りし所の儀式等を悉く除去して、其初に復るときは、所謂老子が大道廢れて仁義ありと云ひて、勉めて太古に復せんとせしに異ならずして實際行るべきことゝも思はれざるなり、故に余は將に言ん、宗教創始の時と今日とは社會の有樣も人心の有樣も全く異なる故、宗教創始時代に偶像其他儀式風儀なかりしとて、今日又之れを廢するの必要も無し、さは云ふものゝ今日現存せる諸種の儀式も中にも不必要なるものも多くあることなれは、今後の宗教改革者は此兩點に眼を注き、以て過不及

なきの改良をなさゞるべからざるなり、

ダビッドヒユーム（David Hume）

前述の如く、英國にてはヒユームの前に當りて、トーランド及チンダー等の諸氏出てゝ、道理上より經典を解釋して、耶蘇教を道理教に變せんとするや爰にヒユーム氏出て懐疑教を唱へ、是等諸氏の說を駁擊せり、氏は哲學界に大なる影響を與へて從來の哲學思想を一變せしと同しく、宗教界にも亦大なる影響を與へて從來の憶說を一掃せり、其說たるロックの經驗論に基きて懐疑的に宗教を論し道理上に宗教を立るの非を論したれとも、全く宗教を以て無用視したるにあらず、

從來世間の有神論者の神の存在を說明するや、二個の憶說に起因せり、其一は曰く一個格段の神の存在すること并に靈魂不滅と云ふとは數學上原則の如く明晰確實にして動かすべからさる定論なり、此世界の本源に遡れは必す神ありて存在せさるへからす、又靈魂も肉躰と共に滅するものにあらすして、未來永遠に向て不滅ならさるべからずと、其二は曰く宗教は人間固有の天性に基くものにして、太古人文未開の時より世に存して人々之を信じたれは神の存在疑ふべからず、然るに下

りて中古に至るに及て、僧侶の利己心の爲めに無用なる儀式裝飾を用ゐて、眞正の宗教をして朦昧ならしめたりと雖も、是れ一種の弊害なり、人間自然の性より出すものにあらずして、人爲的のものなれば、時に臨て改良すべきものなり、之を以て宗教を自然の天性に基かずと云ふべからずとヒユーム氏は之を駁して曰く、第一の憶說に由れば、神の存在并に靈魂の不滅は教理上の原則の如く確乎動かすへからずと云ふと雖も、是宇宙間の事々物々を以て神の存在を證明するものにして、最も大なる誤謬と云はざるべからず、何となれば神は世界の創造者なれば、世界の外にあるものにして事々物々は世界の內にあるものなり、故に事々物々に原因あればとて、是唯世界內のとなれば、之を以て世界外にある神に及ぼすとは論理の許さゝる所なり、有神論者は神の存在を證明するが爲めに此世界の變化を見れは一定の目的に向て進み、此世界の順序規律を見れは日月星宿の運行を初とし、四時晝夜の順序に至るまて毫厘の過誤なくして、何人か之を前定せしものゝ如く思はゝるものは、他なし、神が此世界を造り、規律を定めしに因ると云ふと雖も、是大なる謬論なり、何となれは其證明たるや事物の結果を見て原因を推すとなるが、一躰原因結果

の關係は吾人か事物經驗するの際甲乙二者中一の事が常に他の事に伴ひて起るを認るときは、習慣にて甲事が出れは乙事は必らす現れさるを得ざるべしと思ふべく幾度も風吹きて艸木の動くを見れは、風は艸木を動かす原因なりと思想の連合に由り、習慣の久き、終に其間に原因と結果とを結合するに至るなり、故に經驗の範圍內に於ては原因より結果に論到し、結果より原因に遡廻するも強ち無理にはあらされとも、神の如きものは、是迄吾人の經驗せしものとは全く類を同ふせざるものなるに、其關係を適用するは、大なる誤謬なり、又有神論者は此世界の規律の一定して、正きものは是れ自然に然るにあらすして、必す神の創造に由りて然るなりと云ふと雖も、此の如き規律は必すしも神に由りて生するものにあらすして、自然に生するものと云はざるべからず、畢竟此世界に斯の如き完美なる規律ありとするものは、其規律を以て、神の創造とする故なり、然も仔細に觀察するときは、此世界ほど不完全不快樂なるものあるとなし、人間と云ひ動物と云ひ日月と云ひ天地と云ひ、一として、不完全ならざるなし、斯の如き不完全なる世界を以て完全なる神の創造なりと云ふは瞞着の言にあらすして何ぞや、

又有神論者は靈魂不滅と云ふことを以て、確乎として動かすべからざるものなりと論すれども然れども靈魂なるものは吾人の肉躰に結合して其働作を呈するものにして獨立的の作用を爲すものにあらざれば、肉躰を離れて死後永遠に生活して、或は天堂に上り、或は地獄に下るの理あるべからず、是に因りて、之れを思へば、有神論者が靈魂不滅の理より未來の賞罰を立てゝ人を勸懲するは、却りて宗教の本義を破壞するものと云はざるべからず、何となれば、未來の賞罰を立てゝ神を信するものは死後天堂に上りて永久無限の快樂を享け、之に反して神を信ぜざるものは死後地獄に至りて、永久無限の苦痛を受ると云ふと雖も、一躰吾人の爲せし善惡の行爲は、有限の時間中にあるものなるに、之れに酬ゆる賞罰として永久無限の時間中に快樂苦痛を享くると云ふては、原因の大小と、結果の大小と比例せざるにあらずや、且罰なるものは其目的人をして改心せしむるものにあらずや、然るに未來永久の神の罰ありとしては宜に人をして改心せしむると能はざるのみならず、却て其目的に相違すると云ふべし、若し又實際神に賞罰の權力ありとすれば、其有无の不明瞭なる未來幽冥世界に於て之を實行せすして明瞭なる目前現在に於て之を

實行せざるべからず、然るに吾人は之を明瞭なる現在に於てすら見ることなし、況んや、不明瞭不確實なる未來に於ておや、果して然らば賞罰なるものは吾人の空想に過ぎずと云ふべし、又有神論者は、吾人の精神は必す未來永遠に向て希望する處あるものなりと云ふことを以て靈魂の不滅を證明すれども、吾人の心は必すしも未來永遠の生活を希望するものにあらずして、却りて此世界を去りて幽冥界に到ることを嫌忌するものなり、故に此事を以て靈魂不滅の證とすべからず、夫れ然り、然らは靈魂不滅と云ふことは、到底道理上證明することを得ざるものにして道理以外の事となさゝるべからず、之を以て道理以外の事とすれは、吾人の說明し得べきにあらざる故、經典上の天啓に由らざるべからす、經典は實に吾人の說明し得ざることを天啓によりて敎ゆるものにして、道理以外のものなりと論して、道理を以て宗敎を論するものを攻擊せり、

若し右の如く宗敎を以て道理に起因するものにあらずとするときは宗敎は如何にして起りしやと云ふに氏曰く有神論者は之を以て人間自然の天性に起因するものとすれとも深く考案するときは宗敎なるものは決して道理に基き自無の天

性に因るものにあらずして吾人の相像の上より生したるものなり、換言すれは吾人の恐怖心と欲望心との二者に起因するものなり、吾人は既に此二心を有する故に天災地變の知るべからざるものに遭遇すれば、之を恐れて神の所爲に歸し又不幸不快の境に沈淪するときは、他に由りて其救助を享けんと欲するものなるが故に此に想像上神を立て、之に依頼して己の安全幸福を得んとするなり、此の如く神は吾人の相像上より起りたるもの故、隨て吾人の想像を以て神の性質及形狀を構成せり、故に古代の神は概ね人間の形と性情とを有して一も道理に合したる所なく全く多神教にてありき、

此の如く宗教は人間の相像上より起りたるもの故、多神教は一神教に先ちて發達せざるべからず何となれば若し人一たび一神教の道理を知るときは、再び多神教を信ずることなし、然れども、知識の程度尚低くして、一神の理を知らざる故最初多神教を信せり、是恰も古代工作を知らざる者が幾何學を知るの理なきが如く、古代の人が一神教を知るの理なきなり、古代の人は神は人間同樣に形骸を有し、愛憎の情を有して、其數も多くわると想像せり故に斯の如き神は天地万有を支配すること

とあたはざるのみならず、却りて之に支配されて、生滅盛衰の變化を受けたり、此等の神こそ各國神代史の由て起る原因とはなれり、

此の如き多神教が人智の進歩に伴ふて一神教となりたるは、是れ道理に依りて成りたるにあらずして、下の如き事情に由りてなりたり、曰く人には己を愛すると云ふ我情あるが爲め他人の神よりは己の神を高尚にし、他の種族の神よりは己の種族の神を高尚にするより、終に最上の一神教現れたり、又神を成るべく丁重に敬禮するときは多くの愛を受くべしとの想像よりして、其神の品位を高め、終に最高獨立のものに變せり、故に多神教變して一神教となるは、道理によりてなるにあらざるなり、夫れ然り、斯の如く多神教は變して一神教となると雖も、其一神教は一神教に止らずして、一神をして、多神の相を取らしむることあり、何となれは吾人が深く一神教の一神教たることを、知るときは、成るべく、之に親接して愛を享け救助を得んとの希望心生するなり、斯の如き希望心生するときは、聲も臭もなき無色無形の一神に向て愛を求め救助を享ること能はざる故之を代表する所の偶像を造りて、之に向て、愛を求め救助を享けんことを望み、遂に偶像を以て所歸の本躰とするに

至り、多神教と同一のものとなりしも、其多神教は外觀こそ古代の多神教に同すれども、其精心は大に異ならざるべからず、之に由りて、之を思へば宗教歴史なるものは實に多神教との間に往復循環しつゝあるものなりと論せり、

氏は、又多神教と一神教との可否優劣に就ては、理論上にては之を論せずして、實際上にては多神教は一神教よりも優れたるものなりと云へり、其意如何となれば一神教は獨一無限の權力を有する神を立て以て吾人の精神を束縛壓制すれども多神教は其の儀式外形こそ野蠻なるも、一神教の如く壓制の極端に走り人心を束縛するの弊なればなり、故に多神教は一神教よりも優れりと、(余謂ふに氏が斯くの如き說を吐きしものは、全く中古時代舊教の盛んなるに當りてや、法王は神の威を一身に利用して人心を束縛し君主を抑制して或は宗教軍を發し或は無益の土功を起して驕奢壓制至らざることなかりしを見て遂に斯くの如き說を爲せしものならん)

又從來の有神論者は、宗教は道德に關係したるものにして、宗教なきときは世の道德を維持し又之を進歩すること能はずと論すれとも、ヒュームは之に反對して、宗

教は決して世の道德に關係したるものにあらず、何となれば、神が賞罰を立て、善行をなせば、之を賞し、惡行をなせば之を罰すると云ふか如きは、曾に世の道德を幇助せざるのみならず、却りて人をして戰々兢々として、神に媚を呈し、只管ら愛を求めんとして、其局自己の獨立を失ひ卑屈に陷らしむるもの故、世の道德を破壞するものなれば、なりと論せり、是に至り氏は其論を結んで曰く、斯の如き宗教は其起元より見るも、發道より見るも、又理論より見るも實際より見るも決して道理に合したるものにあらず、

以上は氏の宗教上に於ける議論なるが、氏が有神論者の宗教は道理に基きて起りたるものなりと云ふを駁して、宗教は道理に因り、生したるものにあらずして、人の空想に基くものとせしは、至當の議論なれとも、宗教には微頭微尾道理の分子を含まずと云ふに至りては、實に極端の論と云はざるべからず、何となれば宗教は氏の言ふ如く、其初め人の空想より起りたるものなる故、其當時には道理なきものなるにもせよ後には必ず幾分の道理加りて人に眞理として崇められるゝに至るものなればなり、然り而して其後に生する所の道理は宗教の內部より發生せしものなる

か、將た外部より附加せしものなるか容易に知るべからずと雖も、深く考察するときは其外部より附加したるものにあらずして內部より發生せしものなることを知るに足る、之を譬へば艸木の初めて萠芽を發するや、未た枝葉も花實も無しと雖も、漸次生長するに隨ひ、從前あらざりし枝葉も花實も自然に生するに至る、然れども其枝葉や花實や外より之を加へたるにあらずして、曾て萠芽の中に含蓄せしものか、發生したるものなる如く、宗教も其初めには道理も眞理もなけれども漸次發達するに隨ひ、道理も眞理も共に生するに至る、是其初起の時に既に含蓄せしものが發生せしこと明なり、

斯の如く宗教の道理は其內部より發生したるものなるにも拘らず、ヒユーム以前の有神學者は外部に向て道理を求め、其の道理に由りて宗教を組成せんとせし故、ヒユームは力を奮て之を駁擊せり、然れとも惜ひ哉ヒユームの駁擊せし所は、唯外部の道理にありて內部の道理にあらざるなり、氏にして今一歩進みたらんには、內部の道理を發見して眞誠の宗教哲學を組織せしものなるに、氏の之を發見するとは能はざりしとこそ却りて、獨逸宗教哲學者の驥足を伸す所とはなれるなり、之を要

するにヒユームの懷疑教出でざればカントの批判教も出でざるなりカント批判教出て、宗教哲學の光彩を增せしは偏へにヒユーム懷疑教の餘澤と云はざるべからず、之を喩ふるにヒユームはカント氏の先驅をなしたるものなり故に、ヒユームの哲學上若くは宗教上に於ける功勳は決してカントに讓らざるなり、世の哲學を學ふものは宜く此に注目すべきなり、

以下は再ひ前に回りて獨逸宗教哲學者の系統を講述せん、獨逸宗教はカントに至り初めて眞正の道理に基きて解釋するに至れり、カントはライプニツ、ウォルフの兩氏に影響せらるゝ所なきにあらざれとも、右兩氏の說は曾て英國に入り、一時該國有神學者の由りて基く所となりしが、ヒユームの有神學者の說を駁するの際共に之を破斥し盡くしたれば、カント更に兩氏の上に立ちて此に一新機軸を出し、眞正の宗教哲學を講するに至れりされば是より直ちにカントの宗教哲學を講述すべきなれとも其前にレシングの學を略辯するを要するなり、

レシング (Gotthold Ephraim Lessing)

氏は當時學者の宗教論の淺薄なるを排斥して、一歩之を進て高尙にせり、乞ふ其說

の概略を述べん、氏は當時の有神論者が宗教の眞理は經典中にありとして經典を開て眞理を求めんとするの誤謬なるを破斥すると同時に又世の懷疑學派が經典若くは傳說中に存する道理を破斥し去りて、以て道理ありと信するの非なるを論破せり、氏の考に由れば、耶蘇教の眞理は經典中の文字言語を以て拘束せられたるものにあらず、言語文字に拘束せられたるものは、死物にして眞理にあらず、眞理は必す言語文字の外に存するものなり、又歷史傳說の如きものに向て、決して得べからざるものなりと論するものゝ如し、氏の言に曰く經典は耶蘇教にあらずして死物なり、何となれば、經典の世に出るに先て既に宗教の道理存し、經典なきも宗教は道理に由り、信向に由りて成立するとを得ればなり、又縱ひ「バイブル」を以て宗教の寶典とするも其中には道理のみ存するにあらすして不道理のとも無しと云ふべからず、且つ「バイブル」には表面の文字と裡面の意味とあることなれば之を指して直ちに宗教と云ふべからず、斯の如く「バイブル」は直に宗教にあらざる故、世の有神學者が之に向て道理を求めんとするの誤謬なるを知ると同時に又世の懷疑學者が只管ら其論鋒に傳說若くは經典に向けて之を駁擊するの非なるを知る、凡そ歷

史上の事實若くは經典上の證據は、宗教者が他の反對者に對するときの證據となるに過きずして之に因りて宗教發達し、之によりて宗教成立するにあらす、故に縱ひ歷史か經典の上に基督が死人を蘇生せしめしとあるも、又基督が自ら呼て神子なりと云ひしとあるも未だ之を以て基督を神子なりと信すると能はず、何となれは吾人の宗教を信するは、經典に因るにあらず、歷史に因るにあらず、直ちに吾思想に訴へて眞理なりと思ふものを信するにあれはなり、宗教必然の道理は吾思想中にありて存するものなり、如何ぞ歷史經典中に存する二三の事實が、斯の如き必然の道理を定るを得んや、果して然らは歷史經典なるものは、宗教の本源にあらざると同時に之に由りて、道理を求むべきものにあらさるなり、（氏が經典を捨てゝ吾思想上に道理を求めしは恰かも我國の佛教者が鎌倉以前にありては其研究する所唯だ經文上の言語詞章の間に彷徨して其外に眞理の存することを知らさりしかは此に禪宗起りて佛教從來の研究法を變し經外別傳不立文字直指人心見性成佛と說くに至りしものと其跡を同ふせり亦奇と云ふべし）

斯の如く氏は世の宗教者が經典若くは歷史に就て宗教の道理を發見せんとする

を破すと、同時に、又懐疑學者が經典若くは歴史のみに就て之を駁するの非なるを破し去りて、此にライプニッツの元子發達論を宗教上に適用して、宗教心の發達を説明せり、レシング曰く凡そ發達と云ふことは外界の卿木のみに局ることにあらずして、内界の思想も亦發達するものなり、既に内界の思想にして發達するものなるときは、其中に含有する宗教思想も亦發達せざるへからず、而して眞誠の宗教思想なるものは至りて深遠高妙なるものなれとも、之に反して世の經典幷に歴史上に顯示せられてある宗教は、極て淺薄卑近なるものなり、斯の如く二者相異なると雖も、是れ唯だ發達の度を異にするのみにして、其躰異なるにあらざるなり、故に世の淺薄卑近なる宗教中には、彼の深遠高妙なる宗教の道理を含有するを以て淺近なる宗教も、終には進て深遠の宗教となるなりと論して、古來の學者例へはスピノザもライプニッツの如きも、未た之をして一致せしむると能はさりし、道理的宗教と通俗的宗教とを一致せり、

前述の如く氏は眞誠の宗教の人の思想に基くものにして、歴史經典に基くものにあらずと論したれとも歴史經典を以て無用物となせしにあらず、何となれは深遠

高妙なる宗教は、歴史經典の上に基きたる淺薄なる宗教に由りて發達する者なれば、淺近の宗教は取りも直さず深遠高妙の宗教を開發する所の階梯なる者なり、氏は又「ペイプル」は人の宗教思想を發達せしむる教育書なることを示さん爲に、人間一生涯を分ちて三段となし、第一期幼稚の時には永遠の目的なくして、唯眼前の快樂を望むの外なし、第二期少年の時には五感の快樂を望むの外未來の善若くは德若くは名譽等を望むものなり、第三期成年の時には別に未來に望を有せすとも、社會に處し他人に交るには互に約諾を守り、義務を重せさるへからさることを知るなり、斯の如く人の發達には三段ある故、其發達を幇助するには經典を用ゐるに如かずと論して、經典の人世教育上に必要なる所以を述へたり、

以上論する所、之を一見すれは氏の説は極て淺薄なるか如くなれとも、其實高尚なるものなり、何となれは氏の目的は淺近の宗教信者を導きて高尚ある宗教信者となさしめんとするにありしを以て、高尚なる身躰を掩ふに却りて淺近なる衣服を以てせしものゝ如し、夫れ然り、氏は斯の如き目的なりしを以て世の無智輩の信ずる天啓奇跡等も、之を眞正なりと許容し以て高尚なる宗教に誘導するの媒介とせ

り果して然らは世の天啓顯示教に入智發達上には極て必要なるものにして、若し之なきときは無智の輩は變して高尚の宗教に入ることあたはさるなり、是れ氏が「バイブル」は人の宗教思想を發達養成する爲めの要具として、神の說き置きしものなりと云ふ所以なり、

氏は又論して曰く、太古にありては人々一神教を信奉せしも、人智漸く開くるに隨ひ、臆說想像を以て種々の道理を附加し終に之をして多神教に變形せしめたり、然るに神は一神教の隱滅せんとを恐れ、早くも「イスラエル」人即ち猶太教の人種を教育して之を保持せしめたり、是天啓教なり、(舊約全書に載する處の神は絕對的理想的の神にはあらされとも多神教にはあらすして唯一神教なり是れ「イスラエル」人の世に信奉せし神にして此神は更に「イスラエル」人に由りて保持せられたりと云ふへし)之に反して別に天啓に由らずして知識道理に由りて一種の宗教を信奉せしものあり、波斯人希臘人等の如き是なり、斯の如く二者其基源を異にすと雖も後には互に相依り相助けて天啓教の長所を以て自然教の短所を補ひ、自然教の長所を以て天啓教の短所を補ひ、此に一種高尚なる宗教出てたり、然るに一方には彼の

天啓教を奉する「イスラエル」人中にイエスクリストなる者出てゝ、先きの天啓教よりは一層深遠高妙なる宗教を組織するに至れりと、斯の如く宗教は其の初め眞理なりと信せられしも、後には之を不眞理なりとして排斥するものあるに至りたりと雖も、宗教には深遠高妙なる道理あるものなれば、之を開發し之を發達せしめて以て淺薄の宗教より高尚なる宗教を開示するに至れりと論するなり、

斯の如く氏が世人の排斥して顧みさりし所の宗教を取りて、其中より一種高妙なる眞理を發見せんとせしは、余の最も敬服する所なり、何となれは凡そ普通の人は過去未來を洞見するの明なき故、唯常に世人の言ふ所作す所に隨ひ世人の是非する所を是非し、世人の好惡する所を好惡し、世人が眞理とすれば之を眞理とし、世人が然らずとすれは之を然らずとして、獨立一定の見識なきもレシングの如きは之と異り世人が不道理なり不眞理なりとして排斥せし宗教を取りて、其中より一種高妙の眞理を發見せんとせし其卓見は決して常人の及ふ所にあらさるなり、余は常に吾國學者社會の有樣を見て每に嘆する所のものあり、見よ吾國維新以來文物大に勃興して、舊來の面目を改めたりと雖も、之と同時に吾國在來の文學技術は頓

に衰へて人の之を顧みるものなく、特に宗教上の事に至りては概して之を研究する者無く、縱ひ之あるも徒らに表面のみに止りて、裡面に如何なる眞理なるかを知らず甚きに至りては宗教を以て無用の長物とするに至る、豈に嘆ずべきの至りならずや、斯の如く世人は之を捨てゝ顧みさるも、學者は之を取りて研究すへきの責任を有するなり、何となれは世人の捨てゝ顧みざる宗教も、取りて之を研究するときは、其中より如何なる眞理を發見するとあるや未た知るべからす、縱ひ眞理を發見することなきも、之を研究せんが爲めに一種高妙の智識を獲得することなしと云ふべけんや、例へば佛教中にある須彌説の如き、之を現今の地球説に比すれば一見不理なるが如くなれども、深く之を研究するときは其内に或は古人未發の眞理あるも未だ知るべからず、又古來希臘に行れし天文説の一種たる彼の大陽を以て宇宙間の熱を吸收し、復ひ之を宇宙に反射するものなりとの説をも研究して其中に就て眞理の有無を正さゝるべからず、果して然らば世の學者たるものは現今の道理のみを以て甘んぜず、進て其反對の地に想像を廻らし、一種特別の眞理を發見せさるべからず、

固有の宗教心を開發せしむる方便媒介に過ぎず、而して人を教育する目的は未來の賞罰を以て、爲すべきものにあらず、して、人間自爲の天性を開發するにあり、故に未來の賞罰を以て、外部より教育する宗教の如きは、深遠高尚の宗教にあらずして、吾人本性の道德心若くは道德心を開發するものを以て、深遠高尚の宗教となすなりと論せり、斯の如く氏の説は當時の説に反して、眞誠の宗教は吾人の心中に固有する宗教心を開發するにありとせしは、全く理想的宗教論にして、ヘーゲルの理想論を喚起するの端緒を開きたりと云ふへし、凡そ世の理想的宗教を説くものは唯理想の一方に偏して、外部の事情、例へば天啓の如き經典の如き儀式の如きも、悉く拋棄すると雖もレシングは之を拋棄せすして、内部の宗教心を開發するに必要なる媒介として宗教の精神と外形とを結合せり、されは氏の説は天啓と道理とを一致せしめ、天啓を以て道理を開發する手段とするにあり、而して從來の有神學者の説には、耶蘇を以て人間とするものと、人間以上の者とするの兩説ある中レシングは前説を取りて耶蘇は之れを經典に徵するも、歴史に考ふるも人間以上の者にあ、

らずして人間なれば、其教ゆる所も亦人間の倫理道德に外ならずと論じて、人間の倫理道德を基礎とするものを以て、眞誠の宗教とせり、之を要するに氏が宗教心を以て人心内に胚胎するものとなし、之を開發するを以て宗教の目的と論ぜしは、實にカント及びヘーゲテを喚起する指導者たるに相違なきなり、

上來陳述せし所に由るにレシングの説はライプニッツの説に關係あるは勿論中にも往々スピノザに關係する所あれば、其大略を左に陳述すべし、

レシング、は一切万有は神を離れて成立するものにあらずして、神の上に成立するものなれば、万有の本躰は即ち神なりと説きしは全くスピノザの万有神教に由りしものなり、又神と此世界との關係に就て、氏は神を以て外部の上に立てずして主觀の上に立て、二元の上に立てずして一元の上に立たり、故に神の世界に及ぼす關係は、遠く此世界を離れたる外部の上より及すにあらずして、内部より及すものなりと説きしも、亦スピノザの説に基きしものなり又レシングが外部の目的論を排斥せしことも、亦スピノザに一致する點なり

次にはレシングのライプニッツに關係する點を陳述せん、レシングは上にも述る如

外部の目的論は排斥したれども、然れども内部の目的論は之れを取りたり、是ライプニッツの目的論に一致する點なり、ライプニッツは神が此世界を創造する時、既に來々万々世の後に至るまで其目的を定めたれば、吾人は其目的に隨て進向せざるべからず、然れども外部の目的に隨ふにあらずして、神が吾人に賦與せし所の一定の規律に隨て進向するものなれば、即ち内部の目的に隨ふて進向するなりと、是レシングの内部目的論の由りて基く所なり、

又レシングはライプニッツの原子は個々に獨立して發達するものなりとの説を取りて、個人の發達完全を説きたり、之を譯言すれば、吾人は自然の本性を發達して一個人の完全を得るを目的とするものにして、個人にして完全に進めば社會も之に從て完全に達し、社會の完全は一個人の完全を發達したるものに過ぎず、是を以て道德も宗教も其目的たる三個人の完全發達にあり、而して此の完全なるものは無限のものにして、一朝一夕に達し得べきものにあらず、幾多の歳月を經て初て達し得べきものなれば、吾人は本と無限の生活を有する故、幾度と無く生れ變りて之に達せざるべからずと論ぜり

レシングは又自由説と必然説との中必然説を取りたり、是スピノザに一致する點なり、然れともレシングは必然を以て神の豫定に歸せし故ライプニッツにも一致する所ありと云ふべし、ライプニッツは自由論者なれとも通俗の自由論とは異りて必然的自由論者なれば、必然を以て神の前定とするものなり、されはレシングの必然説と異なるとなくして一致するものなり、

之を要するにレシングの宗教論はスピノザの万有神教并に必然因果説にライプニッツの天帝豫定説、並に原子發達論を加へて組織したるものにして、其長所は人間に固有する宗教心をば、教育の媒介に由りて開發するを以て唯一の主義となせしにあり、斯の如く氏が宗教心を以て人間固有のものとなし、眞誠の宗教は之より發達するものなりと論ぜし、故カントは之に據りて主觀的宗教論を學理の上に立てたり、抑も當時の宗教論は極めて淺薄にして、具るに足るべきもの一もなき有樣なりしかば、レシングは之を貶斥して、斯の如き淺薄なる宗教を取るよりも、寧ろ保守的獨斷宗教を取るに如かずと云へり、カントも亦斯の如き淺薄なる宗教論をば悉く排斥して、此に新なる道理的批判宗教學を組織せり、されは近世期の宗教哲學

はカントに至りては初めて完備なりと云ふべきか、

カント氏宗教哲學

カント氏の宗教哲學を講するに當りて、先つ氏が哲學の全系に就て其梗概を陳述せざるべからず。氏は近世哲學中興の祖と稱せらるゝ人にして、自家獨得の見を以て從來の哲學を論破し、新に一機軸を出して確固たる基礎の上に一家の哲學を組織したるものなり。勿論氏が哲學の起因は其以前の諸説に基つきたるものなれども從來の哲學たる其基礎の鞏固ならざるか爲に、往々論點の動搖を免かれざりしかば、氏は更に堅牢なる基礎の上に其哲學を築きたり。蓋し氏以前の哲學は概して二派に分れ、一を獨斷學派と云ひ一を經驗學派と云ふ獨斷學派に於ては人の知識道理は正確なるものにして總て思想上に顯はるゝものは決して疑ふへからざるものなりと假定し、經驗學派に於ては之に反し凡て外界の事物は眞正なるものにして之によりて生する所の知識は決して誤るとなしと假定し各其哲學を組織せり。此の如く一は思想を確實なりと獨斷し、一は經驗を眞正なりと假定し、以て其論法を進むるが故に、各一方に偏するの弊あり、從て其論礎亦極めて鞏固ならず、彼等

は思想は正確なりと信じて思想其者の如何を知らす經驗は誤謬なしと考へて經驗其者の成立を顧みず、是に於てカントは此等の欠點を看破し、一新面目を哲學界中に開きたり。但し氏の以前に在りて英國のヒューム既に此等の弊を破斥し、以て一の新說を立てんとを企てしも、惜むべし其說遂に懐疑に陷り、完全なる哲學を組織するを能はざりき、又當時佛獨等の諸國に於ては、其初め高尚なりし哲學も、漸次通俗に傾き淺近に流れ、委微振はさるの有樣となりしが、カント出てゝ此頽勢を挽回し、尙一層高尙深奥の度に進めたり、之に加ふるに氏は從來論爭の絶ゆるとなく調和するを得さる兩學派を折衷し、其相一致する點を發見し以て兩者を成立せしむるとを得たり。以上の諸點は即ちカントが近世哲學中興の稱する所以なり。

茲に主觀と客觀とあり、經驗學派は曰く、主觀は客觀に附屬し常に之か爲に支配制限せらるゝものなりと、獨斷學派は曰く、客觀は主觀に屬し、常に之か爲に支配制限せらるゝものなりと、其說全く相反して氷炭相容れさるの有樣なり、カントは此兩說を折衷し、主觀的の我心は實際上より云へば、自由の力を有し、外界の事物を制限し得るものなり。然れども理論上より論するときは、主觀は客觀の制限を受け、外物

を待ちて初めて成立つものなりとす。故に氏の哲學は理論と實際との二方より成り、其理論に屬するものを純正道理批判(純理批判)と云ひ、其實際に屬するものを實際道理批判(實理批判)と云ふ

純理批判より見れば吾人の心は外界の制限を受け、外界の事物我心に入りて初めて知識を生す、故に外界は能動にして內界は所動なり、又實理批判より云へば主觀は能動にして、自由の力を有し、外界を支配するとを得るものなり。且つ理論上に於ても主觀の我心は外界の材料を待ちて始めて知識思想を生するものなれども、其所謂知識には主客兩觀を含有せり、何となれば吾人が一物を一物として認識するとを得るは主觀の我と客觀の事物と結合して成り立つものなればなり、而して其外物を認識する所の力は、我心內に先天的に存在せるものなり。此の如くしてカントは知識經驗は如何にして生するものなりやと云ふとに論及し、以て從來諸家が假定せしものを尙一層深く批評審査するの目的を以て講究せり。故に氏の哲學を批判哲學と云ふ。又氏の哲學を稱して超理的哲學(Transcendental philosophy)とも云ふ。超理的とは吾人が我知識を以て外界の事物を研究するに、外物其者の本躰に到

れば思想更に一歩も進むを得ず、却りて後ろに反戻せらるゝの感あり。故に物の本躰は思想外に超然たるものにして、吾人の知識は只外界の現象を包括するに過きず。然れとも亦敢て物の本躰は我知識を以て全く捜索すへからさるにあらす、唯我知識は現象と本躰との境界に達して其本躰あるを望見するのみにて其境遇に超入すると能はさるなり。

又カントの説によるに吾人の知識には形と質とあり、即ち知識其者を組立つる所の形式と、之を満たす所の躰質とありて初めて知識を生す。而して其所謂形式は先天的に存在する者にして、躰質は五官を經て入る所の外界の現象是なり。故に知識は主客兩觀相結合して生するなり。氏は又心を覺性悟性の二種に區別し、其二者に亦何れも、外界より得來たる後天的のものと先天的に内界にあるものとの二種ありとす

先つ覺性に就て云へば、吾人が五感の媒介を經て外界の事物を感覺するとを得るは主觀に於て時間空間の先天的形式あるを以てなり。論者或は時間空間を以て外物に屬するものなりと云ふ人あり。若し果して外物に屬するものならば外物の滅

すと同時に時間空間も滅すべし。然るに吾人の思考中に於て外物の悉皆消滅して宇宙無一物の世界に達すと云ふとは、之を考へ得べきも、時間空間の消滅は到底考察するを得す、而かも如何なる事物を問はず之を感覺するには時間空間の關係せさるものなし。故に時間空間は吾人の心ある以上は決して心を離るゝとなく外物に先ちて先天的に存在し、且つ無限なるものなり。又氏は悟性の上に十二の原則を考定し、吾人か感覺上或は見或は聞き或は觸れて其冷暖堅柔方圓等の性狀を結合し以て單一となし此れは一物なりと吾心に認識する力は先天的に存在せるものなりとし、覺性悟性共に先天的形式の存在せるとを論定せり。然らば外界の事物は吾人の知識を以て果して知り盡すを得べきか、曰く否吾人の知る所のものは唯其外物の現象なり。外界はもと時間空間より成立てるものにして、其時間空間は吾心の上にあるものなれば、若し吾心の上に時間空間を取除かば外物なる者なし。故に外界の現象は吾心の上に顯はれたるものゝみ。然れども其外物の本躰に至ては吾人の知識の得て窺ひ知る所にあらずと。

カントの純理批判に於て論する所は大略上に述ふる如くにして、神及び道德上の

元則の如きは悉く之を排斥せり。然れども實理批判に於ては主觀を以て能動とするものなれは神なるものを立て道德上の原則も定めたり。故に純理批判と實理批判とは二者全く相異りて恰も一手の表裏を顯はすが如し、而して此兩者の結論を爲せしは斷定批判なり。此實理批評は宗教哲學に關係を有するを以て後に細論せんとす。今聊かカント氏の年代を擧くれは氏は千七百二十四年四月廿二日を以て獨逸クンヒベルフに生れ、長して其地の大學教授となれり。其著書たる純理批判は一千七百八十一年に、實理批判は千七百八十七年に、斷定批判は千七百九十年に發行し一千八百〇四年二月十二日を以て逝逝せり、

次にカントの宗教哲學を講する前に、尙ほ從來宗教哲學上に各哲學者か論究せし順序を略述せさるへからす。抑も宗教を哲學的に論せしは、スピノザを以て其嚆矢とす。勿論哲學全躰の上より云へはデカートを以て首祖とすと雖も、氏の宗教說たる耶蘇教に立つる神を用ひしものなれば哲學として考ふへき價値なし。然るにスピノザは宗教を哲學の上に說き純然たる宗教哲學を組織したるものなれば、氏は實に宗教哲學の元祖と云はさるべからず。氏の說は萬有神教の上に論し出し、世界

万有の本躰を以て神とし、物と心とは神即ち本質の上に顯はれたる屬性となし、其結局吾人が神に達するは、外に求むるを要せず、內に省みて心內の極めて高尙なる道理的思想の本躰に到達せば、神と合一するを得べしと云へり。故に氏の說は內界に偏する宗教論となり、外物の上に欲念を起すことを抑制し、單に內界の淸淨高尙なるを願求し、遂には遁世脫俗の風を起さしむるに至れり。之に反して外界に神を立てしはライプニッツなり。氏は外界に神の存在することを唱ふれども、其說耶蘇教に說た所とは異り、道理を以て基本として耶蘇教の神を說明せしなり。故にスピノザとライプニッツとは其說全く相反して內外の區別をなし、前者は厭世に過き、後者は樂天愛世に傾くに至れり。されば耶蘇教者はライプニッツを得て大に理論の援助を得たりしが如く、佛教家もスピノザの說を研究せば得る所亦た鮮少ならざるべし。此の如く二氏反對の地に立ちて相爭ひしが、其の以後漸次淺近に流れ、獨逸にありてはウォルフ、ライプニッツを襲ひしも却て淺薄となり、佛國も亦た絕えて高尙なる理論を唱ふるものなく、英國の唯心派は元來宗教上に高尙の理論を用ひざるものなれば其說亦通俗にして元より論するに足らず。然るにカントの以前に當りて再び宗

教哲學をして高尚ならしめ、カントに向て其講究の道を開きしものは英國のヒーム獨逸のレッシングなり。ヒュームは從來の諸説を悉く破壞し、消極的に其道を開きたり。當時英國の唯心論者は經典の文字、歴史上の事實等の上に於てのみ論爭せしがつ學理上の論究も亦た以て信するに足らずとして之を排斥して曰く吾人が實際上神ありと信するは原因結果の規則に從ひ、此世界あれば必す能造の神ありと想像するに由るものなり、然れども是れ吾人が目擊する陜隘なる境遇に於て經驗上發見せし事實のみ、之を如何して經驗外なる神の上に適用するを得んやと其極遂に懐疑に陷れり。然れども氏が破壞せし爲に再び新基礎の上に更に新家屋を改築せさるを得ざる場合とはなれり又レッシングは之に異りて積極的に其道を開き、直接にカントの前驅をなせり。氏は從來の學者が文字言語の上に宗教を説きしを非難し、宗教は文字の上にあるにあらす、宗教は尚ほ深き處に宗教の源ありて、經典は深き處にある宗教心を開發する所の教育的のものに過きずと論せり。是即ちカントに講究の道を與へしものにして。レッシングが宗教は人心中にありと云ひしをカントは更に進みて如何にして人心中に宗教の存在するかを講究し、確然たる基礎の上に學理上の組織を以て宗教哲學を論せり。

カントの哲學は之を批判哲學と云ひ、其宗教哲學も亦批判的宗教哲學と云ふ。而してカントの説は其源スピノザ、ライプニッツより起りしものなれば批判的宗教哲學はスピノザに始まりてカントに至り大成したるものと云ふべし。

上來カント哲學の大綱を説きしが、其宗教説たる大に知識論と關係するを以て、今將に其宗教哲學を講せんとするに當りても尚幾分か知識論を混説せさるへからす。依て余は既に其大躰を述へしにも關はらず、茲に再び其要を摘みて知識論を講すべしカントの知識論は二種の本原より成る、一は經驗一は思想なり。即ち物と心との二、者相待ちて知識を生するなり。英國のロックは知識は經驗より來るとなし、獨逸のライプニッツは知識は本來具はれる者となせしが、カントは此兩説を取り、一部分は本來具有し、一部分は外界の經驗より得るものとせり。而して心を覺性（感覺）と悟性（理解）とに分ち、二者共に先天性ありとす。即ち覺性には時間空間を以て先天性直覺となし、悟性には十二の原則を以て先天性思想とす。抑も吾人の心にありて

感覺經驗する所のものは時間空間の先天的直覺を離るゝとなく、又吾人が一物を一物として認識するは個々別々なるものを集めて一物とする先天性思想の力あるを以てなり。故に外界の現象は總て心の上に顯はれたるものなりとす。是に於てカントの說唯心論に傾くか如し。然れども外界の事物其者の本躰に至りては吾心を離れて獨立現存するものなり。其本躰と現象との間には之を隔離する所の一の界線ありて吾人の覺性悟性此點に至れは直に反戻せられ、如何なる方法を以てするも本躰の如何は到底之を窺ひ知るを得ず。然らは其本躰の實存せりと云ふとは如何にして知るを得へきか。氏は之に答ふるに消極的の說明を以てし吾人の知識、本躰を探らんとして其界線に至り反戻せらるゝは此れ本躰の反射にして本躰あるの證なりと。然れともカント哲學の難問は實に此點にありて。本躰は知るべからざるものとしなから何を以て其の現在を知り得るか既に知るを得ず何を以て知識の本躰との分界をなすや氏も亦此點に於ては其說明十分ならす。氏の考によるに凡そ現象あるものは必す其本躰あるへし、吾人の心中に先天の事情あるが故に、能く外界の事物を經驗するとを得、之と同しく物の現象ある以上は又其本躰の存

せさる理なしと然れども或る場合に於ては氏自身も其本躰の存在を疑ひ判然其決心なきか如く見ゆる所あれども、兎に角結論に至りては本躰ありと定めたり。

カントの純理批判に於ての長所は先天性の存在を吾人に示せしにあり。こは既に其要領を畧述せしが、思想上の先天性には氏は十二の原則を立て之を數理によりて證明せり。數理は君人が實際上外物に適用するに際し、若し事實の數理に齟齬するとあるときは必す事實を以て誤れりとし、再ひ事實を驗するに皆然らさるはなし。例せば三角の和は二正角に等しとは吾心に具はれる數理なるが、若し事實上三角の和二正角に仝しからざれば必ず事實に於て誤りあるを發見すべし。是れ數理は吾心に固有して普遍必要の性質を具ふるものなればなり。普遍とは何の處何の場合を問はず同しく一と二と合して三となれるが如く、必要とは如何にするも必す然らざるを得さるものを云ふ。此普遍必要の二性を具ふるものを以て眞理とす。今二と三とを合して五となるは正確疑ふべからざるとなり。然れども二と三とを五に比するに五を以て多しとす。何となれば實際上二と三とを其儘にして五となるにはあらず、二と三とを吾心に於て先天的統合の力を以て統合して五となるが